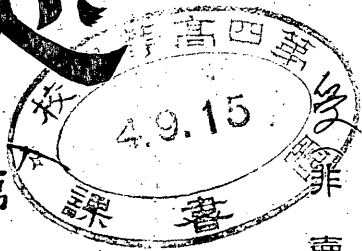


明治四十四年六月二十五日發行

# 北 辰 會 雜 誌



第六十一號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第六十一號目次

論 說

○戯曲「人の一生」を通じて見たる

アンドレ・ユフの人生觀……………鈴木敏也

○「クオーツチス」に於けるチロの

悔改に就て……………野崎生

○三月の日の影……………白い花

文 苑

○青年……………たけを

○唯陽城……………薄穂華

○紫がかった水色の女……………田中正名

○猶太人……………水瓜

○亂調……………百橋蛤城

○折々……………磯路

○四高和歌會詠草……………

○こゝろ……………土屋聆川

○人の眼と我が眼……………三石穂

○四高俳句會句抄……………

時 言

○退くに際し……………宗玄生

○書を劍道部に呈す……………柴野生

部 報

○講演部||野球部||劍道部||遠足部||庭球部

雜 報

○叙任辭令○卒業生送別會○從軍記○寄贈雜誌

北辰會雜誌第六拾壹號

論 說

戯曲「人の一生」を通じて見たる

アンドレ・ユフの人生觀

鈴木敏也

「思索する人間に對する藝術の最高題目は、人間そのものなり」とはウインケルマンの言葉と記憶する。古來幾千歳の星霜を閲し來つた藝術から人間の分子を引抜いたら残る所は眞に落葉たるものであらう。超世脱俗の趣に富む東洋文學、特に淵明、王維あたりの詩賦を見ても、流石に人間の匂がする。まして戀愛、自由、權利、義務などと浮世小路の雜貨店で、事の足りる文字を、萬遍なく隅から隅まで振舞す、泰西文學では束の間も人間を離れる事が出来ない。

凡そ人間の精神状態を大別すると知、情、意の三つとなる。今日の心理學上から云へば、かゝ



る分類は舊式に屬すると云ふ者がある様に人の精神は、しかく判然と區劃し得べき者でない。知に働くも意が閃き、情に掉すも知が動く。血と肉とは附物である。肉を斬れば血が出ることはポーシヤの判決を待つて初めて知り得べき事ではない。けれど血は血、肉は肉と特種の機能を持つて居る。精神状態にもそれ／＼特有の役目がある。物を考へるのは知の働きである。美しいものを見て美しと楽しむは情の働きである、ある目的をたて、それに奮進するのは意志の働きである、しかも互に他の奴隷でもなければ方便でもない。唯人間が知、情、意の寄木細工でない以上は一方を抓めば他方がついて膨れ上る。これが人間の本躰である、それで知が発達しては學術研究となり、意志が堂に上れば道德(廣義)となる、而して情が発露して、其至醇の境に至つたものを藝術と名づける。

文藝は感情の基礎の上に立つて居る。感情の所有者は人間そのものである。吾人の文藝は人間感情の流露に外ならぬ。人間を離れて感情はない、感情を去つて文藝はない。こゝに於て吾人は斷言する、文藝は人間のものである。藝術のための藝術にあらずして、人間のための藝術である。人間を離れての文藝は無意義である。

戯曲「人の一生」は名の示す如く、現代人が日常生活の姿である。無限の空間に人が投げて行く刹那の影である。この文藝の本躰なる人間の生涯を提供し來つて、如何にアンドレエフが批評し解剖して居るかを、考察するのは興味ある問題であらうと思ふ。

## 二、

元來、一個の文學者を捉へて、その人生觀を窺はうとするには、少なくともその代表作を一應通讀した上でなくてはならぬ。僅か二三の作品から、藝術の衣を透して、内に閃めく個人の思想を洞察して、此作家の人世觀はかう、世界觀はかうと斷定するのは、至難の業であり且大膽な振舞と云はねばならぬ。しかし此戯曲は題材が題材だけに、アンドレエフが世の中を何う見て居るか、比較的明確な収穫が得られやう。唯、これを映す我が鏡が曇つて居るのは残念である。

今、戯曲に立入るに先つて、アンドレエフが現れる迄の近代露西亞文學の推移の跡を尋ね、併せて彼れが文學者になつた徑路を、大ざ、つぱながら辿つて見ようと思ふ。

十九世紀の初葉。露西亞も他の歐洲諸國のやうに浪漫派が滔天の浪をあげた。プーシキンやレルモントフの出たのは此時である、やがて其波瀾も収まつたが、爾後、暫らくはこれと云ふ目覺しい出來事もなく文藝の流れは廣漠たる曠野を靜かに行く感があつた。それがクリミヤ戦争と農奴開放とによつて今まで溶々として穩やかに流れて居た水は急にぐる／＼と旋回し初めた。不思議な事にロシヤの文學上の革新はいつも政治上の變動に伴ふて居る。この渦卷の中から現はれたのがトルストイである、ツルゲーネフである、ドストウエンスキーである。やがて第二の波瀾も収まつた、以後千九百三年まではおしなべて、云ひ知らぬ沈滞の空氣がロシヤの空に漲り渡つた。トルコとの戦亂や、東方問題がある刺戟を與へたのは云ふまでもない。而して日露戦争に至るまでの此沈滞時代の社會を、或は鋭い諷刺の筆を以て、或は堪へがたい暗愁の色を以て描寫して居るのがチエホフである。彼れの作品の凡てに「ロシヤ帝國に關しては何事もする必要はない」と云

つた様な、一種の諦めから来る捨鉢な聲が、響いて居る。「進歩、改新に向つて働く人の戸口は固く鎖された。閉された戸の内彼等は懶い時間を費すためにかかるたを弄びウオトカを飲むより外に仕方がない」と云ふ様な倦怠な氣持が溢れて居る。然しチエホフは未來の曙光に對して全く絶望して居たのではない。唯自分の生きて居る中にこそ其黎明の光に浴する事は出来まいが、いつか薔薇色の空が明け放れるに違ひないと思つて居た。夜は意外に早く明けた。チエホフの最後の劇は千九百四年に完成したが、彼は間もなく永久の眠りについた。日本との戦争はまだ續いて居た。が夜の幕は遂に落ちた。激烈な政治上の運動と共に、出版の自由と共に、新興文學は一時に蕾を破つた。新しい花は咲いて、藝苑を紅に紫に彩つた。併しその花の色は鮮かなものでなくて、何となう黒い影を宿して居た。新作家は極端に厭世的で日蝕の色に筆を染めた。けれど太陽のない邦の様に單調な灰色ではなかつた。彼等は叫ぶ、喚く、咒ふ。さはれ「俺達はもう何もする事がない、座つてかるたでもしよう」とは云はない。以前の様な沈滞の風はもう見られなかつた。

アンドレエフの現はれたはかゝる時代である。彼は千八百八十一年にヨリョール市に呱呱の聲をあげた。父は測量家であつたが彼れの幼少の折、世を去つたので若い時から大分苦勞したと云ふ。初めヨリョールの中學に入つたが成績は非常に悪くて操行点が特に低かつたそうだ。横着で、授業時間に教室から引張り出された時もある。が、がらんとした長い廊下は静まり返つて居る。兩側の教場の戸は悉く閉つて、室の中には生徒がぎつしりと詰つて居る。壁を洩れて、さし込む日光に立ちのほる塵埃がきらりと浮動する。そ

れが如何にも神秘で面白く且何となう一種の意味が籠もつて居るやうに思へた」とは彼自身の自白する處である。中學の教師は一人として彼の未來に囑望するものがなかつた。それから彼は聖彼得堡の大學へ入つたが後モスコウ大學に轉じた。彼は大學に居た時から小説の試作をして居た。その處女作はオプナゼナヤ、ゾーシヤ(裸かの人)と云ふので「セーウエルヌイ、ウエーストニク」と云ふ雜誌に送つた。ところが、此作は餘りに空想に過ぎ、異常な事相を書いたものだとの批評と共につき戻された。大學では法律を取めたので卒業後は、ある人の世話で當時小新聞に過ぎなかつた「モスコウスキトウエストニク」紙上の「裁判だより」の一欄を受持つて居た。後、イ、ヅ、ノ、ウイクと云ふ人が「クリエル」新聞に入つた時すゝめられて彼も同じく入社したか矢張り裁判記者としてゝあつた。斯様な風に別段の熱心もなく新聞社の一隅に坐つて居たが、或時ノーウツクが彼に短篇小説を書いて見る氣はないかと云つた。彼は早速筆をとつたが、こんな物は駄目だと云はれた。何でも此作の内容は餘程突飛で、天と地で人が問答すると云ふ趣向であつたと聞く。それで相かはらず彼は裁判記者として平凡な生活を續けて居た。その中にクリスマスが近いた。ノーウツクは今度は小品を書いて見玉へと勧めた「バルカモト、イ、バラシカ」がそれである。新聞の雜録欄を占領して現はれた。彼れは此時初めて署名したと云つて居る。それから時々小品を書いた、又時事に關する雜録も物した。この頃「ニゼゴロドスキト、リストニク」が廢刊したので、その社と協議の上、其讀者に「クリエル」新聞を送る事とした。ゴルキトが前新聞の讀者であつた所から彼れの文がゴルキトの眼に入る様になつた。或日ゴルキトは「クリエル」紙上に、レオニン、ア



ンドレエフの名で書いて居るのは誰かと同社員のアセシヨフの許へ手紙をよこした。そこでアンドレエフはそれは私ですと回答してやつた。ゴルキーとの交通はかうして初まつた。その後間もなく、ゴルキーが瀛車でモスクーを通る機会があつたので停車場では是非逢ひたいと彼の許へ云つて来た。當時ゴルキーの文名は隆々として國內に轟いて居た。アンドレエフは云ふ「自分は規定の時間に駆けつけたが遅れはしなかつたかと非常に心配した、そして嘗て寫真で知つたゴルキーが山羊の仔皮の帽子を冠り、背の高いのに狭い外套を衣て居る姿を認めた時は、胸がどきどきしてならなかつた」と。彼は更に云つて居る。「自分はこれまで小説を作ると云ふ事や、創作の才能に就て真面目に考へて居なかつた、自分がゴルキーに逢つた時、彼れが第一に云ふてくれたのは「君には疑ひもなく文學者たるの才能が具備せられて居る。その才能を棄てゝはならぬ、それに對して君は責任がある」と云ふて懇々文學者の自重すべき事を教へてくれた」

魚は遂に蒼海に躍り出た。アンドレエフは、かくて文學者たるの天職を自覺したのである。

## 三、

戯曲「人の一生」は前後五場に分れて居る。

I 「人」の誕生。

II 戀愛と貧困。

III 「人」の宅の舞踏會。

IV 「人」の不幸

## V 「人の死。

即是れである。而して第一場の初めに人の一生を説いた口上がある。

「人の一生」を人間生活の縮圖とすればこの口上は更にその縮圖である。劇の主人公を「人」と云ふ。「人」は自然が授けてくれた個性の象徴である。室の隅には鼠色ゾロイグの人が立つ。運命とも又神とも云へやう。人の一生につき纏つて居るある大なるものである。アンドレエフは、この鼠色の人を以て、人世の悲哀を代表させて居るらしい。鼠色ゾロイグの人は「人」に對して或は幸福の杯を與へ、或は悲哀の衣を投げかける。彼れは無謀なる望みを人に抱かせてはその無益な努力を冷笑して居る。バンドラが筥を開いてよりこの方、希望しか持たぬ人の身を嘲笑つて居る。彼は人の大膽な自由な心が高く飛上るやうな喜の時も、人の靈が必死の苦痛に鎖されて、心の臓で血のめぐりが留まるやうな悲の時も、勝つ時も、負ける時も、不可抗力と闘ふ時も、その人について居る。彼には始もない終りもない、そして萬能である。

無遠慮な冷淡な鼠色ゾロイグの人は云ふ、

お前達。面白いものが見たさに、笑ひたさに、こゝへ来たお前達。見ろ。聞け。お前達の目の前で人の一生が開けて見せられるだらう。暗い初めにはじまり暗い終りにおはる人の一生だ。その人は初めには居ない、時の無窮の中に不思議に隠れて居る。誰もその人の事を思ふものはない、誰もその人の事を感じてやるものはない。その人が「無」の關門を不思議に打破つておぎ、あと云ふ一聲の叫びに、短い一生の發端を知らせるだらう。無の夜半に誰とも

知らぬ人の手で點された明りが一つ燃え上る。これが人の一生だ。その焔を見る。これが人の一生だ。……

絶間なく時に引づられてその人は否應なしに人の一生のあらゆる階段を通つて行く。下から上へ、上から下へ、視る界が限られて居るので、今覺束なげな足で踏まうとして居る直ぐ次の、階段を決して見る事が出来ない。知る界が限られて居るので明日、次の時間に、次の一分間に、何事があるかと云ふ事を決して知る事が出来ない。そこで盲のやうに無知で、あゝであらう、かうであらうと思ひやりに責められて希望と恐怖とに動かされて、その人はおとなしく運命の鐵案の極めた道を歩いて行くだらう。……

お前達。暇潰しにこゝへ来て居るお前達。死なねばならぬお前達。見ろ。聞け。お前達の目の前に人の一生は水の流れが喜怒、哀樂の色々に、遙かな物怪しみた音響のやうにぐんぐん流れて行くだらう。……

人間生れて地に墜つ。死が早晚その頭上に落ちかゝるのは千古の鐵則である。點された灯は消えねばならぬ。これ萬人共有の点で今更驚くに足らぬ、生の山峽を出で、死の大海に注ぐ一帯の河流は、或は緑き森蔭を侵し、或は花咲く牧場を洗ふ。或は又、古城陵下に月を碎きて咽び、熱鬧の市巷に塵埃を浮べて去る。その經來る所は千變萬化である、一生の波瀾もまさにそれである。時に氾濫して田圃を犯すと雖も、本流は遂に水域以外に出る事はない。沅湘日夜東に流れ去る、しばらくも止まらぬ。生れるものは人の姿と名とを受けて何事も他の人と同じ様になる。こ

れ迄世にある外の人と同じ様になる。他の人の殘酷な運命がその人の運命になる、かくの如くしてアンドレエフは最も普汎的な人の一生を選んだ。榮華の裡に天命を全うする至幸の人を描かずして、一榮一枯の人を寫して居る。

ある男はかう云うた。此劇に出て居るだけの人間の一生は吾々が今日初めてアンドレエフを俟つて知るには及ばない。人が生れて榮えたり衰へたりして、そして最後に死ぬと云ふそれだけの事實ならば、二十世紀の今日、わざわざ大袈裟な芝居を見せて貰はなくとも、厭な程承知して居る」と。けれど「生」と「死」は人生の大なる事實である。人の一生とは離すべからざる事實である。此評家は生死問題が陳腐と云ふのか、劇の主人公の一生の運命があまりに普遍的に傾いて居るから厭だと云ふのか判然しないけれど、唯好悪の情や、新舊の問題で人生の事實を曲げる譯にはゆかぬ。その上アンドレエフが、ことさらにこの平凡な人の一生を趣向としたのはあらゆる世人と餘り縁遠くない、換言すれば世間並にしやうとした用意に外ならぬのであるまいか。彼は嘗て人に創作の目的を聞かれた時

私は人生の眞理を書きます。存在の意義を求めます、私を圍繞する自然界に於ける森羅萬象の眞理を求めます

と答へて居る。以て彼れの創作上の態度が略推察出来る、若し夫れ「人の一生」が果して彼れが言と一致して居るか否かに至つては、作品自身が語つて居る

## 四、

更に戯曲の内部を点検して自分の眼に映じた感想を織込んで行かうと思ふ。

第一場。闇のうちに物皆動かずに居る。怪しげなる衣を纏へる老女等の鼠色の影が朦朧と見える。時々産婦の叫聲が老女等の立話を貫いて響く。老女は「畜生の方が産は軽い、死ぬにもわけなく死ぬ」とか「妾は生れたのを洗ふが好き」と云へは他は「死んだのを湯灌する方が好き」だとか云つては靜かに笑つたり、或は産婦の叫びを評して「あの聲の中には夜がある、果てない暗い森がある、絶望と恐怖がある、寂しさで陰鬱がある。叫聲など、云ふものは單調で美でない」などと云ふ、又嬰兒を評しては「何でも直に泣き出して、言つて見れば何もかも自分のためにちやんと用意がしてある筈だとも思つてゐるやうに見える。また目も見えない癖に親の乳房と云ふもののある事を知つて居る。乳と云ふものゝある事を知つて居る。そしてそれを欲しかるのだね。それから寝かして貰いたがる。それから搖籠へ入れて揺つたり手平で背中をびちや〜と叩いて貰いたがる妙に贅澤だね」と云ふ、初めから此作者獨特の氣重い色が至る處に、ちら〜と閃めいて居る。かくて人は生れた。鼠色の人の手にせる蠟燭は高く燃える。心痛の極もう子なんか欲しがらないと悔んだ、人の父は漸く我に返る。六人の親戚の人達はそれ〜出で、勝手な事を囁り散らしてゆく。

新たに燃え出した蠟燭の火に掛念するものは蠟燭自身と燭そのものである。死の危険の前に据えられた母と、その苦痛に心を轉倒させた父とである。而て人自らである。火の明滅は鼠色の人のみが知る。親戚の人々は「人の一生」と云ふ大悲劇の初まつた事に氣が付かぬ、だから、薄色の絹

布の油の染をとる法や、濕氣のある大い家より暖い小さい家の方がいゝなどと語り合つて居る。

人の誕生と云ふ事實が運命の手によつて「無」の暗い深淵から抽出される刹那、そこに完成せられたものは徒勞だ、無意味だと云ふ考へは起させぬ。人は生るべくして生れて來る。この明白な日常の事實もアンドレエフの頭を透して見ると、人間に通有な寂しい孤獨な、エゴイスタツクな方面が歴へつけるやうに脅かすやうに、惻々として讀む人の胸に迫る。もし夫れ老女が會語

— なせ子なんぞ生むんだらう。あんなに苦しむくせに。

— なせ又生れた子が死ぬのだらう。その方が猶悲しいに。

— そうく、子を生んでは子に死なれて了ふのだね。

— そうして又生むのさ。

の數行に至つては人間悲劇の根本義を遺憾なく曝露した人生の痛切なる批評である。深刻なる諷刺である。讀むわれは冷水を背中から浴せられたやうには、とどする。向ふには作者の暗い笑顔があり〜と見える。

第二場。「人」は漸く長じて青年に達した。「人」は大學に入つて建築學を修めた。そして「物皆明るき、暖かき光を浴びながら甚だ貧しげなる」部屋に住んで桃色の壁の下に仕事もなく、金もなく、唯乾パンと水とで生きて居る。その様を見つけた隣人は「人」とその妻の居ない隙を見計つて牛乳や白麴包を窓の上に置いてゆく。柔い草を床に蒔き。櫛と白樺の葉で壁を飾つて行く。

自然が時を駆つて明るい感情の滿ちた生活を人に齎らすのは青年期である。人が生を切實に自

覺するのは此時である。精神に嵐の吹き荒ぶのも新しい泉を索めるのも此時である。故に青年は外部の迫害、境遇の壓迫に膝を屈する事なく傲然として向上の一路を辿る。

「人」の妻は云ふ。「宿は腕ある建築家なのです。妾は天才だらうとさへ思つて居ます。両親が早く亡くなつて孤になつたのです。両親の亡くなつた當座は親類の人達が世話をして下さいました。處が宿は獨立心が強くて無愛想で人の氣に食はない様な事を云つて物を恩に被らないのですから、間もなく親類が構はなくなつて了ひました。それでも宿は勉強を止めないで、人に物を教へて修行中の費用を爲拂つて参りました。度々食する物がなくなりましたがそれでも大學を卒業しました」。妻は「人」を信じて居る。いつか幸福になるに違ひないと思つて居る。唯職を尋ねめぐんで戻つて来る夫にキスより外になんにもあげないものと云つて獨り小さい胸を亂して居る。彼女は跪いて「宿がお中をすかして居ない様にパンを少し下さいまし、宿が寒がらないやうに暖まりを下さいまし、宿があゝの立派な頭を俯向けずに歩けるやうに仕事を下さいまし」と天に祈る。やがて歸つて来た人は未だ職を持つて居なかつた。昔話の女神のやうな可哀い妻が夫の手助けになり様がないと云つて泣くのを見ては「己はその水晶のやうな玉が恐くてならぬ、なんでも恐ろしい他人が落して行つたやうに思はれてならぬ。成程なんにもない。困つて居る。併しこれから己の拵へる物の話してもせう。己はお前に美しい夢物語をせう、薔薇の花で飾るやうに夢のうちの美しいものでお前を飾ろう」と云ふ。

青年の胸に去來する希望の影は、虐げられるれば、抑へられるれば、いやが上に強大の力を以て反跳する。孤劍此土に落つ。天上天下誰れよくわれを妨げん。目に見るは唯萬里の路である。「人」はこゝに於て勝誇れるものゝ如く運命に向つて宣戰する。

——こらお前は何と云ふ奴だか、知らない。運命、悪魔、人生、何とでも名乗るが、己は今、手套を脱いてお前の足元へ投げつけて、いよく戰鬪を開始するのだ、意氣地のない人間はお前の秘密な威力の下に項を曲げるたらう。お前の石で刻んだやうな面付を見て顫へ上るだらう。お前が厭に勿体振つて黙つて居ると、なんでも恐ろしい困難が、かぶさつて來て、惨めな最後を遂げさせられるものと思ふだらう。併し己はかう見えても膽力がある。力量がある。そこでお前と戰鬪をやるのだ。劍戟を光らせ、楯を鳴らし、打物がお互に頭の上に打つ附かつて大地が震動するやうな工合にやつ附けやう、さあ來い。戰鬪だ、戰鬪だ。人の意氣は昂る。

——もし己が勝つたら、己は世界中に反響のあるやうな歌をうたふだらう。假令、お前の刃の下に、己は黙つて仆れても己はすぐ起き上つて戰ふより外はない。己の鎧に刃物の透る所がある。それは己も知つて居る。併したとへ創を受けて體中が眞赤に染まつても己は力のあり丈けを集めてお前をかう云つて呼かけてやる。やい、人の怨敵、まだ手前が勝つたのではないぞ

「人」は更に勇ましい調子で叫びつゝける

——よしや勇士が戰場に倒れるやうに己がとうとう倒れるとしても、決してお前にその鈍い喜を味はせては置かぬ。己はたつた一聲でその喜を壊してやる。勝つたのは己だ、己だと呼んで

やる。勝つたのは己だ。にっくい敵奴。己は息を引き取るまでお前の威力を承認しないぞ。

「人」の語は漸次静かになつて諾威の濱、フェルドに臨む岩角に居城を築き、石の壁には五彩の窓硝子が箴めて、冬は嵐を外に白熊の毛皮に坐つて金色の白葡萄酒を黄金杯に盛つて」など二人の話は若い感情的な幻影に移つて行く。遂に隣人の残して行つた牛乳やパンを見つけ、果は、頭に解の葉の輪飾を頂き、手拍子をとり舞踏のメロデーを歌ふ。妻は歌につれて巧みに舞ふ。幕は落ちる。

鼠色の人は冷然としてこの様を眺めて居る。先きに妻が祈りをした時は鼠色の人は

——あの願事はとづくに聞かれて居るのだから女は知らないのだ、今朝ある金持の家で紳士が二人この亭主の引いた圖の上に俯さるやうになつて、圖の線を見てひどく喜んで居たのを、女は知らないのだ。その連中が今日一日掛つて、この亭主を捜してゐたが、どう見付からなかつた。人が富を捜して居る様に富も人を捜して居たのだ。あすの朝、近所の者が仕事に出てしまつた後で、この内の門口は自働車が来て留つて、その中から紳士が二人出て来て丁寧な頭を屈めて、この貧乏らしい室に入つて来て、亭主に富と名譽とを捧げるのだ。それを夫婦とも知らずに居る。幸福が人の所にやつて来るのはかう云ふものだ。

と獨語する。蠟燭は一層、明かにもえ初める。無邊際の彼方から吹く氷の様な風が渦を巻いて來てもこの焔をどうする事も出來ぬ。只火影を少しちらつかせるだけである。蠟燭はやはり明るく澄んで居る。けれど音もなく來た幸福は、また音もなく去つて了ふのが人の常である。第三場の舞

踏會に於て絶頂に達した人の幸福には第四場の人の不幸が踵を接して迫る。

第三場は、殆んど客人の會話から成つて居る。邸宅の宏壯に驚き、庭園の廣大なるに驚ける客人は「人」の舞踏會に招待せられたるを無上の名譽として、絶えず「立派ですなあ、豪氣ですなあ」と讚嘆の聲を放つて居る。招待を受けざりし人を憐れむと共にわが身の果報を嬉び「人」の友を賞讃すると共に「人」の仇を罵倒して居る。しかし、晚餐の報知が遅れる、直ちに「私達の内だつて相當の富はありますからね」と目色を變へ「人の金が自分の手に渡つてゆく時、馬鹿正直にしないで然るべくやれば、富と云ふものは造作もなく出來るものですよ」と暗に富者に對して負惜みの語氣を洩らし、その執事出で、食卓に就かん事をすゝむるや忽ち「人は實に心掛けのよい人ですよ」と阿諛の言となる。貪欲者、惡徳者、に對する作者の厭惡と冷罵は眞に蔽ふ處なく現はれて居る。平凡の中に埋没するものは平凡に取り纏はれて自己の平凡を覺らず、知らず／＼その一生を夢のやうに暮して了ふ。舞踏會に招かれた客人の多くは概ねこれである。否、世人の最大多數はこれである。自己一身の欲望に醒醒して社會全般の幸福には風馬牛である。筆は人情の缺陷を穿つて餘りなく、作者が人間批評の獅子吼は吾人の耳を貫く。

第四場。蠟燭は稍崩れて焔は赤く閃めいて居る。人の運命は毎日に下る。七人の召使は一人の老婢のみとなつて居る。十五ある室の中、十二まではがらん洞で、夜晝鼠の跳梁するに任せてある。門前に出した賣家のブリキ札はとづくに字が消えて錆が出た。日が暮れると煙筒の中で風が颯々と鳴る。凡てか陰鬱である。暗い色は人の四邊を立罩めて居る。此間に不幸は用捨なく重つ

た。「人」の一人息子は往來で石を投げつけられて飛んだ怪我をした。今は頽死の床に居る。人とその妻は、子の命長かれと一心に祈る。妻は「人」の祈禱が何となう高慢らしう聞えたと云つて非難する。「人」は己れと神様とは男同士だ、神様だつていやに阿諛する様な卑屈な奴を好く筈はない、それより本當の事を云つて了ふ大膽な、しつかりした人間が好きだ筈だと云ふ。「人」の意氣は未だ衰へて居ないが何處ともなう寂しい影がある。「富なんと云ふものは逃げる事もあれば来る事もある」と云ひながら、昔の桃色の部屋を思出す。人の心に過去が閃めく時は未來の望みが停滞した時か、さもなれば希望の消えた時である。天才の作は不朽であるが自分が作つたものはどうであらうと「人」は考へる。妻が「人」の建てた家の前に若い藝術家らしい男が立つてスケッチして居たと云ふのを聞いて「それでは己の考が人の頭に傳はつて行く。さうなれば世間は己を忘れてもどこにか己を忘れずに居る人が残つて居る」と僅かに心を慰める。が蠟燭は滅る、蠟燭は滅る。美しい河の上を、白い小舟に息子を乗せて漕いで行く。蒼い空はいよ／＼蒼く、透影清き水は水晶のやうである。舟はずん／＼行く。舳先に分けられて茂れる藺がさら／＼と鳴る。人が幸福を夢みて居る間に息子は臨終の息をひきとる。「人」は俄然として我に歸る。われに歸つた人は右手早くさしのべて運命を呪ふ。

——貴様のくれた程の物は己はみな咀ふぞよ。己れの生れた目を咀ふ。己の死ぬ目を咀ふ。己の生涯、喜怒哀樂の限りを咀ふ。己の身を咀ふ、己の目や耳や舌を咀ふ。己の頭や胸を咀ふ。こんなものは何もかもみんな貴様の殘酷な面に叩き付けてやるぞよ。無情極まる運命奴、咀は

れてをれ。永遠に咀はれてをれ。己はこの咀いで貴様に打勝つてやるのだ。かうなつたら貴様も己をどうする事も出来まいが……

嘗て運命に戦を宣言した時の心の誇りはまた消えて居らぬ。けれど傲然として運命を睨視した時にも「己の鎧には透き通る所がある」と人間の缺点を自覺して居た。この悲しむべき自覺は事實となつて現はれた。運命の刃の下に仆れんとしながら「勝つたのは己だ己だ」と叫ぶのは悲壯の極みである。山雨來らんとして風、樓にみつ。テンドレエフは大詰に於て「人」の死を描いた。

第五場。場所は居酒屋らしい。漂ふ如く閃めく薄明りの中に鼠色の人が立つて居る。蠟燭の火は青うなつてあなた、あなたに閃めく。卓を圍む、酔たんぼの影は壁と天井に映つて實際の数より多く見える。それが悉く見るも厭はしい畸形者許りである。

酔たんぼは皆生活の不具者である。頽廢の身に死の恐怖を呼吸して居る人間である。病み疲れた頭には、鬨一重の向ふに口を開いて居る人生の陷穽を恐る／＼描いて居る。この群の正中に別の卓を構へて坐つて居るが「人」である。「生」に疲れきつた「人」の姿である。白髪の手を兩手に支へて深き思ひに沈む。

酔たんぼは蹠踉として目的もなく狂ひ廻り乍ら語る。

——己の脳髓が崩れてゆく。鼠色のぼろ／＼の碎片が片端からはぐれるのた。何の事はない腐つたチイスのやうだ、おまけに臭い。

——あゝ、己の臟腑はみな体の外へ這ひ出しやがる。この様子では己れの体は今に裏返しにな

つて内が外になつて眞赤になるだらう。

——酒は人間に恐怖を授けるものだ。己は朝から晩まで恐怖と云ふ奴に襲はれ通した。

——生活よりも恐怖がいゝ。誰かこの連中のうちで又世の中へ歸つて行きたいと云ふ者があるかい。

己おれなんざ、歸りたくない。こゝにこの儘おれくたばる方がました。

——一体あそこに来てゐる「人」はなせ来て居るだらう。酒でも呑むかと思へばそうでもない、あんな風に蹲んで計り居る。

「人」は眞の生活から、この人生の洞穴、劣敗者の集まる人生の塵溜にやつて來たのである。醉たんばは「人」が眞面目の「生」から來たのを恐れて居る。しかし「人」とても亦、人生の弱者である。同じく生活に寝返りを打たれた劣者である。

「人」は黙つて居る。云へないのだ。「人」の心は口のきけぬ程疲れきつて居る。意氣旺なりし「人」の最後の脈搏は、この沈黙の中に蕭々として打つて居る。

第一場に現はれた老女は又現はれる。「人の生れたのはつい此間であつた」とか「人の邸宅を見廻つたが、荒廢して終つてる」とか、冷かに語り合ふて居る。その中に老女の一人が先きの日の舞踏會を思出す、そしてこゝを邸と思ふて舞踏しやうと發議する。折から伶人が現はれる。「覺えて御出かい」もう直に死にますよ」と踊りつゝ跳ね廻りつゝ、叫く。老女の歌聲に怪しい啜泣の聲が交る、又同時に怪しい笑聲が聞える。舞踏は次第に劇しくなつて喧擾はその極に達する。忽然あらゆ

る聲が止んで一同は停立する、伶人は手に樂器を持つたまゝ立ち、老女等は踊りの途中の姿勢のまま止る。急に蠟燭の火が明くなつた。「人は立上る。屹と背を伸して美しき白髪を後ざまに投げ高く叫ぶ。鋭き怒りと苦痛の満ちたる聲である。

己れの刀持は何處に居る……己の刀はどこに居る……己の楯はどこにある……己は武器をこられて了つた……早く持つて來い……早く……早く……

句はとぎれ／＼に深い沈黙の間を縫ふ、椅子にはばつたり腰を下し、首を軽く後ろに投げて、落入る。蠟燭の火はぱつと燃上つて消える。鼠色の人は靜かにせい人が死んだと同情のない冷たい聲で云ふ。沈黙、靜寂、同じ聲音が舒響のやうに遠くから響く。

靜かにせい人が死んだ!

## 五、

「人の一生」の戲曲的構成を調べて見ると、多くの戲曲のやうに三角形をなして居る。人の誕生アインライツングの發端に初まつて青年期の上昇スタイグリングを経、舞踏會の高潮ハイポフクントに達し、不幸の轉下ウンチエアに下つて死カタストの破綻コラプに終つて居る。しかも全篇を通して悲哀痛苦の影が漲つて居る。アンドレエフの見た人生はあらゆる懷疑煩悶の人生である。人の世の寂しい曠野曠野を流れゆく濁江である。藝術の絶頂に於て、氷雪に鎖されて冷かに光を投げて居る山も現實生活の谷底に於ては、腐れ爛れて、遂には冷灰と塵埃とに歸して了ふ。これが彼れの眼に映した人生の姿であつた。曙の色美しき誕生に立つて燃え上る蠟燭を捧ぐる鼠色の人は既に此時「青みかゝつた燭が今にも地に這ふやうになつて力なく横に



廣かりつゝ顛へて沈む、顛へて沈む」と叫んで居る。あの口上が「人の一生」の豫言である事は云ふまでもない。

翻て、近代文學の傾向を見ると著しく人の一生、——個人思想の發達と似通ふて居る。

佛國革命後のロマンチズム時代は、青年の潑刺たる活氣のある時代である。岩をも溶かす情熱の時代である。ひたすら空想夢幻の境に憧憬し愉悅して深く人生の現實を顧みるに至らなかつた。「人」は餓え乍ら妻とたわいない愛に酔ふて居た。

それが十九世紀の中葉、科學萬能の風潮につれてポジティブイズムの影響をうけてから人の心は現實を痛切に感じ出した。美しい花野の夢を破られて、こゝに悲惨な世相を有りの儘に感得した。舊來の信仰や理想や悉く懷疑の淵に投し去つて云ふべからざる暗愁は、人の心を抑へつけた。自然主義の時代はこれである。まのあたり人生のみじめな事實に接しては青年時代の理想も希望も一場の泡沫と化して、孤獨寂寥の感が身に泌々としみ渡る。生に疲れた人間はかくて黙し乍ら顛へ乍ら沈んでゆく。人はこゝに終る。アンドレフの描いた人生はこれであつた。彼れはこの苦悶懷疑の境を脱し更に努力勇進して、積極的地盤を求めなかつた。否求むるには彼れの思想はあまりに暗かつた。凡てが存在の價値を失つて、萬事が無である、不安である、暗黒である、「人の一生」に現はれたアンドレフの思想はまさにこれである。

一批評家は彼れの小説についてかう云つて居る。

「淵」を讀んでも「ペトロウイッチ」を讀んでも「霧」でも「クサカ」でも悉く未來の暗黒、希望の崩

壊に對する絶望の叫びである。讀者は篇中の人物と同化して同じく苦痛の聲を擧げるのである。自分の讀んだ小説の全部はこの氣持を起させなかつた物はない。作者は同じく世の中に對して非常に陰鬱な考を持つて居る。作者の胸中に流れて居る薄暗い深刻な空氣が彼の手に成つた小説の上に悉く流れて居る。……

自分はこの語を直ちに彼れの戯曲にも移し得ると思ふ。「人の一生」は無論である。「黒假面」でも「同胞への憂」でも、かう云ふ趣が現はれて居るのではあるまいか。「黒假面」の眼目はローレンツ公の心を巧みに解剖して行つて、その複雑なる心理的悲劇を示すにある。その方法としてアンドレフは、主人公によつて催された假面舞踏會に出て來る、幾多の假面を、巧みに取扱つて居る。この假面が公の美しい精神に非常な恐怖と波瀾を起して戀人フランチェスカさへ何處に居るのか判然しなくなつた、そこで遂に二重人格を起して第二の我と決闘した結果發狂して了ふ。此病的な構想や、技巧的な恐怖に對しても吾人はその中に何等かの眞實なる、痛切なる人間の悲哀をしみじみと感得させられる。「同胞への憂」では嶮しい巖壁の突出た鼻に一人の男が絶望のさまで立つて居る。上からも下からも助ける事が出來ぬ、この男は二日間絶食して居ると云ふ。飛降りて死ぬより外はない。巖壁の下に掛茶屋がある。この事件を耳にした人々は巖壁の下に集つて來る、種々な人々が勝手な言を云ひ散らして居る。寫眞屋はレンズを開けて飛降りるのを待ち構へて居る、新聞屋はでたらめにその男の傳記を書いて居る、牧師は祈禱して居る。茶屋はそれらの人で大繁昌である。所が一英人がこの様を見かねて、いつそ一思ひに射殺したら、幾分か苦しみを減する事



が出来やうと叫んだ、すると岩上の男は急に泡食つて、茶店の亭主にもういやだと云ふ。それがために詭計が破れて了つた、亭主は人寄せのため貳拾五圓で雇つて晝間だけそこに立たして置いたのである。これは勿論喜劇ではあるが群集の一言一行にも又全般としても人生のどん底に流れる暗愁の影が遺憾なく露はれて居る。そこに作者の云ひ難い苦惱が籠つて居ると思ふ。

筆は少しく後戻りする。自然主義が高潮に達するや、浪は遂に碎けた、新理想派、新浪漫派が茲に勃然として頭を擡げた。云はゞ一通り世の中の酸いも鹹いもかみわけた人生の頂点である。所謂心靈レ、エイユ、ド、ラ、ムの覺醒である。暗い影に漂へるアンドレエフは以後如何なる徑路をとらんとする。

ロシアの批評家は彼れの作を三期に分けて、(一)寫實的傾向(深淵)、(二)象徴的傾向(血笑記)、(三)寫實的、象徴的傾向(七囚人物語)と云ふ事に殆んど一致して居ると聞く。けれど彼の作は寫實的と云つても現實生活の一部を引ちぎつてありのまゝに書いたものは異つて居る。作を透して奥に何物かがあるやうに思ふ。又象徴的と云つてもポーの如き純粹のシンボリズムとは幾分か行方が違つて居る。(アンドレエフはポーの影響があるとは云へ)。彼は徹頭徹尾、現代人の絶望と苦悶とを胸に宿して革命の兒である。恐ろしい運命の豫言者である。ポーのやうに夢から夢を追ふのではなくて、現實生活がどこまでもつき纏つて居る。而してその感得した所をいろ／＼の形式によつて發露し來るのである。しかも讀者は直下に著者の感想を會得する。電光の如く著者の人生觀世界觀は胸に紫の痕を引く、この点に於て彼れの作を読むは作中の人物の心理状態を讀んだり、仕草や動作こなしを見たりするにあらでアンドレエフ自身の精神をよむのである。戯曲「人の一生」

は彼れの人生觀を臆面なく曝露した点に於て彼れの思想を辿るに最も妥當なものと信ずる

再び云ふ。彼は現實を忘れて夢を追ふ人ではない。彼れの戦慄した暗黒、彼れの恐怖せる運命——醉だんほの住める世界、建術家なる「人」の一生は——現在の我と人間生活の中に存在する暗黒である、運命である。彼れは又人間のあらゆる活動に對して反抗の聲をあげて居る。道徳、宗教、社會、智識を悉く否定した。アンドレエフは云ふ。「あらゆるものを否定する事によつて人は象徴を信する様になる。生活全体を却くる事によつて人は自ら其辯護者となる。余は厭世主義の父たるショーペンハウエルを讀んだ時と同じく今日に至るまで人生に對して信する所である。余は自ら云ふ、茲に一個の人あり、自ら考ふるまゝに考へつゝ尙生活する人ありと、かくて余は結論する。生活は偉大である」と。

かくてアントレエフは到る處に暗い色を見た。けれどチェホフのやうに冷笑もしない。ゴルキ一や、メレシニコフスキーのやうに超人の理想も叫ばない。ふるへながら戦き乍ら、生きて居る。それ故に神と人との距たりを認めたトルストイの影は彼れない。自然と人間との間に鬨を設けたツルゲーネフの姿は彼に見られぬ。彼には物と心の區別しかない。唯生きて動ける神経があるのみである。

生きて動ける神経のみの、アンドレエフの影は作品の孰れにも認められる、否彼れの作そのものが生き動ける神経だとも云へよう。だから「人の一生」には緊張した神経の響がある。此故に先きに云つた如く彼れの作を読むはアンドレエフ自身を読む事になる。

「人の一生」は取りも直さずアンドレエフの見た一生である。従て彼れの人生觀の結晶である。アンドレエフは一個の建築家を通して胸中に蟠る人生の姿を吾人に興へてくれた。鼠色の人も、老女も一面より見ればアンドレエフそのものである。建築家より一段高い所にあるアンドレエフである。彼の「人の一生」に對する態度は運命の神の態度である。故に劇中の人物と共に喜怒哀樂せずして高い處から見下してゐる觀がある。これがためにその描かれた人物は精神活動を有する人形に外ならぬ。人形は彼等の感ずる所を語らずして直下に人の肺肝に迫る。だから彼れの象徴は説明的でない。鼠色の人と云ひ、桃色の室と云ひ（或は赤い笑と云ひ）、鋭い色彩は直ちに他の心奥に映る。映れば象徴の目的は終つたのである。象徴と云ふものは元來、注釋を施すべきものでない。

吾人はこゝに「人の一生」に慄らぬ一二の点を擧げて見やう

人の誕生から青年期に至るまでに今一場あつて欲しかつた。夢のやうな美しい生活、心身共に發達する徑路、學窓から眺めた社會。換言すればあの青年時代か上、下二場に分つて貰いたかつたのである。

それから達意時代に於ける「人」とその子との思想の距りが書いてあつたならばと思ふ。ワルゲ―ネフの「父と子」の中で老父ニコラウスが弟のパウルに向つて

私は亡くなられたお母と喧嘩した事がある。お母は随分ときびしく叱られたけれど、私はど

うしても聞入なかつた。其時、終に私はお母に「あなたに私の言分がお解りに成らぬのは尤もです、私とあなたとは時代が違ふんです」と云つたらお母は大變怒られた。併し私は思つたね、仕方がない藥は苦いものたか呑まねば成らぬと——今度は愈々私等が苦い藥を呑む番が迫つて來た。若い者が私等に向つてあなたは現代の人ではないのです。さア藥をお呑みなさいと云つても不平は云はれまい。

と云つたやうな事件が織込んで欲しかつた、或は古い思想だと叱られるかも知れぬが自分一個の考を憶面なく云へばかうである。それではツルゲ―ネフの模倣になると云ふ人もあらう。が、廬山も向背或は峯となり或は巒となる。詩人の手腕によつて一つの題材も千變萬化するのを忘れてはならぬ。

モウリス、ベリングは「人の一生」の印象記にアンドレエフの戯曲と他の作家の戯曲を比較して丁度、代數と算術のやうだと云つて居る。算術は數を取扱ふが代數は數のシンボルを取扱ふ。他の作家の戯曲は活きた個人なり人間の典型なりを取扱ふがアンドレエフの戯曲は人間そのもの、シンボルを取扱ふと云ふ意味と云ふ。人間そのもの、代數的シンボルとは、さつき云つた人形と同じ意味ではあるまいか。この比較が正當であるかどうか研究したら面白い問題であるか、アンドレエフの戯曲も多く知らず、他の作家の戯曲に對する智識も殆んど零である、今の自分には到底不可能の事である。

最後にアンドレエフが一新聞記者に話したと云ふ座談を誌してこの小論文を結ぶ事にする。

私は親の心として悲しまざるを得ない二個の實例を目撃します。私の息子は始終、兵隊遊びをして時には巡查の真似までします。之れはまだいゝとしてゴルキーさんの息子と來たら一層甚しいです。自分で憲兵隊長となつて友達を巡查や證人と定めてゴルキーさんの書齋で家宅搜索のまねなごしますからな。

これで依つて現代露西亞社會の悲しむべき現象は大人にも、兒童の心理にも現はれて居る事がわかる。スラブ民族の精神生活の中心活動となつて居る、ロシア文學は今後どう發展して行く事であらう。(四四、五、二八)

## 「クォーヴチヌ」に於けるチロの悔改に就て

野 崎 生

「ゲスタスよ天國に入れ主は曰ふ

ゲスタスとは我國の古き神劇に於てはクリストの右の方にて磔刑に處せられたる盜賊の名なり

(オーギユスタン・チエリーのラルモルの贖罪)

濤荒ぶ暗い海を背にした霧の深い北歐の大森林は氣温の低い寂寥な國々——露西亞、諾威、瑞典、丁抹を作して、陰鬱なシンボルは終年秋冬のわれ／＼のムードを適切に示してゐる。國土の

自然は民族の性情に多大の影響を與へる。南歐の陶醉的な甘い戀をする人々は地中海の明瞭な色彩の變化に刺激されての結果とすれば、飽迄沈思的に人生を達觀したやうな人々を生ずるのも北歐の大自然の影響であらう。シェンク・ツチの内觀的反省的分子に富んだ筆はまた露西亞の自然が養うたので、トルストイやツールゲニエフやドストエフスキイ等の筆が、なほショペン・ハワールの影響をうけて大分深い悲哀の暗影を帯びるやうになつたといはれるラテン系の南國の作家のそれに比べて、遙かに峻烈深刻の趣のあるもこれである。

されば技巧の美は虚偽の美であるといふ傾向の盛な時代には、繫縛の一切を捨て、赤條々の「我れ」を曝露したゆき方のこれ等は實に詭向きのものである。シェンク・ツチの「クォーヴチヌ」何處に往く)はねらひこそラ・リテラチュール・モデルヌの見地から遠ざかつてゐるが、例の北方のチユートン系の思想は、遺憾なく表はれてゐると思ふ。

チロは勿論此小説に於ては副人物であつて、ヴ・ニチウスとリヂヤとがいふまでもなく主人公である。而かもこれをおいて、かれを論ずるのは、罪の權化ともいふべきチロが歡樂の境にありて、煩悶を酒に紛らし、肉に於て紛らし、コンベンションに囚はれて忘れてゐたが、一度客觀の美はしさから離れて、主觀の深きに立ち至つて絶對偉力の前に戰慄して、使徒パウロの許に改悔した信仰の歷程の消息が緻密な筆に、いかにも讀者に首肯されるやうに描かれてゐるからである。羅馬の貴族の青年ヴ・ニチウスはウルサスのリヂヤを戀うた。第一世紀中葉のローマはグレンヤの没落時代の跡を追うて道義は頽れ加ふるに暴君チロの專横はあらゆる方面へ表はれて底止す

る所を知らない。使徒ペテロ、おなじくポーロを通して輸入されたヘブライの思潮とクリストの教相は、外界の壓迫に苦悶してゐるロマの奴隸や下級人民の多数の心靈を救うて、徐々にコスモポリタンの思想が世を支配するに至つた。リヂヤは基督を信じてゐる花耻しき少女で、心も顔も美しい。ヴ・ニチウスはこれに熱烈な愛を捧げたが、生れながらに歡樂の裡に生ひ立つたヴ・ニチウスの思索信仰とは素より異つてゐる。リヂヤは衷奥の愛を抑へて、信仰の上からこれを退けやうとした。グレンシャやローマの女は口でいへぬことを地に書く。といふ。ヴ・ニチウスはリヂヤが砂の上に書いた「魚!」の意味が解せられない。いふ――。

「私には貴女の世界はネロの支配してゐる所と違つてゐますやうに思はれます。」

「此世界を御司配なさつてゐるのは神様です」リヂヤは答へる。

「貴女は、それでは神々を信じておゐるのですか」

「いゝえ、私の信じて居りますのは只御一人の神様です、萬能の神、愛の神様でございます」因襲的に多神教の思想に囚はれてゐるヴ・ニチウスは、リヂヤの唇を通しての福音で、「夢の中へ追はれたやうな感」がされてならない。「果してリヂヤが説けるやうな神があるならば、此世界の一方に使徒ペテロや保羅のやうな人間を容れ、他方に皇帝のやうな人間を容れておくことが、怎うして出来るのでせう」。彼は全く懷疑に陥つた。然し當面の事實たる戀は捨てられない、彼の戀を遂げるべく伯父やチロの力に頼むだ。チロは到底イゴイストな男である。曾ては主人を賣り友を殺し、友の妻子を奪ひ、今またヴ・ニチウスに裏切して、希臘神話のトロヤの夢にあこ

がれてロマの町を焼き、基督者を迫害せんとしてゐるチロに、使徒ペテロ、ポーロを初め凡ての基督者を渡した。一方にヴ・ニチウスの戀は多様なトライアルを経て懷疑から信仰へ、信仰から戀の満足をうるやうになつた。即ちリヂヤとの戀は靈の上で使徒ペテロの手に成立されてゐた。彼は愛の書翰の中に告白していふ。

「世界は美しい、愛とは唯煩惱の情火だとはかり想うてゐたのに今はなんともいへぬ憐う快い無限の平和、幸福を感じる。これは全く新しい經驗でクリストがこゝにいふ平和を下さるのだ」

基督教の行はるゝ時は天下に於ける羅馬帝王の支配の終はるべき時である。ローマは亡び、舊式の生活は止み、權勢と貧窮、主人と奴隸と皆のものニヒルに歸する時である。羅馬の貴族や帝王は個人の解放を嫌うた、個人の解放は即ち彼等の自滅であるからである。ネロや貴族の多くは是を以て、至大の愛と人間の本能を以て人心を司配せんとする基督教を排斥し、基督者を迫害した。

ネロの高壓的手段は底止する所を知らない。火刑柱は到るところに火花を散らして夜毎々々に殉教者の肉を奪つてゆく。チロは今も皇帝の信任をうけて歡樂の淡き影を追うて、生の焔を高めてゐた。然し彼の歡樂には寂寥の影を伴はざるをえない。或夜彼は帝に侍して火刑を見た。聽て彼は一段高い火刑柱の前に来る。火焰は犠牲者の膝を甜る。烟に蔽はれてその顔は見えぬ。暫くすると風は烟を掃ひ除けた、白髪長くたれた老人の顔が現はれた、それを見たチロは傷を負へる蛇のごとく腕いた。

「グラウクス! グラウクス!」と叫ぶ。グラウクスは燃える柱の上からチロを視つめてゐる。グラ

ウクスはチロの主人であつた、然るにチロは彼を賣り、その妻をうばひ遂に火刑にまで送つたものである。

檻にゐる獅子は自由を欲し、砂漠を慕うてなく。チロは今迄自ら罪惡てふ檻を作つてゐたのであつた。

「グラウクス、神の名に依て私を許して下さい」チロは叫んだ。——罪惡の檻の苦痛を痛切に感じ、肉の虐げより放たれて神の恩寵の砂漠を慕うたのである。流石にグラウクスは神を信じた人である。自分はチロのために妻子を奪はれ、いま又基督者としてネロに渡され火刑に處せられてゐるが、「私はお前を許す」との深刻な愛の宣想をなした。この叫び！此の叫びこそ天地法界の凡てをコンデンスした叫びではないか、チロは爰に至つて全く悶絶せんとした、彼はこの先き何處に往き、何をなすべきか、「罪といふ罪は皆犯して來た私は永劫に救はるゝ時はない」との一段激烈な悔恨の暗い影は彼の前途を蔽うた。イブセンの「國民の敵」のシトックマンは私慾の裡に彷徨する人々に疎まれて孤獨の人となつたがチロは此の反對に光榮の民の自由の樂土たる彼岸の風光から全く放たれたる内部生活の孤獨である。

されど性具の十界は毎時われ等の前に展開して、一念の閃めきにもまのあたり其の相を表はす。シュンク # ツチはこれにポーロを通して彼れにうらゝかな恩寵の光を興へてゐる。ポーロはいふ。

「私はお前の苦悶を見た、事實を公言したのを聞いた。クリストの僕グラウクスは死の間際にお前を許したからには基督はお前を赦して下さい。我々の神は愛の神である。お前が海岸に立つて、

海に小石をなげこんでも海は埋らない、基督の愛は海の如く、人の罪は小石のごとく見えなくなる。……お前の胸にはたゞ悔恨が残つて居る。……お前は基督を憎んだがクリストはお前を愛して下さる。お前はクリストの弟子を苦難に渡したがクリストはお前を赦し救うて下される。」

罪惡を追うに罪惡を以てしたるチロには斯くして救はれ、一如本覺の彼岸へ導かれたのである。シュンク # ツチが「クオーブチス」に於ける筆はチロの悔改の死の條下に於て最高調に達して居る。曾てク # ヒテは、萬物の下面には宇宙の聖想なるもの其の神髓として横はつてゐる。これ即ち萬象の奥底に潜める嚴平たる實躰である。滔々たる世人は宇宙にこの聖想の存するを知らず、彼等は唯宇宙の外形假想の裡に生息し、その下面の神聖なる一物を夢にも知らない。唯文學者に至りては上帝の使命を帯びて、世に降りし故に之れにふれて之れを識別し、之れを世人に向つて證せんとする。文學者は即ち神象を啓示する豫言者、永久の僧侶であるといふた。まことにインクを以て塗り廻はされたる敗紙の一片にも、人々を導く火の柱たる文學者の頭腦を通して來たる成形は、宇宙の聖想を強く明らかに表はさるゝものである。「クオーブチス」全篇を通じての燦たる光芒は、まさに人のなすべきところ、感すべき所のあらゆる啓示をば、彼れが雷火はためく信仰と花美はしく筆を以て描き出した所にあると思ふ。

人誰れか罪なしと斷言しうる者があらう。われ等が日常生活は殆ど偷盜や、邪姪や、妄語や、瞋恚の連續である。日ごとに表はるゝ新聞紙上の強盜も、殺人も、放火も、姦淫もすべて之れおのが心の影で、みじめな吾人の内部生活の記録なる靈肉興亡の哀史ではないか。吾等は取りも直さ

す姦淫せる婦に、第一の石を上げえなんたるパリゼーレンではないか、チロではないか。チロは永く「以悪業因縁、過阿僧祇劫、不聞三寶名」の状態に在つたが、一たび迷妄を脱し、本覺のうつつに返つては、衷奥に於ける孤獨寂寥の詠歎は即ち宗教の權威を認め、法悦の中に神の恩寵を認めざるをえなかつたこと、恰かも「約百記」に於けるヨブや、アナトール・フランスの「ゲスタス」や、イブセンの「社會の柱」に於ける主人公のそれと全くおなじである。漱石の「虞美人草」の甲野欽吾が、趣味に於て感情に於て理想に於て相離れたる骨肉の冷遇に、つくづく寂しさの痛恨を抱いた時、書籍堆裡に世俗を脱し、天を仰いで淡い影の或る物を追及し、欣求した。この欣求の状態とは即ち反省である、發心である、信仰の状態である。少くとも對象の主體と欣んで結合し、樂つて之れに一如せんとするの努力、小我を以て大我の中に溶けこむの状態さらに平易には一種結合をばげむの状態である。

シンボリズムに飽いたといふ現代の人には、欣求、法悦若しくは報謝の時の唱題や念佛やハレルヤの簡單微妙のアクションは八萬法藏の廣きを約したる象徴として甚だ好ましくないのであらうが、倫理や宗教の教ふる理想のある以上は、この象徴の發現は即ち吾人の理想の展開であつて、これに向つて常精進不休の瞻仰をするのは、大慈の流れを汲んで大靈の力を躰せんとする尤も勁き聖純なる一境である。改悔を要せざる九十九人の正しきものよりは、一人の罪ある者を迎ふる大慈のみ親は、はげめども微かなるわれ等の受持信仰の叫びにも立所に吾れ等に來り玉ふて、一如本覺の寶渚に送り玉ふ。

花咲き、鳥鳴き、風吹き、雨降る。自己の笑ふも他人の泣くも凡て心界の歷程の展開で、をなじく恩寵の波に漂うてゐるものゝ姿を更へた表はれである。然るを「爲凡夫顛倒」の衆生はながく迷妄の幕に閉され、迷妄はやがて疑惑を生じ、不知恩となり、終に自己の人格を否定して種々の罪惡を犯すに至る。されば恩寵を知るは自己を知るのである。於是慈悲も客觀的實在として認むるのみでなく、主觀的實在として――

「一切衆生異の苦をうくるは日蓮一人の苦なり」

と認識せざるをえない、「鳥と虫とは啼けども涙おちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし」妙法五字を日本國の一切衆生の口に入れんと勵むばかりなり。これ即ち母が赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり」とはチロが悔改の死に臨んで、天に上げたポーロの眼に満へた涙がそれだ。

シエンク・#ツチは「クオーヴナス」に於て、この大慈の宣想と、冷然の内觀から來た大なる罪惡觀と恩寵とをば、極端に徹した思想と圓熟せる筆を以て描き出した。そして人は常にこれを自己に反省して潑瀾たる信仰に生きよと、永遠に向つて暗澹たる行旅に放たれんとする人々に火の柱の導きをなしてゐる。

## 三月の日の影

白　い　花

(一)

早春の天空に響くあの歡樂の叫びが、遠きかなたに聞え初めた、生々とした日光に觸れ、もの憂い周囲の色調にやるせない思ひを奪はれては、抑へがたい情緒の發動が身内にたぎるところとなつた。冬にはぐくまれた我等の健康体とその魂とには、凡ての實在を呑みつくしてしまふやうな踴躍を覚える。今まで潜んでゐた生物の凋落はこれあるが爲めであつた、弾力あるゴム球のはね返るやうに、あらゆる物の形態と實質と、其の内部組織とに、特種の變動を來たすべき境界線である。

うす鈍い日光、身をそゝるやうな微風、此等のすべてになつかしい春の響がある、瞳を見張る瞬間にも其の面影の速かに變つてゆく天地の中に、我等の生存といふものが底知れない深遠であるやうな感がある。牢獄に捕はれた囚人が若し廣い曠野の眞中に出て、大聲をあげて怒號したとするなら、其時にこんな感じが起るものではないだらうか、なごゝ思つて見る。あゝ三月、何といふ快いサウンドを持つてゐることだらう、快濶な放浪な生を欲する人の胸には、一種微妙な樂調のごとくに響く。生といふものを全く覆ひ隠すべき影が、何處からか次第に濃く廣がつて來るやうに思はれる。

外界の色彩の變化するごとに、我が網膜に映する光線を見ると、私はいつも自分の生涯といふことを考へて見る。天象の偉大なる運動の力と己れの小さい生存とを對稱して見て、そして自分といふ大自然の中に包まれた一個矮小な肉の塊片を顧み、さて更に一步進んでわが内部の生活に

思ひを及ぼすとき、我等の精靈の力が餘りに不甲斐ないことに、一種大なる不滿の念を起さずには居られない。又時としては私の過去が餘りに單調に失したと想ふ。さうだ。無爲に只茫然と過ごして來た半生の經驗は何等の價値もない。私の全生を通じて特に記憶に止めねばならぬやうな事には全くゼロである。だが近頃私の生を味つてゆく心持に何等かの革命が起つて居はしないだらうか、丁度抽でゝ高い境界線に立ち上つたやうの心持である。瞳をじつと見張つてゐると、波瀾もなく矛盾もなかつた過去の生活は平坦な白線を引いて續いてゐるあの山麓の小徑となつて映じて來るのである。眼を遮る一個の存在をも認め得ない爲め、何だか馬鹿らしいやうな氣がする。併し古い思ひ出を辿つて見ると、其の記憶にはつまらない事例へばいづれかの瞬間にちらと瞳孔に映つてそのまゝに消えてもう永久に遭ふことの出來なかつた或影が——殊更物珍らしいものゝやうに胸に深く刻みつけられてゐる。そして自分のバストがかやうに單調であつたゞけそれだけ、こんな細微な點が割合に明瞭に映つて來る。且つ其所に曾つて覺えない興趣を感じてゐる。其後に「自分はもう境界線に達してゐるんだ」といふ考が萍の様に頭に浮む。

私の生命は何かの變動を要求してゐる。はげしい青草の慾求と盛なる精神上的の衝動とを抱いて、山頂の一角に佇む私の今の身には、早晩下らねばならぬといふ果敢ない悲みがある。あまり平々な月日を送つて來た私は、せめてうら若き日の思出の爲め、かたみのために、斷崖を直下する流水の様な烈しい事を企らんで見たい。人の言動などは構はない、只山頂の一夜を想ひ出さしむるに足りる事でありさへすればそれでいゝ。そして然る後に勇ましく自己の運命を開拓してゆきた



## (二)

夢を見てゐるやうに過ごしてゐた時期を飛び超えて、さて一步踏み込むと、割合に心は冷靜になるものである。つまり沸騰するやうな青春の情操がやがて冷えかゝつてくると、漸次人は考へるやうになつてくる、針のやうに尖つた鋭敏な感覺も、やうやく思索的になつてゆく。捕へ所のない一個の空虚、不安といふやうのものを胸底深く秘めるやうになる。そして吾等はいかにして之を充實せしむべきか、又彼は抑何であるかといふ事すら知らない、こんな風に年を経るに従つて、そんな考が一方は自然と此内心の要求につれて眞の衷心より慰安を求むるものとなり、一方は一般の人が知らずく踏んでゆく道を辿るやうになつて来る、畢竟老いてゆく心に伴ふ精神的現象の一些事にすぎないこととして、只考へつゝいつか知らず通りすぎてゆくことである。不可解な此の不安の下に大なる要求があるのだ、うら若い時だけに其要求は大きい、盛んだ。躍り狂つて流れゆく動脈中の血液のやうに烈しい。又どこか華やかな所がある。

自分は今こんな界に居るのである。かうして時といふものに左右せられて、漂うてゆく身にはいつまでも此不完全な心は消えないのであるのだらうか。

「現代の青年は其胸に各一個の渴望を抱いてゐる、自ら其何たるかを知らない、又いかにして此れを抑へ、如何にして是れを充たすへきかをもしらない。こんな何を求めつゝあるか分からない一種の欲求に對して、少なくとも今日の青年の大半——否或は年老いた人人の間にも互つて居る努力したいと考へてゐる。」

## (三)

霞が一ぱい閉ぢこめて花が咲きそろつた陽春の暖かい日より、たとひ風が皮膚に冷たく沁む

きつた事である。だが此頃私は痛切に之れが胸に應へた。

人間の欲求は或點に於て最も正直であると思ふ。此意味で私は私のうら若い要求に對して極力

かも知れない——は此の重い悩みに悶えてゐる。」或雜誌にこう言つてゐるのを見た。一言で分り

きつた事である。だが此頃私は痛切に之れが胸に應へた。

人間の欲求は或點に於て最も正直であると思ふ。此意味で私は私のうら若い要求に對して極力

努力したいと考へてゐる。」

幸みちしおくつきの、

そは我おくつきの、

青き小鳥のそが上につぶやくとき、

あゝかの太陽は、



此日もいで、静やかに燃えをむべし……。

静やかな午後の日光の移りゆくとき廂を仰いで、かく歌ひながら日毎増してゆく暖かさを懐んでゐる。若やかな牧草も紅い花も、薄明の海邊も果た暮れ方の乳色の空に輝く星も、春にある歡樂のさゝやきは充ちくくして來た。心には言葉を見出すことの出来ない聲が充ちてゐる私は、今更の様に春といふことを感しながら、廣い海の面を眺めて、只訴へるやうに、詫びるやうに潜んでゐる胸の底をばしみくと囁きたい。

文苑

青 年

た け を

小さなテーブルの上に兵隊のお人形を立て、遊んでゐた弟は思ひ出したやうに斯う云つた、  
「まだ兄さんは歸らないの。」

「え、え、まあこの窓のところへいらつしあいな、お部屋の中は暗くつて兵隊さんも訓練が出來ないでしょう、姉さんのところへいらつしあいな。杜の向にお星様が見えますよ。」

「お星様が。」

「え、え、只つた一つ淋しそうに光つて居ますわ、生れた許りのお星様ね。」  
「生れた許りの。」

「街の電燈があんまり遠慮なく光るから氣はづかしそうに。そら、否へ、そつちじあ無いの、ね見へるでしょう。」

街の上には夕靄が一面に漂ふて居る。廣告燈のイルミネーションや角々の電燈がにじんだやう

につき初めた上には、夕日の落ちて行つたあとがまだ仄白く残つてゐる。

「あゝ、でも時々びか／＼光つてゐるわ、生れた許りなんだね。」

「遠い、空に生れて遠い、空に光つて居る、……夢を見ても美しい夢をお見なさるわ。」

少女は不圖昨夜見た夢を思ひ出した。それは悲しい夢であつた。影は大方うすぐろくなつて仕舞つたけれども何んでも兄が仕事場で大きな大理石を彫むでゐる、鋭い鑿の先がたてよこに透き通るような石の上をすべる。すると何時の間にか弟がちよ／＼と出て来て鑿の飛ぶ方へ立つたかと思ふと、忽ち小さな白いエアロンにたら／＼と血が走る。思はず馳けよつて抱き上げるとぞをつと死人の冷さか身にしみる。兄様もうだめなんでしょうかとおろ／＼聲に見上げると、兄は向ふをむいたまゝ矢つ張り鑿をたてよこにすべらしてゐる。こんな怪我をしたのに、血が流れるのに兄さん！と思はず叫むだ自分の聲にびつ／＼して眼かさめるとうす暗いランプの光に壁にかけた額の縁がぼんやりと射返されてゐる。右手にはしつかりと弟の胸を抱てゐた。夜着がすべつたので肩から腋の下が心もち悪く冷めたい。いまのは夢であつたかとはつと息をついで滑つた夜着をなほして向ふ側の壁の隅をじいつと見る、夢であつて仕合せだと云ふ自覺が段々明らかになつて來ると此の頃の悲しい境遇に何かの關係がありわせぬか、こんな悲しい夢を何時かは本統に思ひ合せて泣く自分を見るのではあるまいかと熱い涙の流れるまゝに心細ひ幾筋の糸を限りもなくよる内に何時かまた眠におちいつて仕舞つた。それを今少女は思ひ出したのである。そうしてこゝんはかない夢を見なければならぬ人と云ふものをうら悲しく思ふたのである。

弟は窓にのり出す程にして足をびよ／＼さして居る。

「あら危い事をなさるのね、もしかこんな高い所から、……」

と云ひさして少女はおびれたような手附きで弟を膝の上にかきのせた。まだ足をびよ／＼させ乍ら「兄さんか歸つたら街へ連れていつて頂戴。」と云ふ。

「街へ連れていつて上げますから危ない事をなさるのではありませんよ。」

「ねえ、姉さん、お星様は澤山居るね、だけが皆んな遠いゝわ。なせもつと近くへ來ないの。」

人の世へ近けば人の世の夢を見なければすまぬ。人の世の夢は咲く花の散る悲みある夢である。近かぬものに憂はないと遠い世界を仕合せに思ふ。

「お話をして頂戴、お星様の。」

涙を知らぬ弟に出来る事なら何時迄も涙をおぼえさせたくない。弟が涙を知れば兄の唄はれた此の頃に成る淺ましい数々の塑像を抱いて、人の心の迷に罪知らぬ心から初めての涙を落させねばならぬ。そんないぢらしいことは出来ぬ。亡くなつた両親の残して行つた未だ解かぬ今は只一つの謎では無いか。こを思つて少女は小暗い窓のうちに弟をかき抱いて遠ひ世の物語をする。

「向ふの方にこをつながつた七の星が見へるでしょう。天の河の向ふにね。あのお星様は元とはアトラスと云ふ大變に力のある神様のお姫様でした。果てしない杜や雲に隠れた高い山の澤山ある國にお住まひなすつて、毎日奇麗な河の邊りや、うす暗い杜の奥へいらしつては獵や何かに楽しい日を送つていらつしやる内に、或る日のこと其の杜の獵夫がお姫様達を見つけましたの。お

姫様達は不意と見知らない人に會つたのでびつくりしてお逃げなすつたら其の獵夫もつい面白半分以後を追ひかけて來ました。杜の中の道は遠い、しお姫様達は途方にくれて仕舞いましたら、わ、其の獵夫——オリオンと云ふ獵夫なんですつて。それでもう仕方がないので、あのお月様にね助けて頂きたいつてお願ひなつたの。お月様はお情け深かひ神様でいらつしやるから可愛相に思召して直ぐ七人のお姫様を七羽の鶴になすつて、鶴つて、あらい羽根の鳥であなたも知つてゐるでしょう——其の鶴になすつてから空の上まで飛んで行かれる様にして下すつたの。それでやつとお姫様達は鳥になつてお月様の傍までお逃げなすつてとうくお月様のお腰元におなりなすつたと云ふお話、それがあの七のお星様。」

「それでお姫様はお父さんの處へもう歸つて來ないの。」

「そうね、あゝして奇麗なお星様になつて何時の世までも汚れの無い光に暮らしていらしやる方が好いのかも知れませんか。」

冷々と夜の風の通ふ窓に姉弟はかけ離れた世を見つめてゐる。こうした夜を兄の青年は世を咀嚼自らの叫に勇氣つけられて様々のユムボジションを描きつゝ、でもどこもなくやるせない思を抱いては、細い幾つかの裏路を此の二階へと歸つて來るのである。

青年の父と云ふのは末の弟が生れた年に此の世を去つた彫刻師であつた。其の生涯が非常に浪漫的であつたが如く其の思想も極めて束縛をいどうた一種の標象的空想に富むた人で、まだ其の胸に抱いていた考を纏め上げて一家の作を成す程にはいたらなかつたが古い時代に認め得られぬ

さらめきが其の作物のごことはなし表れてゐた。然し其の時代は其の作物を眞に面目に受け取る程古い因襲を脱してはゐなかつた。

父のアトリエで使ひ残しの粘土をいぢくりまわしては首や手足を作り初めるのを見て父の瞳には新しい光かもへはじめた。己れの敗れた生涯がこの子によつて復活し得ると云ふかすかな望を認めたからである。老彫刻師が死ぬ前の一年は仔細にこの子の研究とそしてそれに適應した啓發の方法に費されたのである。僅の月日ではあるが此の間に自然の懐に精靈の光を認めようと云ふ決心が稚ないながら植へ付けられたのである。拘束をはなれて自然にかへれ、そこに萬物を眞に味ひ得る天地が在るとはけまされる。撞ひまゝに自然の氛圍の裡に憧憬したい。そして思ふまゝに力のある作物を獲ようと云ふ若い心には父は唯一の先覺者と寫り世間は濟度し難い衆生の意義なき群衆に見へたのである。こうした心の移り行きにむごい動搖があたへられた。それは父の死であつた、一切の活動に永遠の休止を與へるものは死であるが又同時に新たな動搖の種をまくのも死である。

しめくとした小雨の夕べ幼い妹の手を引いて數ふる許りの父の老友と粗末な父の柩を護つてかへり見もせぬ人の街を歩むた時しみくむごい世が胸の扉に刻まれたのである。うつろになつた父のアトリエで半生の苦闘を物語る遺作の上に今更らながらの眺めを投げた時そうして壁一重を境にしてあまりに没交渉な社會を思ひいたつた時若い心は反抗の叫を揚げた。氣の毒な父の歴史に報いる爲めには尋常の手段ではやりとげられぬ。たゞなにかなし人の世を咀はねはすまぬ。

囚れたる人の世を離れるべく教へられた心は次第に人の世を責むる態度へと變りゆいた。こうした兆を早くも覺つたのが母である。父が殆ど世とそむいて物質的の欠乏が面前に迫つて來ても母は常に其の間に身をなげいれて父をして最大なる實在を探り得させようとした程甲斐／＼しい婦人であつたが、それは父の藝術觀を窺ひ知るだけの能力があつたからである。可弱い胸には経る歲月が用捨もなく苦い經驗を投げ込んで行つたが、それとは交渉のない世に絶對の美を味うて充分なる償ひを求め得た。父は死んでもこうした母は煽へ上つた咀の煽を暫しなりとも青年の胸から消しさがることが出來た。しかしそれも束の間で更に母を失ふては凡てに破壊の鐵槌が下された。青年には父の如きは勿論母もこうした生涯を抱いて終るべきものとはうけられぬ。人体の外面に表れる借調的リスミックな波動は繼續的リタセツシフの衝動イムプルスによると云ふ。人生も矢張さうしたものでなくてはならぬ。しかし兩親の生涯は怠らざる衝動イムプルスに満ちて居るにも關らず借調的リスミックなものでない。何故と云ふまでもなく社會が之を妨げたからである。社會は兩親を亡したのみならず、兩親が求めた自然の眞をさへ表すを厭ふたはごとである。切角の平和をむさばるために眞理の表顯を拒むたのである。こゝ知つた青年の若い血は限りもなく燃へ上つた。

青年の彫む作品にどこか調子の狂ふのはこうした内的の不均衡の爲め表面の誇張か過ぎるからである。それを痛ましく思ふのは今は一人の妹のみである。青年にとつて此の妹とそして幼い弟を見るのが甚だしく苦痛である。兎もするとこれ等二人の素直な心が著しく自分への對照に神の下した者の如くに思はれるのである。暗がりの階段を登つて己れの二階へはいる時思はずも力な

い足をふませる事が度々あるのはごこともなくやる瀨ない思か湧いてくるからである。それを眞の己れとは氣付ておらぬ。此の夕べもそを云ふ心に閉されて部屋の戸口に手をかけたのである。

テーブルの上の小時計が靜に八時を廻つた時弟は小さな床に寝かされた。兄は洋燈の下に種々なスケッチをならべて見入つている、妹は長ひ鋼の針を二つあやつつて何かなしに小さなものを編む。毛糸の玉が細い糸をひいて足下におちる。長い針が指のうごくにつれて細い光を切る。妹はこうして居ながらもスケッチを擴げている兄の胸中に抱かれたその思が眼の前にまぎ／＼と見られるように思はれる。そを思はなければならぬのは身を切られるのよりつらい、父の志を完くせなければならぬ兄がこうして亡んで行くのを見てゐるのはとても堪へ得るところでない。夜と云ふものに一度懸念か包まれた時夜程その懸念を跳梁させるものはない。小時計の共鳴が時折りおびへたように忙しく耳につく。

「何か好い考案がお出來になつて。」妹は一向の沈黙の裡にはびこつて來る極りない不安を逃れる術にもと口を切つた。

兄は近頃只一人世に反抗しようとするのが心細いと云ふ感に囚はれてきた。誰れでもよい自分の地位に味方をしてくれる者が欲しいのである。さりとてこの味方を妹に求めるべくその前にこのいら／＼した考をうち明るには忍びない。

何處からか玉虫が明りをしたつて飛んで來た、脊を寶石のように光らしてテーブルの上をはいまわる。

「何か初めるお積りなの。」

兄は眼を上げて妹の顔をじいつと見た。此の胸に抱く計畫をお前は反對する女ではないか、殊更らに重ねて答ふのは自分を苦めようとたくむのか。

「オレストの像を彫むて見る、題は反抗と付ける。」ひがんだ心には角がたつ、兄の眼はいらくした。

はいまわつていた玉虫がぶーんと微かな羽音をたて、洋燈のほやにぶつかる。

「世は矛盾だ。調和と云ふは何處に求められるものなのか。片輪車をひきずつて険しい路を行くようなものだ。一方が高くなれば一方は必ず低くなる、調和とはそうした事に名付ける名なのかも知れぬ。ホレストの咀、エレクトラの咀、そこにおれの立脚地は見出される。」

「母を奪れた子の運命が人の世の總べてなんですか。」と鋼の針を指先にとめて妹は長いまつ毛の下から兄を見る。

「總べてとは云ふまい、しかし一般である。藝術は人生を基とする。その運動より起る變化を彫刻家は石や銅に表すのだ。」

「ですが表はす態度も……」と云ひかけて妹は急に口をつぐむ。興奮した兄の此の頃にめつたなきけぬと心付いたからである。

二人の間は再び元の静さに返る。時々玉虫が羽音をたて、ぶーんと飛ぶ。

妹は編物の手をやめ花立のわきの小形の本をとりあげた。兄がこの頃に求めた本である。濃い

かわ色の表紙にうすく白い背皮が附けてある。細い柔のはいつた頁を開く。頁の左の中頃で、一  
体お前はだれなのかと女が聞く。男は此のやかたの犬ですら私を知るのに、姉弟でありながら知らぬとはつれないと恨む。女はどをくオレストと叫ぶ。そして聲をふるわせて低く語る。私は  
お前の姉ではあるが、今は空しい亡骸にすぎぬ。だが私は王様のお姫様であつたのだ。——その  
かみは自分ながらも美しいとおもうてゐました、蒸し暑い夜鏡の前に燈を吹き消した時、男に秘  
めた此の肌から聖い光がさすように處女の慄きを感じました。月の小暗い光が仄白い肌をあらわ  
にしながら夜の池に浴みする様に思ひました。——この髪の毛、この櫛めも知らぬ、穢された、見む  
きもされぬ、この髪の毛も、昔は眼をやる人の胸をさわがせたのに。おわかりかい。お前はこの汚れ  
のないおのゝきを私は父様に捧げなければなりません。このからだに私の誇りを喜ぶとき、父様  
の憂が私の寢床に通はないとお思ひかへ。嫉妬と云ふは死人です。そして私の花婿に眼の凹んだ  
憎しみを授けてくれました。それから眠れぬ床に、毒蛇のように息をつく、怖ろしい者に私は  
なつて仕舞つたのだ。夫婦と名づくるその間にある總ての事を私は知らねはやまなくなつた。あ  
あ、あの夜毎、私はそれを了解した。その時私の体は氷のように冷やかになつた、けれども血潮  
は疑らない。心の内は熾と狂ふた。私になにもかも知つた時私は今迄のようにもう私のひとめにすら  
はなかつたのだ。あの人殺し達は——母様と、それ母様のそばにいる——もう私のひとめにすら  
顔をそむけて仕舞うのだ。何をお前は心おちして見廻すの。お話しな、お話し。おやお前は慄へ  
てゐるね。オレストはおのゝくまゝにしておいてくれと云ふ。そしてあの人も、矢つ張り同じ恐れ

におのゝくとお思ひか。どんな運命に私があの人を導いてやるか氣が付くまいかと云ふ。ではお前は覺悟したの、たつた一人で、まあ可愛想な兒。誰れもお前を助けてはくれぬのかとエレクトラは投げ出したように云ふらしい。こゝまで来た時妹は頁を伏せた。それはこの頁の間から遠い昔の出来事が、恨みに閉ざされた出来事が、今眼の前にわづかな隙を見出して血醒ぐさい風をよがせるのに堪へ得られずなつたからである。世は凡て偽りである。世ごころの話ではない生みの母さへそれではないか。アガメノンの血に残る此の二人の運命のあまりむごいのに頁にはさんだ指のおのゝきが感ぜられる。兄はオレストを彫むと云つた。それを兎や角氣にするのではない。只兄の彫む形からはオレストばかりが生れはせぬかを恐ろしく思ふのである。もしそうなつたら兄の藝術家としての態度は根底から壞れてしまふ。どうしたら兄の解いた謎にはまだ最後の結びめのあることを覺らせる事が出来るだらう。熱い涙が眼瞼に溢れて來た。亡き母かしみくと戀しくなつたのである。

不意とほやから油煙がたつ。玉虫かごとをく火の中へ飛び込んだのである。兄は立ち上つてふつとそれを吹き消した。妹は急いでマツチを捜しながら、そつと袖口を眼にあてた。反いた心と反かれた心とは暗の内に大きな圓を畫いてくるくと廻る。圓周はともすれば中心から次第に遠ざかるうとする。遠ざかれは再び逢ふ瀬は望まない。どうにかしてこの圓周をぢめたい、そして中心の上の一点どしたいと妹は願ふ。しかし今のような兄の有様ではどうやらそれも果敢ない願と終りはすまいか。「マツチが見つからぬのか。」と暗い中で兄は云ふ。妹は急いで細い一筋をし

ゆつとする。赤い火が左右に飛ぶ。兄妹は思はず顔を見合せた。妹は兄のこをした場合の顔に何んの咀の影をも見出されぬのに、圓の中心に再び兄を求め得たのかと切刺の印象を嬉しく思つて、いそぐとほやを外して糸心を改めた。

あくる朝は早くから青年は向ふの街に二三人して借りてあるアトリエへ行つた。妹にどこか自分の弱点が見透かされ相な恐れかしてならぬからである。

「どうだオレストのデッサンは。」と一人の友達に問れた時、青年は粗末なテーブルによりかゝつて仕事もせずに獨り案に沈んでゐた。

「あんまり屈托するな。近來の貴様の作は少し變調を來たしたせ。」

「肉付が突飛すぎる。」と籠でしきりに細工をやつていた一人が相槌をうつた。それでも青年は口を開かない。否や二様にも三様にも異なつた言葉が喉元でもつれて互の發表を争ふて居るのである。大きな矛盾が胸につかえてゐるのである。自分は既に自分の態度を明にして大作に努力しようと思つてゐる。それを此の様はどうした事である。若い血の漲ぎつてゐるこの腕はなん時でも鑿を振ふ時の來るのを待つてゐる。それなのにいくら一点に集注しようとしても考が纏らぬ。戦はずして敵に敗れたのかと思ふとたまらなくなる。何んとか鞭撻しなければ見すく降伏するばかりであると思つて青年は街へ出た。人と云ふ凡ては彼の敵である。其の敵の中へ飛び込んで強い反感を求めようと試みたのである。日に曝らされた道は軽いほこりを揚げて、や汗ばんだ額に心もちわるくねばりつく。眼を射る色影は盡く強烈である。濕り氣と云ふものがない。家根

でも看板でも店先きでも一寸觸れると直ぐにも微塵に破裂し相である。往家の人はどれもこれも口を堅く結んで己れの心を見透かされてなるものか云ふ眼付きである。そして一切用の無い處にむだな注意は拂はぬと云つた調子で歩いてゐる。それでいて街全体が非常に喧かましい、不快な躁音が耳について離れない。いくら聞くまいとしても後から後から追つかけてくる。こんな奴等に同情して何んの作品が獲られるか。反抗しなければだめだと青年は口の内でつぶやいた。そして誰れか今自分のつぶやいた詞を聞きはすまいかと急に顔をあげて往き來の人を眺めたが、皆んな申し合せた様に見むきもしない。強いて自分の存在を認めぬように殊更注意してゐるのではないかとまで受け取られる。心臓の血潮が段々と熱してきた。腕に力が張つてきた。愈々戦闘の叫をあげるぞと手を隠しの裡に、ぎりしめながら行く。

ほこりに汚れた柳の葉が魔女の衣のように揺めく。人の世に何にかの謎をかけるように揺めく。それを一本二本と教へながら行く。突然けたましい叫聲が鼓膜をうつつた。人の叫か獸の叫か識別しがたい程單調な叫聲である。今通り過ぎようとする柳から五六本先の柳のあたりを歩いてゐた人達が急に行く手の方へかけ出した。青年も殆ど無意識にそれ等の人の運動に誘れた。叫聲が引きつけたのではない、多勢の力の壓迫に一も二もなく屈服したのである。この間の連絡を明らかにしたら今の場合青年は強いて踵を返したかも知れぬ。前に行く人と危うく突きあたらうとして身をかわした途端、五六の人がある一点に吸ひ付けられるように飛んだのを見た。叫聲は恐らく其の一点から起つたのであろう。青年の行きついた時には早や一團の群集となり口々にがや／＼

と云ひあつてゐる。割り込むようにして中をのぞき込んだら真中に汚れた衣服を纏ふた老人が倒れているのが眼に入つた。右足を抱いて海老のように縮まつてゐる。血があたりに流れてゐる。群集は氣味悪る相にそこ丈けよけて立つてゐるのである。折々低き呻き聲が俯つ向いた老人の口から洩れる。「自働車ですかね」と云ふのか聞へる。「否や馬車に當つたんだ」と云ふのも聞へる。青年は大凡を察しながら猶人の肩越しにぞう成り行くことか見つめてゐる。其の内に「水を持つてきてやれ」と誰れやらが怒鳴つた。しかし水は一杯のユップすら持つて來る者のなかつたのを見ると、怒鳴つた者自らも怒鳴つた丈けで此場合に傍觀者の拂ふべき同情を拂つた積りであるらしく思はれた。だが青年自身も水を捜しには行かなかつた。やがて一人の巡査が來た。どうしたのかと老人の顔をのぞき込みながら聞いた。どうしたのかは分り切つてゐる、早く介抱してやつたら好かり相なものだにと青年はいら／＼した。老人は顔をあげた、苦しみの内にも怒りの色があり／＼と表れてゐる。「馬車……馬車を止めろ」と低い聲で云つて巡査をならむように見たが、突然眉にふかい皺を彫むでうつ向ひた。群衆は皆笑つた。巡査は歩けるかと重ねて聞いたが老人は何とも答へぬ、低い呻き聲が斷續して洩される丈けである。青年はひどく興奮させられた、この残酷な對照を最早や見るに堪へきれなくなつて、つと群衆を離れ元來た道を歩いて見たが、思ひ出したように細い横道へ折れ曲がつた。その時「オレストの顔を彫む時」と口の中でくり返した。曝露された人の世の一面を頭のうちに鑄つけられたので、こめかみの邊りがびり／＼動くのが感しられる。



その日から青年はすぐに粘土で形をとり初めた。アトウエを出て行つた前と同様に無言でしきりに粘土を籠の先に動かした。間もなく太陽は遠い、國へ傾ひてアトリエの内かうす暗くなつた。手元がはつきりしなくなつてから初めて椅子へごつかり腰をよろした。四邊に早や誰れも居ないのに氣が付いて、汚れた手を洗ひ隠しから曲つたパイプをつかみ出してマツチの火を移しながら往來へ出た。しかしあの二階へ歸りつゝあるのだと氣付いた時やるせない思がむら／＼と湧いた。それを強いて製作の考へで打ち消そうとしつゝ、戸口へたどりつく迄には幾度か思はぬ足をふむで來た。

それから云ふものは青年は益々無口になつた。弟は姉にばかり親んで中々兄の前へ出なくなつた。青年にとつてはこれが反つて仕合せに思はれる。それでも兄と弟とばかりかたみに分け同じ血が次第に色彩をかへて行くのかと堪へられぬ苦痛に襲はれる事が度び／＼ある。でも弟はがんせない小供だからそれで濟むが、妹はそう行かぬ。外から歸る度毎に亡い母にそつくりな其の大きな眼が濡れてゐる。素直な妹は何も云はぬが、弟を抱いてはどんな悲しい思に其の目／＼を送つてゐるかと考へると其の濡れた眼に見られるのがつらくなる。つとめて避けようとする程妙に其の眼と出合ふのである。仕舞にはアトリエで製作に丸で氣を奪れてゐる時ですら、不圖其の眼か思ひ出される。そをしたが最後粘土を使ふ手がすぐによく初める。これではならぬと自ら勵ましながらも頭は益々亂れてくる。ぞをしても作に傾注する事が不可能になる。自分より外、人ない折りは危うくも敗け相になる自分を俯甲斐なく思ふては涙を落す時すらある。

とを／＼兄妹一所にゐては自分を立てる事は出来ないと言ふ事に氣がつき初めた。こう考へると一刻も早く分れねばならぬ。そをしなければ妹が亡びるか自分が亡びるか、いづれか一つを撰ばなければならぬ運命に陥ることは明らかである。今のようにしてぐすり／＼して行けば或はお互に亡びるかも知れぬ。束縛を脱しよう。暫くでも好い。小鳥のように思ふがまゝに飛び歩こう。妹と弟とはしるべでも預ければそれで濟む事である。そをすれば人の世と結ぶ只一つの連鎖はた／＼れるのだ。何故こを云ふ事にこれ迄氣付かず徒らに苦しんだのか、自分ながら愚かてあつたと思はれる。それで愈々偽善の文明、偽善の道徳に得々たる人の世に破壊の叫びを聞かしてやる事が出来るのだ。一刻も猶豫してはだめであるところ決心した夕べ、其の二階への道を折れて大きな河の縁へ出た。それから川添ひに下の方へ下つて行つた。熱した頭をおち付けなければ妹に得心の行くように話すことが六つか敷いと思つたからである。濡れつばい風が吹いてくる、何時か川口の港へ出たのである。其の港には細長い棧橋が並んで海に突き出ている。手前の一つを狭いレールを跨ぎながら歩む。黒い船が一艘横についてゐる、其のそばを通り過ぎながら船足の水際にひたる處をのぞいたら、藁や藻の汚れたのが赤い腹にへばり付ひて揺られているのが眼に入つた。水の色はうす黒かつた。やがて防波堤の先に燈がつけられた。ランチが細長い波を残して水に寫る燈を三重に四重に切つて行つた跡に鷗が低く舞つてゐる。青年は棧橋の端にうづくまつて港の夕ぐれに頭を落ち付かせようと試みる。「二丁目のか……樽でね。」と誰れやらが分らぬことを聲高に云ふ。ふり返ると二艘の小舟がすれ違ひながら一つは岸へ、一つは沖の汽船の方へ向



つて行く。うす暗い中に船頭の櫂をあやつる腕が遅ましく見へる。何事かついて沖へ行く船頭が罵り返すと、岸へ行く船頭があはゝあと遠慮のない聲を出して笑ふ。束縛のない彼等の生活を青年は浦山敷いと思ふ。二つの船は次第に遠かる、仕舞ひには水をうつ音丈けが只黒い影の方向から聞へる許りになる。

汽船にはこれもこれも燈が付けられた。赤いのもある、青いのもある。しんみりした空氣の中におどけない眼を見張つたように見へる。大きな船体と對照してどこかつり合はむ感じがある。妹が納得するだろうかと思ふ懸念が不意とひらめいた。がんせない弟を抱いて自分の一切に顧慮を費すのを妹は両親から授かつた貴いつとめと思つてゐる。そをして自分の傑作が世に出るのを一生の望みとかけてゐるのである。その妹が自分の言葉を聞いた時、それを了解した處が自分の新しく作る運命に従うであらうか。青年は急に氣がかりになり初めた。足の下でばしやん／＼と浪が打つ。あの妹に對しては青年は世に對すると同様な態度のとれぬことをよく承知してゐる。勿論こうなつた運命は丁寧に説明しなくてはならぬ。たゞ妹はもしやこれを一生の分れと消へてゆくような心をして自分を引きとめはすまいか。今頃は弟を相手につかれて歸る自分を慰めるため一椀の茶を湧かしてゐる頃だろう。そこで自分がはるつて行く。そして——と思つて青年は俯つ向ひた。遠くに汽笛の音がする。細くあとを延びた悲しい響である。衣ものがしつとりと潮風に透される迄青年は棧橋の端に二つの矛盾した考を抱いて人と云ふことぐらかつた謎に解きあぐんだ。やがて、とても自己を亡すことは出来ぬ、それに妹も納得せまいものでもあるまいと、た

よりない心を堅めて立ち上つた。空には一面星のきらめきがまかれてゐる。長い道をいくつか通つた。華やかな街は足早にぬけて、成るべく暗い裏路をゑらんだ。それは妹の待つてゐるあの二階へ近きたくないからである。このまゝ、なろうことならこうした運命を抱いたからだゝから遠い、道へ行つて仕舞ひたい。耳を被ふて眼をつぶつて、よし山があつても河があつても關ひはせぬ、たゞあてない道へ辿りたい。途中で仆れてそのまゝ息が絶へるならかへつて心安がるうと思ひつゝ、それでも何時か戸口に立つた自分を見出したのである。あたりは夜の底に眠つてゐる。つかれた足に思ひ切つて何時もの一段をふむ途端に部屋の前が物音なく開かれた。

「兄さん。」と静かな聲が呼ぶ。黒い影が戸口を離れてする／＼と手欄のところまで来て止る。及び腰にうか／＼う氣色である。

「兄さんでしよう。」と重ねた聲はふるへてゐる。青年は何ともしれぬものに壓せられて氣せわしくさん／＼と階段をふむ。戸口からさす光の漂ふなかに兄の顔がくつきりと浮んだ時、

「あの、日暮れからひどい熱が出て、今寝せつけてありますが、少しもひかない様子ですの。」  
「え、」と思ひ懸けない詞に自分の耳を疑ひつゝ、青年は眼をみはる。それを抑へるようにして、  
「急性の肺炎ですつて。さつきお醫者が——」と云ひさして早や望みない思ひなしで袂を顔にあてたまゝ兄の胸へ縋りついた。やがて、

「た迎へに上げてても何處へいらしたか分らないし——私はほんとに、」とおの／＼と聲を涙にのむ。兄は片手に妹をさへたたまゝこの不意の弟の出來事を自分が導いたものゝように忙しい悔み

に攻めつけられながら部屋の内に横はる怖ろしい運命にびりゝとした。

天井からつりさげられた水嚢を小さな額にあてがつたまゝ、弟は苦し相な息をはく。水嚢のおもてには、こまかい雫が結んでゐる。ひどい熱のため水の一刻く融けてゆくのが眼に見へるようだ。兄は小さな手をにぎつてみる。もへるような熱である、峽間を流れる水の狂ふさまをして、その小さな脈管は激しい脈をうつのである。妹はそつと頬につたわる水嚢の雫を枕元のはんげちを取つて拭いてやる。兄は何とか云ひたいが、もう云ふべき權威のないものと自らをいやしめて涙にじむ眼を小供の額の上に注ぐ。妹が只一人でこの悲を抱いてこのベットを護つてゐた時、自分分は自分一個のためお前までも捨てようとしてゐたのではないかと烈しい内心の責めにじつとしてゐることが出来ない位になつた。妹は「もをちぎ散薬を飲ませる時刻」とコップに注いだ湯をさしながら熱の出た前後のことや醫者を呼びにやつたこと、その醫者の話していつたこと杯を秘そめた聲で、夕闇の樹がくれに世をしのぶさまに語る。

「こんな小さな身体にどうしてこんな熱が出るものでしょう」兄の方へ眼を移しながら

「可愛相でなりませんわ。」といふ唇が妙にむすばれる。

「それから一度も眼は覺めないのかい。」

「え、——水をくたく音くらいでは、」

「明け方にもなつたら、ちつとは熱もひくでしようか。」と痛ましい眼をベットのうへに落す。

洋燈の油がじゝと云ふ外、つく息さへも聞へぬほど静か夜だ。やがて時計がちゝんと一時をうつ

た。

こうして悲しい夜を明したあくる日、は同じような憂を捲いて三日めに移る。その日は前の晩から降りつゞいた雨に灰汁をにじませたような空に明けた。一切の世か遠い他國へ立ちのいて、獨りしみんと淋さに包まれる氣持を思はせる日であつた。晝過ぎに夜毎につかれた姉を暫く寝かせて兄は一人弟の枕元にみ守つてゐた。熱はこの日もさがらない。おちおち寢付かれぬと見えて、どんよりとした眼を開くが直ぐ氣懈る相に閉ぢてしまう。

雨滴れの音が眠む相にひいて来る。青年は幼い頃、母の手に抱かれては聞いた子守歌を思ひ出されずにはゐられなかつた。妹もあの歌を聞いたのだ。母の手に抱かれて、母の口からあの歌を聞かすにそだつたのは此の第一人である。さうした淋しい廻り合せに生れおちると直ぐ會ふた弟は、此の裏街の此の二階の一隅に兄と姉との手を離れて、未だ聞かぬあの子守歌を母の懷に慕ふてゆくのではあるまいか。青年は堪え得ずなつて足音の立たぬやう静かに部屋の中をゆきもどりした。三時頃に醫者が來た。叮嚀に診察したあとで容体は輕くない。それに何んと云つてもお子供衆のことですからと云つたきり、うるさく尋ねる兄妹には捕らぬどころの無い返辭をのみして歸つて行つた。兄妹は凡ての望みをふつゝり断たれた氣持になつて無言のまゝ、テーブルに向きあつた。ひと言云へば直ぐに涙が誘れるほど悲しい心になつたのである。

花挿にさゝれた罌粟花がほろりと夢のやうに一片散る。兄妹は果敢ない宿世のこれがつちうらではあるまいかと見合せた眼は濡れてゐる。兄は立つて長い罌粟花の莖をつかんだ。ほろほろと

又花片が散る。靜に窓硝子を開けて眼のあなたに其れを投げた兄は其のまゝちつと立つてゐる。妹は散らばつた花片のうへにうつ伏した、肩がかすかに波をうつ。

その夜弟は亡くなつたのである。

種ろく／＼と出入りする者が疎らになつて、夜の深さがもの嚴そかになつた時、蠟燭の眸の下にま白い床に横はる、弟の亡骸の傍に兄妹は靜に顔を見合せた。その時青年は凡ての悲哀を集めた筋肉が尤も美はし調和にある妹の顔を見出した。そして其の涙にかれた眼はあらゆるものに絶望した、人の世にあるとは思へぬ程の眼であつた。青年は其眼をさける力のないのを自覺した。靜に其の眼は動いて弟の亡骸の上にはたとゝまる。青年は其の誘ふ方に凡ての自個をすて、従ふ。そこに横はる顔は永劫のあなたへと眠つてゐる。罪もなく汚れもなく、人そのもの、現らわな顔に眠つてゐる。凡ての變化の初りであり、凡ての變化の終りである。この眠れる顔、——永劫に眠れる顔、こゝに眞のすみかを見出されるのだ。眞の藝術はこの聖い平和を忘れてはならぬ。初めてこゝう知つた青年は小さなベットの傍に膝まづいた

劇史 睢陽城

薄穂華

人物 張巡 眞源令

許遠 睢陽太守

萬春 巡、麾下の將

霽雲 同

翠蓮 巡の妻

外、部侍、侍女、及兵士數名

處 睢陽城内の一室

時 唐、安史内亂時代(肅宗、至徳年間)

城内の一室。中央に長方形の卓を据は、床几四つ五つを置く。上手によせて階段あり、昇りつめたる處、戸開き居る。外は露臺のころ。階段の下、隣室に通ふ戸口ありて唐草模様の帳、長く垂れたり。

下手に入口ありて階下に通ずる階段の端を見せる。

正面に窓あれど堅く鎖せり、凡てが荒れたるさま。

短繁の光、かすかに室を照す。晩秋の夜、既に更けたり、

審明くさ、上手の帳を排して張巡の妻翠蓮、(二十八才)出づ窶れたる姿。

遠くにて矢叫の音、鯨波の聲、銅鈸の響、風につれて聞ゆる來る。翠蓮、靜かに舞臺の中央に進み、更に上手階段の下

に戻り露臺を見上げて

翠蓮 戦の模様はごうありませうぞ？

(姿は見ゆる若き女の聲にて) あの……三本松のあたりから寧陵の街道に沿ふて、八ヶ所に火の手が上つて居ります。火の光で戦は手にとるやうに見えます。……敵は今總崩れになつ

て、馬も人もわれ先と、あの寧水の舟橋を渡つて居ります……あ、橋が中途から崩れました……半分は押流されて！もう見えませぬ。……おゝ！青陵の麓から旗さし物が……味方！萬春様の標馬が真先きに……逃げてゆく敵の行手を立塞いで……

翠蓮 おゝ、では又味方の大勝利。もうよい程に降りておぢや！

(若き女の聲) あ！雍丘の砦から今、黒煙りがむくく……と吹き出しました。まあ、何と云いふ凄惨な煙！

あれ火の粉がちらちらと煙の中に立交つて……あゝ……あゝ……あゝ……だんく……殖えて参ります。空はまるで金梨地の様になりました(女の姿、戸口に現はる。二十許りの侍女の扮装。遙かに爆聲。顧みて)あ！砦は一面の火原で御ざります、まあ、淮水の流れが真赤に見えます(と階段を下り来る)、敵も今度こそは思ひ知つたて御ざりませう

はげしく時雨

翠蓮 お、また、時雨が……

と床几に腰をおろす、侍女よき所に畏まる。

侍女 重ねくの勝いくさ、これで臨淮から援兵が参りますれば、もう、こちらのもので御ざりますますが……

翠蓮 どは云へ後詰もない此城を遠巻にする敵は十重二十重、打破つても、打破つても、加はるは敵の勢ばかり。(間)霧雲様が臨淮へ御使者に立たれてから今日でもう三日目。吉凶はごうあらう(やゝ長き沈黙)臨淮の守將は進明どの。日頃からよくないあの氣質、もしや妾の

事を根に持つて、今度の難義をよい事に、ごうわが夫に復仇せうともはかられぬ(はっとして侍女を見)あ！おっつけ、方々も歸られませう、……して、夕餉の料は

侍女 はい……あ……

翠蓮 夕餉の料は(聞ぬ振りにて再び同じ調子に聞ふ、)

侍女 ……

翠蓮 無いのかえ！

侍女 は……はい、(と涙聲)

二人暫らく無言、時雨の音

侍女 紙も盡きました。雀の巢も無くなりました。この廣い城内に小鼠一つ居りませぬ。先日、倉廩の壁の間から偶然、発見しました蕨とて、ほんのく少し許り、それも殿様の御計らひで皆、兵士方へ下げましたれば、爪の垢程も残つては居りませぬ、……

翠蓮 よしや戦には勝つたさて、糧が無うては何とせう。いかに心許り猛つても、身内の敵には勝たれはせぬ、あゝ、あらう事か、惨い飢死をするものが昨日は二人、今日は一人と……

侍女 あの、昨日の夕方も、二の丸の櫓の下で、木の皮を食べて居たものが御ざりました。

翠蓮 あゝ、その様な話しは已めにしましよ。(間)あの、今朝仆れた馬があつた筈、あれに鎧の弩を添へて煮るやうに云ひつけや、(侍女行かんす)それから(侍女立止る)、いゝえ、もうよい、もうよい(と手を振る)

侍女上手に入る、翠蓮、凝を考へ居る。夜鴉の聲、静けさを貫いて二聲三聲する、時雨また激しく降り注ぐ。この間に歡呼の聲次第に近づき、城兵の歸れるけはい。やゝありて、階段を踏む音す、翠蓮立ち上る。許遠を先に張巡、下手より話し乍ら登場。兩人共に四十年輩。特に張巡は身丈高く、長髯垂れ、威風堂々たる風貌たるへし。

許遠 思ひの儘の勝軍。今更ながら張巡どの、智謀には恐れ入る。

張巡 いや。敵がうま〜わが計略にかゝたまでの事。私とてあれ程までにゆかうとは思ひませなんだ

許遠、下座に掛けんとす

張巡 いや。それではなりません。許遠どの、常々申す通り、貴方は大守では御ざらぬか。私こそ下に。

許遠 役目は大守にしる、智にかけても勇にかけても某は下僕同然。寧陵で會ふた夕から堅く心に誓ふて居りまする

さ強て上座にすむ。さ相対して腰かける

翠蓮 御めでたう御ざりまする。

さ淑やかに二人に挨拶し、靜々さ次の間に入る、

許遠 (後見送りて) お傷はしい程の寢れやうぢや。六尺の男子でさへ時には堪え難い思がするものを、女人の身では、さこそと思はれる

張巡 いや、それよりも軍兵共の憔悴した様を見る時は身を絞らるゝ様に思ふ。よくも今宵はあれだけに働いてくれた事ぢや!

許遠 されば、日頃愛撫の資物に外なりません。今日は獲物も大分ある様子。彼等も久し振

で腹鼓打つ事で御ざらう、

張巡 まことに兵士は無邪氣なもので……。

部將の一人、下手より登場、よき所にて禮をなし

部將 分捕物は如何、計らひませう

許遠 こゝはよい故に、よく部下を勞つてやるがよからうぞ、

部將 して、將軍たちは?

張巡 なに、關うな、關うな。獲物を悉く與へても四百の頭割にすれば僅かなものぢや。こゝは、また、どうにかならう、

部將 (頭だれて無言)

張巡 それから、先刻、命令した通り、手配はよいか。よもや今夜、襲來する事も無からうが。油斷大敵ぢや。明日は新手の大軍が押寄せるに必定つて居る。手ぬかりのないやう準備して置けい。

部將 はッ

張巡 早く行け

部將。退場、

張巡 もう、萬春が歸りそうなもの。勝に乗じて長追ひせねはよいが。

許遠 左様な事は御ざりますまい。出陣の際、くれぐれも云ひ合めて置きましたれば、

庭先にて萬歳を唱ふる聲す。二人相見て笑む。やゝありて雷萬春下手より上場。胃を抜いて手にし、皿に。滲みたる白鉢巻せり、會釋して下座につく。

張巡 お、歸つたな。

萬春 あ、今日は面白い合戦を致しました。あの雍丘の麓の森蔭で、亂軍の中に、紛ふ方なき令狐潮の後姿を、ちらと見とめました故、此奴逃してはと、双鎧合せて、降りくる炎をくさりく追かけましたが、落ちゆく兵に、かけ距てられ、残念ながら見失つて了りました。何しろ續く兵は少なし、大守の御言葉もあり、深入しては一大事と、胸を撫つて戻りましたが。もう雍丘の砦は全然灰になつて出けら一つ飛んで居りませぬ。逃足立つた軍勢の事なれば譙郡あたりまで落ちて行つたで御ざりませう、は、は、は、。

張巡 ま、祝杯と云ふ所なれど、酒はなし(と笑ひ)水でも一杯。(水を呼ぶ侍女隣室より水甕を携へて上場、皆々の杯になみくと注ぐ。萬春息もつかずにのみ侍女退く)

許遠 して、その額の傷は？

萬春 (額に手をやりて) これは！なに、古い傷で御ざる。五日前の傷で御ざります。あの狐潮が「天下の事去る、足下危城を守り」とか云ふ勸降状態の矢文を送つた夕、城門の上に立つて彼奴と談判致しました時……あの傷口が破れたので御ざりませう

許遠 うむ。あの時は某もむつと致した。話しも終らぬ中に弓を引くとは言語道斷な仕業。

張巡 いや。萬春が面に六本も矢をうけながら平然として立つて居たのには驚かされた。敵も大方ならず荒膽を挫かれたわ。

許遠 人形ではないかと思ふたこの事ぢや。

萬春 は、は、は、あの位で、凹たれる様な男ぢや御ざりませぬ。

張巡 あの明けの日であつた、「向に雷將軍を見る、方に足下の軍令を知る、然るに天道を如何」とか猪口才な事を云ふて來たのは！「君、未だ人倫を知らず、焉ぞ天道を知らん」と答へてやつたが……

三人聲を合せて笑ふ。部將再び下手より入り来る。食物を盛りたる大皿を捧げて兵士三人隨ふ。

部將 さき程の御命令の旨を傳へましたれば、將軍たちが召上つてこそ吾々も快く頂戴が出来ます、さもなくては勿体なう咽喉に通りませぬ、とて、どうしても聞入れませぬ。何卒、これだけ御収め置き下さりますやう。

兵士を顧みる。兵士、恭しく皿を卓上にのせる

張巡 うむ、さうあれば折角の贈り物、有難く貰つて置かう。が只さへ乏しい食物、この半分でよい。

部將 いや。それだけは是非とも。

兵士感泣し居る

萬春 や、泣いて居るな。勝つて泣く奴があるものか……あ、霧雲が今夜はもう歸つて参りま

しやうが！。

許遠 そうちや、そうちや、遅くとも、もう歸らう。……ではこれだけとつて置いては（張巡を見る）

張巡 では、其方達の好意をうれしく受けるぞ

部將、兵士下より退く、

萬春 あの進明と云ふ奴は一筋縄ではゆかぬ男。どうか、うまくゆけばいゝが。

許遠 霧雲ごのおちついては居らるゝが、また年が若い。一時の情に驅られて向ふ見ずな事をやりはせぬかと、それ許りが心配ぢやが。

萬春 いや、氣の長いと云つたら古今無類、泰山が崩れかゝつても、びくともする男ぢやありませんぬ、がその代り一旦怒らしたら又大變。萬春、借りて來た猫のやうに庭の隅に縮んで居なくてはなりませんぬ。

張巡 それにしても遅い歸り。（獨語のやう）我等が請をうけ入れぬのではあるまいか（と思入）

許遠 某が進明と知つたのは二年前の月華殿の花見の宴。見かけは義に固そうな男で御ざつたが。

萬春 あれで中々腹には狸が寝て居ります。（問）何はともあれ、思ひ出しては矢も楯もたまたらぬ迎ひに行かう。先程の合戦で敵の圍みは破れ放題、もし遮る兵もあらは一蹴りに蹴散らして行かう。遠いと云つたさて、高のしれた臨淮道。百騎もあれば澤山ぢや、（立上る）許遠 待つた、待つた。そう速まつても仕方がない。

張巡 萬春！今夜だけ見合せてくれ。萬一の事があればこの張巡が、命にかけて捨てゝはおかぬ。（問）苦しい時の神だのみとやら、窮しては、さもしうもなる凡夫の果敢なさ。（獨語のやう）して進明なぞに救を求むる氣になつたらう。

兵士一人下より上場

兵士 南將軍が唯今これへ！

三人等しく驚き喜ぶこなし。兵士去るさすぐ南霧雲上場、三十許、色白く肩秀でたり。旅装のまゝ。

霧雲 唯今歸りまして御ざります、

張巡 おゝ霧雲。大儀であつたのう。

許遠 さ、こちらへ、

萬春 よう歸つて來た。今も噂をして居た所ぢや

霧雲。萬春の傍に腰を下す。四人顔見合せて無言、やゝ長き沈黙

霧雲 大方は私の様子でお察しの事と存じます。進明に兵を出す意は更に御ざりませぬ。彼は稀代のしれ者に御ざります。

（問。突然隣室にて。せきあぐる嗚咽を強て抑ふるけは、いする。霧雲屹となる。張巡、眼もて語り續けよと云ふ）

裏山傳ひに路を求め、星の光を頼りとして漸く下りた麓の里、森、竹藪のわかちもなう、眞一文字に駈け抜けましたが、よしない敵にかゝり合ひ、思はぬ刻を過した上、乗る駒さへもうち仆し、山より見れば、つい目の先の臨淮も、歩くに遠き二十里の道。秋の日影の

早や落ちて、川面寒う、夕霧の立置むる頃、臨淮城の高櫓たかやぐらか、暮れゆく木立の上によつと見えそめました。(間)。して直ちに城内に招せられて、進明とも程なく會ひましたので、早速使者の趣を傳へますると、「それは御困りで御ざらう、が何も其様に急ぐにも及ぶまい、悠然ゆうぜんと休まれよ」と、事更に悠長に構へて居ります。そののみか、酒肴を取寄せ、歌女うたひめさへ席に現はるゝと云ふ仕儀。私は氣が氣でなく、「今睢陽の危さは累卵のそれである、四百の將士を、見殺にする所存なら兎も角も、確と御返事が承りたい」と申しますと、「急いでは事を仕損する」と笑に紛ざらして杯をさします。間。眼前の饗應を見るにつけ、思ひ出すはこの城中、何で箸がつけられませう。張巡、初め一黨のもの、米麥を口にせざる事、一月あまり、私許りがこの珍珠を貪るは、義に於て忍びませぬ。それにひきかへ、貴方を見れば、兵は精しく糧は足ると云ふ今の境遇。一旦、男が頼まれた上は快く引受けるが丈夫の本領、まつた帝みかどに對する報恩の一でありませう」と押なつて申しました。すると進明は「よく云はれた。睢陽の危急は噂に聞いて知つて居る。明日にも出陣しやうと思つて居た」と申します。では誓文をと疊みかけて云へば彼は傲然として正しく金打きんてういたしました。そこで私もこの吉報を瞬時も早く御知らせしやうと、すぐ様その場から立上つた時、彼れは暫くと手で制して、凝と私の顔を見つめてました。やゝあつて聲をひそめ「足下の様な武士を待つて居た、いつそ此城に住む氣はないか」と云ひます。私は驚きました。「この城に住むとは」と問返せば「張巡を捨てるのだ」とかう申します。

萬春 何！

張巡黙然たり。許遠座をすもむ。萬春先程より眼をいからし腕をさすり居りしが

と拳もて卓を打つ。杯落ちて静寂を破る、又隣室に嗚咽ういんげんの聲、

霽雲 彼の聲は眞面目でありました。彼の眼光は怪しく輝いて居ました。「では、あの援兵は」とつめよすれば、突嘯とつせういて「あれは嘘ぢや！」

萬春 む、む！

霽雲 もう、忍び緒も切れ果てた。それは「正氣の沙汰か」と屹と見れば、「進明未だ幸に氣は確かぢや。睢陽城は江淮第一の要害とは云へ、二十四郡を擧げて安祿山の旗風に、塵かぬ草もない今日、いかに張巡が躍起となつて騒いても、螻螂の斧の振舞ぢや。顏真卿も捕へられたそうな。結句捕へらるゝか、斬らるゝか、いづれ落は見えて居る。又許遠のお人好も大概にするがよい、大守であり乍ら、張巡の風下に立つて」など、聞いて居れば果しない悪口雑言。たゞ一刀にと思ひましたが、城中が心もとない、こんな蛆虫手にかけるも刀の汚れと、心を静め石床蹴つて立出づると「どうしても留るは嫌か」と、後から隨いて來て覗きこむ。私はやにはに鞘を拂つて

許遠 えゝ！

萬春 斬つたか？

霽雲 われとわが指、切り落した！



二人何!!

霽雲 私は進明の顔を、たゞと睨み「御志は有り難いが、承引致しかねる。不信に對するにも信を以てするのが義士の常。……いや御好意に酬ゆるため此指一本献上する、後日の思出にせよ」と鼻柱に叩きつけて、後をも見ずに歸つて參つた、

隣室にて

侍女 お上様、お上様、まア眞闇にしてここに御出なされます

と云ふ聲聞ゆ

霽雲 うむ、それから、まだ奇態な事を云ひましたわ。大手の門を騎り出した時、樓門の上から霽雲、霽雲と呼ぶ、應と答へて仰いて見れば、進明が顔を出して、「唯陽城内の一本の花は救ひたいが、又それあるために救はれぬ」とそのまゝ姿をかくしましたが……

この時女の魂ぎる聲して侍女、隣室より轉ぶが如くに驅けいて

侍女 あの……あの……お上様が……御生害を……

皆々驚き立上る。と廻舞臺にて正面下手に送り、上手なる隣室を悉く現はす。部屋は唐代の好尚によりて装らひ、調度の配置よろしく。正面の戸半は開きて長廊下を見せる。

翠蓮、乳の下を抑へて打俯し居る。張巡等入り来る、万春燭をかゝり、侍女うろ／＼して居る。

張巡翠蓮を抱き起す。翠蓮、目を開き、張巡を見て、

翠蓮 あの……霧雲様の御物語は……こ、これにて拜聴致しました……生きて甲斐なき妾の命……三途の川とやらで……いつまでも……いつまでも……御待ち……申し

て居ります……あの進明は……まだ……怨……怨んで居るので御ざります。

……救に來ぬのも……原因をたゞせば……妾ゆへ……妾故……あゝ……

皆々不審の面持。張巡、暗涙を呑む

で息あるうちの。た、たつた一つの、お、願ひは……どうぞ……妾の身を……糧、

糧にして……下さりませ……それが御願ひで……御ざります、どうぞ……どうぞ

……糧に……

聲漸々細り行く。張巡、翠蓮の耳に口をあてるようにして

張巡 よく云ふた。その願。承、承知したぞ!

翠蓮、微かなる笑みの口邊に上るを見れば、がつくり張巡の腕に凭りたるまゝ、落入る、侍女、泣き伏す、深き沈黙、折々風の音、窓を打つ、やゝありて、張巡、翠蓮を靜かに置きて立上る、許遠、霽雲、萬春、名、よき所に掛ける。

張巡 今は包むも詮のない儀。方々、張巡が一條の懺悔話、何卒御聞下されい。(重に評遠に向ひて云ふ)予と進明とは同じく江南の生れ。村里さへも同じであつた。茅花つむ春の堤にも椎實拾ふ秋の森にも、かはる事なき幾年の竹馬の友でありました。が、年月を重ね／＼するにつれて二人の間には大きな溝が出来ました。生れついた性質の大河は二人を遠い兩側に距て、了つた。彼れはその頃より人の鼻息を覗ふのを處世の秘訣と心得て居たらしい。(間、あゝ糾はれは人の運命ぼとわからぬものはない。二人は……二人は同じ少女を戀ひました。その少女こそはこれなる翠蓮で御座ります。これだけ申せはもう、御解りになりませう、

（間）祿山が帝座に對して奉つて、弓を引いた初め、御承知の通り私は眞源に居りました、賊の軍門に降つた譙郡の太守は私にも一味になれと薦めました。が私はその夜——あゝ常にもまして美しい星月夜であつたが——その夜直ちに玄元廟前に勤王の旗を翻しました。その折進明も臨淮の固めを嚴にして居ると聞きましたが、それよりは合戦に寧日なく、他を顧る暇もありません。此度、霧雲を派るに當つても、かやうな私事は、夢にも思ひよらなんだ。貴方のお勧めもあり又兵士の飢ゆるのを見るに忍びず、救ひを求めたのが不覺であつた。まさか私怨のために君恩を蔑にする程の男とも思はなれたが、霧雲の歸りの遅いにつけ、さてはと思つて獨り胸をいためて居りました……間 凶事と云へは、よくも適中る世の習ひ。（と憤然として語調急に）。危急は眉に迫つて來た。此上は最後の思出に腕のつゞく限り斬りまくつて屍を馬革に包むより外はない！（又ゆるやかに）、して、方々罪亡ぼしと申さうか、亡妻の臨終の願ひ。何卒御聞届下さるやう

諸將、感極まつて言ふ能はず、やゝありて

霧雲 え、！それと知つたなら、あの進明、素首引き抜いて來たものを、

と涙を拳に拂つて身悶にする

張巡 南八男兒！涙は不吉ぢや

折柄兵士の一人、慌しく下手の帳の下に跪まる

張巡 何事ぢや！

兵士 はッ、あの、笕の水が止まりまして御座ります

諸將の面に決然たる意氣現れる。風の音、時雨の音、次第にはげしくなり、角聲遠く響く、靜かに。

幕

## 紫がかつた水色の女

田中正名

暮れゆく山間の温泉は思つたより華やかであつた。

敬一は鬨に腰を下ろして草鞋の紐を解きながら、疲れた足を引きづつて來た峠の方を見ると、紫に夕靄した初夏の山を危く曲りくねつた峠の赤土は朦朧と黒澄んだ森へと姿をかくしたまゝ、行衛をくらまして居る。

森からは時々灯が揺らぐ。

あんな所に人家があつたかしら。あの長い凸凹した峠を一杯の澁茶も得ずに、苦しい汗を拭きながらやつて來た敬一は、殘念そうに眼をあげた。側には女中が、草鞋をぬぐに手間のかゝるのを呆れたやうに、茫然と、手拭を持つて待つて居た。

「姐さん、あの家はすぐ峠から見える家かい」と彼れは森の灯を指した。

「どの家で御座います。あの森の家で御座いますか」

「あゝ、俯向きながら鹽に足をさぶつかして居る。

「あれは旦那さん峠からは、とつても見えませんよ。あの森と峠とは方角違ひですもの、あの家は、あれ、あそこの流れに流れて居る河の端にあるんで御座います」

「そうか、田舎の事情に暗い、敬一はそれ以上聞かなかつた。唯静かに、河と指される方を見ると、はや鎖された夕闇の中を、一條の流れはほの白く北へ。

「あ、あれか」彼は手拭を握つたまゝ、いつか女中と鬮の上に乗立つて居た。

はい、あの河の端で御座います、あの河が、あれから此裏手へ来て居んで御座います」

「あの河が……あれが〇〇河かい」

「はい」

「それぢや、あの河の向ふに離れがあるんだね」

「はい」

敬一は、あの遠くに見える河が、此家の裏手へ来て居ようとは思はなかつたが、彼が療養に出る時に、友が、此温泉は一流の清河を隔てて向ふ岸に離座敷がある。そこへ人は泊つて、湯に入り度い時は舟で此方へ通ふのだといふ事を教へられて居るので。あの河が此裏手へ来て居るにしても、余程歩かねばならぬと思つた。厄介だなと思つた。

「河岸まで大分歩かなかりやならんのか」

「いゝえ、あの河はあれから山を一つめぐつて、此家のすぐ裏へ流れて、来て居るんで御座います、あれ水の音が聞えるでせう」

女は敬一を後から凝つと見て居る。敬一は何んもなく罪を得た。

囚人のやうに女中を振り返つて見る元氣もなく、耳をすまして居た。

萬物は寂として横はつて居る。唯何物かごん底から抜け出るやうな陰に籠つた音がする。時々、漏々と響く。女は、

「聞えるでせう」と促した。敬一は無言のまゝ、尙耳を聳て、居る。

「四邊は愈々暗くなつてしまつた。

「聞えるでせう。ね、聞えるでせう」女は再び促しながら遺骸のやうに、突立つて居る敬一の顔を覗きこんだ。敬一の瞳は寂しく閃いた。その閃の陰には、氷の刃に、そいだやうな輪廓の細面

を漆黒の髪の一二本ゆらりと蛇の如くに動ごめく物凄き女の顔が印象を確めて居た。

思はず身を震はして、我と我が心に返つた時は、後の障子から灯火が淡く洩れて居た。

「姐さん何處へ行つたんだらう、お客さんをお待せして……どうもすみません、どうぞ此處らへ」同じ此家の女中であらう、丁寧に頭をさげて、手荷物を持つたまゝ先に立つた。

「あの女は何處へ行つたんだらう」森の家以來、こぐらかつて来た敬一は、恐を抱かせられて、

無言のまゝ、廊下傳へに、先に立つ、女中に従つた。

導かれた奥の一間は、バルコンの如く水の上に突き出て、そゞろ月夜の感想を去來せしめて居

る。敬一は、水の瀨にかゝる音を聞き、對岸の離れを淡くもれて温かき感情をそゝる灯火の影を眺めて、詩のやうな美しい思に暫し悩まされたが、玄關に得た印象は脆くも燃えた。化物屋敷へ踏み込んだやうな思もする。此家の總てが奇蹟に満されて居るやうな思もしてならなかつた。今に障子が倒れて、温かい風がふうと頬を撫で、灯を奪つて行つた後に何者か白い裳裾をひいて、水の上を美しい歌をうたひながらぼちやりと下へ棹して行くやうな思もして、落ち行く水の音を聞いて怖氣立つてしまつた。今まで汗ばんで居た肌を歩む冷氣は、激しく喰ひ込んで来るやうだ。敬一は寂しさと恐ろしさに堪へ切なくなつて思はず矢鱈に手を鳴らしてしまつた。柔くばたくと裾にからんだ足袋の音が續いて、やがて障子をあけて、手をつかへたのは、玄關の女であつた。敬一は足袋の音に前の女を想像する餘裕もなく、人を得た喜に、その音の近くのを只待つて居たのである。玄關の女は手をつかへて、

「今、ちきお知らせ致しますから……」女はた湯の催促と心得て居るのであらう。

「うむ、うむ」頷いて敬一は風にゆる、灯火の影から、人を得た喜びに女の顔を凝と見た。彼れの眼には印象の女と違つて居た。顔の輪廓は同じいが、見た總ての感情は印象の女を思出さしめなくて飽まで新らしい女を得た心持である。彼は美しい女中だと思つた。同時に玄關に立つて話して居た時、ちらりと見た顔は此顔のやうだと胸に浮んだが、女の顔を凝と見るのを罪を犯すやうに感ずる彼には、此女だと確める事が出來ずに、印象の女と共に、消えて行つてしまつた。女中は言葉を残したまゝ、急いで去つた。

やがて、美しい女は湯を知らせに來た。敬一は手拭をさげて、案内に従つた。長い廊下を通つて、一室に着物をぬいで石の階段を下りながら、彼は

「貴女でしたかね、さつき玄關で御目にかつたのは」と聞いて見た。

「はい」とはつきり。答へたまゝ、猶も階段を降りて行く。

敬一は再び印象の女を思出した。此女であつたらうか。此女としたら、どうしてあんな恐ろしい印象を私に抱かせたのだらう。こんな綺麗な眞珠のやうな顔が。私の頭がどうかして居たのだつたに違いない。

階段は長い長い。何處まで此薄暗らしい階段を辿らせるのだらう。女は平氣に、裾を一寸まくつて、づん／＼下りて行く。穴へ落ち込むやうだ。ぱた／＼と刻む草履の音が果ては陰氣になつて來た。敬一は、

「まだか、大分長いね」絞るやうな聲だ。

「此處で御座います」急いで四五階下りた。立ち止まつて、横に身を寄せた。一枚ガラスの戸はすぢりと開かれた。ぱつと湯氣は白く光をのせて、敬一の身体にゆれかゝつた。敬一の身体は湯殿へ運ばれた。

戸はすぢりと閉められた。ぱた／＼と小刻みの草履の音が再び起つた。

敬一は夢の中から吐き出されたやうに浴槽の縁に手をかけて、あたりを見廻はした。あたりは鏡に圍まれて、照り返す光は、美しく反射して、磨かれた石の各々の柱は大理石を見るやうに。

「美しいお湯だ」美しいと感じて、伴はれた讚嘆である。讚嘆は、ぼちやりりと湯を鳴らす手拭の音に奪はれた。湯槽の中には一人の男が居た。男は聲をかけた。

「よいお湯だ。さ、お入り」がぼりと湯を一と揺り揺つて上つた。

「難有う」どぎまぎして敬一は身体も、ろくくしめさずに飛び込んでしまった。

もやくと立つ湯氣に包まれて湯槽の中に不確な心を抱いて立つたまゝ頻りに肩から、ちやばくと湯をかけて居る。

四十男は流場の隅に腰を下ろした。頭から塗たくり立てた石鹼の泡を桶に二つ三つ續け様にかぶつたお湯に流してしまつて、つと立つた。湯氣は一と頻り、ランプは爲めに暗らく。流された石鹼の泡は溜色に光る板の上を、さも柔く這つて居る。

敬一は依然として肩の上から、手拭で、ちやばりくとお湯をかけながら眺めて居た。云はんとして、もの憂く。黙さんとして何物かにそゝられるやうな。さりとして獨語する程興奮もして居なかつた。

男はやがて、隅の方へ桶に湯を満たして歸つて來た。ランプの下を通る時、霞に投げたゆるめきに似た朦朧たるランプの光に、而も際疾く男の頭が銚色に光つたのを、あてごなく放つて居た瞳に捕へた。その光に刺激されたやうに漸く彼は湯につかつた。がたくと桶を動かす音がした。ざぶくと湯をかぶる音と相待つて、

「坂は照る——照る——鈴坂——曇る……」聲は美しい。湯殿の鏡の壁に反響して、或は急に、

或はゆるく。

そつと延び上つて、見ると男は手拭で足を遅々とこすつて居た。

今まで人が居なかつた隣りの女湯に、絹を振るやうな聲が急に聞え出した。敬一か湯槽から出る男は聲をかけた。

「よい湯でせう。悪るからう筈がない。ハ……」一杯呑んで居るやうな要領を得ぬ口調である。

「え、」二の句をつぐ元氣もなく、桶を前に並べて、何に考へるともなしに漫然と身体をこすつて居る。男は低く又何にか口誦んで居る。

女湯の方にざぶくと湯を使ふ音がした。

滑らかに這る車の音がして、入口の戸があいた。男は唄をやめた。敬一は眼をあげて入口を見た。前の女が噴き出る湯氣に髪の毛を震はせながら、ごんよりとした眼、白い顔を突き出して居た。戸にからんだ指は赤い袖口を抜け出て、さらりと白蛇のやうに。

「旦那さん少し流しませうか」聲は瑠璃板を、はぢいたやうに透明だ。

「俺か、もう止そう」笑ひながら、桶をさげて、男は上り湯の方へ。

「貴方の事ちやありません。貴方なんか誰か……」

男は上り湯を桶に酌んで居る。別に言葉を返そうともしなかつた。その際に、敬一の眼と女の眼と會つた。敬一は鋭く。

「私か」

女は軽く頷いた。氷の刃でそいだやうな面が静かにゆれる。

「私はよい。疲れて居るからよそう」答は確かであった。女は再び軽く頷いたまゝ、二りのよい車の音と共に戸の蔭にかくれ去つた。

女湯はいよ／＼さわがしくなつて来た。洗つてあげる。澤山だと譲り合つて居る。

男は再び、隅に歸つて、戸の方を熟視して、

「行つたな、」と笑ふやうな聲に獨語した後、元氣よく、敬一に話かけた。

「一寸變な女でせう。氣がつきませんか」

云はれて見ると、玄關以來の妙な心持が去來してならなかつたが黙つて居た。

「まだ氣がつきませんでせうね。一寸變つてますよ。何んでも狐がついて居るとかいふ話ですがね」

「狐が？」聲高に。敬一は身体をこする手をちよつと、やめた。

「そんな話ですが、何んでも時候の變り目になると、今でも少しは起きるといふ事です。噂ばかりかもしれないが、矢張り何處か變つたところがあるやうだ。——え、女中、家の娘です、十六七の時一度氣が狂つたのは確かなんだ」男は膝の上に手拭をかけて、疲れたやうに身体を後の鏡の壁にもたせながら、語つて居た。

「發狂したことがあるんですか」

敬一は始めての印象の尋常でなかつたのを思出して悚つとした。

「そうだそうですね。何んでも長襦袢一枚になつて、屏風の上へ、飛び上つたりしたなんて評判だ。顔が綺麗なだけ凄かつたでせう」

此男のほろ酔らしい調子も、いつか消えて、今は確かになつてしまつて居た。敬一の腦味噌には愈々あの凄い印象が喰ひ込んで来た。

「どうして發狂したんでせう。男の爲めでせうか」怖いながら聞いて見度い。

「そんな話ですね。よく知りませんが、何んでも、お客が甘まかして東京まで連れ出して行つて、振つたさかいふて居ますね。本統か嘘かわかりません」男は依然として眼をつぶつて、鏡を背にしたまゝ、疲れたやうにして答へて居る。敬一は此處を出てあの女に會ふのが、何んだか怖はくなくなつて来た。

「今はもう、癒つたんでせうね」不安な己れの心を確めるやうに訊いた。

「何んともないやうですね」

彼は安心した。此時男は身を起して、身体を拭き初めながら、

「まだ御夕飯前ですか」と問ふた。

「え、まだ」敬一は、起つて湯槽の方へ。

「離れへおいでになるんでせう。彼の女が送つて來ますよ。友禪の振袖を着て」男は敬一の方を振り返つて、薄氣味わるく笑つた。敬一は湯に首まで埋めて、黙つて居た。彼れは此家の女中か離れへ來る時は、屹度振袖を着て來るといふ事を友から教へられて居るので今は驚かなかつたが、

美しい女、氣狂、振袖、と思ひ浮べて見ると清姫を思はずに居られなかつた。男は戸に手をかけながら、

「離れにおいでになつたら、お遊びにいらつしやい、松の間です」

「難有つ」

男は出て行つてしまつた。女湯の方には、ひとしきり子供の泣く聲が聞えた。

敬一は取り残されて暫く何んとも思はなかつたが、湯殿へ来る時、穴の中へ落ち込むやうに案内された薄暗い、長い階段を思出して、急に恐ろしさで寂しさに襲はれて来た。彼は頭に水を二つ三つぶつかぶつて、そこへ湯殿を飛び出した。湯殿は相變らず、さらびやかに輝いて居た。怖れど、何者かに追つ驅けられるやうな精一杯の足早で、長い階段を駆け上つた。煤ぼけたランプの微光の下に、衣桁から、衣をはづして、手早く身につけて、廊下を逃げるやうに、室へ歸つて来た。室は眩しい程、明るかつた。

下を流れる。水の音が心地よく聞える。ちらく／＼と山越にもれる灯火が温かい初夏の宵空に、さらめく星と相語して限りなく美しい。やがて月も上る頃であらう。

敬一は今までの恐ろしさを忘れ、横になつて、煙草を、すひながら、欄干越に此景色を美しいと見て居た。嗜好の多趣な彼には、或は歌に、或は繪に、想を描いて居た。

夕餉の膳は運ばれた、給仕の人は前の女であつた、まだ振袖は著て居なかつた。別に變つた素振りも見えないので、象牙に造つたやうな、でも美しい女だと、今にも取り殺されるやうな恐は

いつか消え去つて居た。彼はぼち／＼語りながら愉快に空腹を満す事が出来た。女は其間、つゝ、ましく坐はつて給仕して居た。

「今、船頭がお客さんを離れへ送つて行つて居ますから、歸つて来たらすぐお知らせします」と丁寧な言葉を残して、膳を下げて行つた。敬一は美しさに言葉もなく後姿を見送つた。髪は漆黒に髪は風を孕んで、ふつくりと。

彼にしては極度に疲れて居る處へ、空腹を満したので、睡氣を催して来た。魂は夢と別れて何處へ行つたのであらう、暫く、うつとりとした。魂は感高の、而も美しい女の聲に呼び戻されたのである。

「徳さアーン。徳さアーン。」

滑らかに流る水に、而も華やかに、初夏のうつすり紫の水色に染めた淡い靄の月出る前の空に、美しい歌を聞えて、温く、柔く。美しい女の呼び聲である。

「徳さアーン。徳さアーン」

敬一は欄干に身をよせて下を見た。河に突き出た棧橋に佇立するのは聲の主であらう。水の光に黒くそれと知れる。

華やかにともされた離れの火は坦々と流れる水に影を落して、静かにゆらめいて居る。

やかに軽ろき棹の音と共に一艘の小さい屋形船が棧橋についた。

「何に愚圖／＼して居たんだ。あんなに早くつて云ふてやつたのに」女は叱るやうに。



「あのお客さんが月が出るまで河をうろつこつて、彼處へやれ、此處へやれといふもんだから」  
雛枯れた年寄らしい聲だ。

「松の間のお客さんだつたね。あの人本統に好かない人だ」。

女は小走りに内へ入つた。松の間の人。湯殿の人。禿頭。を思つた。敬一は女が来るだらうと思つたので、座へ返つて、煙草をのみ出した。

女は案内に來た。振袖はまだ着て居なかつた。彼は案内される儘に棧橋に立つた。舟の艦の方  
に船頭の煙草の火が赤く光つて居る。荷物は既に船に乗せられてあつた。石の瀬にからむ水の音  
は今更のやうに響く。女は船頭に、

「暫く待つて居て、すぐ来るから」と云ひすて、薄闇の黒い姿は別種の趣を敬一に抱かして再  
び去つた。彼れは今度こそ友禪の振袖を着てくるのだなと思つた。同時に一層の美しさを期待し  
た。

彼は船に乗つた。船の中は畳が敷きつめてあつて、真中に大きな船ランプが吊してある。彼れ  
は船頭と話しながら、女の來るのを待つた。

「此河は大分深いから」

「真中は矢張り深い」赤く煙草の火が嘲るやうに光る。

「流は早いだらうね」

「山河にしちや此處らは、まだ早うない方だ。あの出つ張つて居る龍ヶ鼻の下が一番深くて急な

んだ」と上流の方を赤い火で指した。追つた斷崖と見ゆる龍ヶ鼻は怪物の如く黒い。話は暫く、  
とぎれたが思出したやうに、船頭が、

「あのな。あの龍ヶ鼻の下で、こうつと、もう五年ばかりになるか、可愛想な事があつたよ。丁  
度貴方位の若い人さんだつたがな」

こつこつと煙管を船べりに叩いて果ては獨語のやう。

「どうしたといふの」横になつて、頬杖つきながら、巻煙草を燻らして居る。彼れは友から、龍  
ヶ鼻には一篇のローマンスがあるが、行けばわかる。今聞かせると興味がなくなると、聞かして  
くれなかつた事を思出して、これだなと愈々興が湧く。

「丁度今頃でしたな。そうく、四月だつた。また越後境に雪が見えたから——夕方からお客をの  
せて……」

物語は佳境に入らんとして來た時、振袖の女は此家の亭主と來た。——果して振袖を着て居た。  
振袖を着せて棺に葬つた女の脱け身のやうな美しい女。逆ても此世のものとは思へなかつた。  
誇張して、虚飾して花から抜け出たやうな女とも思へなかつた。顔は象牙のやうに硬く冷たい。

鏡に映える花の美しさは初夏の宵には、あまりに、物凄く寂しかつたが、待宵草の風情は、月  
發たん此宵に、友禪の振袖が限りなく、あらはして居た。どうしても紫が、つた沈痛の水色の女  
である。

敬一は勿体ないやうな氣がした。いかに女の好みでも、發狂といふ、經歷づきの女に、振袖は

却て、人の恐怖を呼び起す材だと思つても見たが、美しい女は憎くもなかつた。侍女を中流に酒酌みにつれ立つ殿様のやうに――さりとは温泉宿の給仕に出て来るには勿体ない。女は疊の上に、びたりと坐はつた。敬一は視線を避けて、船べりに身を寄せた。月が出たのか水はうつすり黄く油の漂ふて居るやうに。

ちやぼりと竹棹の音。ぐらりと船の傾き。亭主は棧橋の上に何にか囁いて居た。船は岸を離れて中流へ。

滑らかに見えた水は成程中々急であつた。船頭は、こそこ／＼と櫓を押し始めた。水は次第に光をのせて黄い波が、廣／＼と寄せる。船は心地よく揺れながら進んで居る。女は憤ましく坐はつたまゝ、何にも云はぬ。船頭も歌ひ出しそなうな氣配はなかつた。敬一は前にローマンスを、へし折られた淡い悲に堪へないで、

「船頭、前の話の續きを聞かせなひか」と聲をかけた。水色の女は何んだと問ふた、船頭は、  
「また龍ヶ鼻の危難さ」と簡單に答へながら櫓を押して居る。

「お爺の得意の話だ。聞かして上げないか」水色の女は口をはさんだ。  
「さ、さ」と促されて船頭は語り出した。

四月の末、まだ越後境の山には雪が消え残つて居たが、春らしい風は何處ともなく吹いて心地よい或る夕方、水上は、はや夕霞を渡たして、紫に彩られた帳の奥からは、鶯の聲が聞えて居た。晩餐を終つた、梅の間の十日ばかり前か泊つて居た、若い夫婦と別に下女らしい女の三人は遊

散ながら、上流へ屋形船を出そうと云ひ出した。徳爺は此上流は急湍で危いから止せと頻りに、止めたが、聞かずに徳爺の一寸見えなくなつた留守に、船を上流へ浮べて行つた。誰れが棹を執つたのか多分、男自身であつたらう。

名残りなく春の日は紫に落ちて、離れの灯が華やかに水に影を落した頃龍ヶ鼻の方に、ほろ／＼と飛ぶ笛と琴の合奏が、云ふに云はれぬ妙韻を流すのを聞いた。彼等は樂器をのせて行つたらしい。暫く妙韻は聞えて居たが、其後は絶えて聞えなかつた。いつまでたつても離へは歸らなかつた。夜は更け行くばかりなので、宿でも心配して、徳爺を始め村の人々を頼んで搜索船を出した。急流、危険な、龍ヶ鼻、而も夜が更けて居るので、手のつけ様がなかつたが、水瀬にかゝつた船の板切に續いで、琴の糸が岩にからみついて居たのを見出した。結果は急湍に立つ天狗岩に突き當つたのだらうとなつた。

此處まで語つて徳爺は、  
「可愛想だ、思ひ出すと涙が、こぼれる。翌日、龍ヶ鼻の澱になつて居る處に、二人の死骸があつたぢやないか。下女は此河下の水門にかゝつて居た。實際小説にでもあるやうな話だな。玉のやうな若い夫婦だつた」。

櫓の音は咽ぶが如く、訴ふるが如く、徳爺の話に遂には節付けて居た。敬一は此話を、馬鹿らしく聞いた。とても實際あつた事とは思へなかつた。誰れか龍ヶ鼻の急流を利用して作つて行つてくれた一篇のローマンスとしか思へなかつた。唯笛と琴の水に流した曲は、もし此話が事實で

あつたら永久に、籠つて微妙な大音楽を奏して居ることだらうと思つた。

水の瀬は愈々急になつて居た。中流を越してしまつたのか。月光は黄より白に、銀を冷く水に浸して月は空に上らんとして居た。水色の女は突然叫んだ。

「心中だ。心中は美しいな」

敬一は悚として女を熟と見た。振袖の女は相變らず美しい。磨かれた白い象牙に眞珠の光をのせて走つたやう。何處から洩れた聲であらう。

「心中だ。心中は美しいな」敬一は己れの心に叫んで見た。追恨の叫だ。振袖に包んだ此女には始終此追恨の何者か、纏ふて待宵の端麗を飾つて、濃艶の外に出でしめぬのであらう。

船はやがて岸につかんとして一と揺りゆれた。水には離れの軒にさげられた岐阜提灯の影が淡く淡く水の底に沈められて居た。

## 猶太人

水 瓜

濱づたひに、とある醜穢らしい町を廻りくねつて行くと埠頭場へ出た。初夏の午後の日光に照

されて揚場役人は聲高に何やら罵つて居た。荷は其處いら一ぱいに積上げられて、その間を忙しそうに立働いて居る人足共は、赭黒い顔から流れ出る汗を、手の甲で拭きながら時々物ぬすみでもするやうに四邊を見廻した。此邊の家は貝殻の様に小さくて、碇泊して船の檣や帆索などの青い空を我物顔に領して居るのが屋根越しに見える。海から吹く生温い潮の香が、立のぼる埠頭場の砂塵と交つてむつとさせる様な、け重い氣が胸に迫る。自分がこゝを通りかゝつた時、杭に繫いであつた馬が何に驚ろいたのが一聲高く嘶いて跳ね上つた。するとその傍に遊んで居た小供の一人が吃驚して泣出した。人足たちはにやりと笑つた、中にはこれをしほにパイプを取出したのもあつた。自分は此間をすたゝと駈けぬけた。埠頭場を突きつて四五町も行くと、町並が次第に疎らになつて、月桂の並木がたゞ。路は爪尖上りに海沿ひの岡の脇腹を、羊腸と頂まで走つて居る。

頂近くになるに従つて、森はだん／＼鬱茂して解の樹や、櫻の樹や、落葉松の類が杖もつ手首も青むばかりに茂つて居る。鳥の音も物寂びて聞える。森の下路には處々、清水が湧いて柔い苔の上にも音もなく注ぎかゝる。常盤樹の根が跳ね返して自らなる枕木を一足毎に踏んでゆくと百合や胡蝶花が咲き亂れて、小徑の幅を狭めて居る。自分は森を斜に横ぎつて、海に臨んだ高臺へ出た。そこには半月形の腰掛が据えてある。

里人は白堊の斷崖と呼ぶ藍碧の淵を抜け出で、二十五丈の絶壁を天に冲するこの丘は、月照る夕は月に榮え、日照る朝は日に榮えて、天が下に幾世の春を驕つて居る。その斷面は昔ながらの純

白である。

水や空とも分ちかねる水平線上には、佛蘭西の山影が淡く烟つて居る。あちらこちらに帆船が  
出る。海は初夏の潮を湛えて静まり返つて居る。巖打つ浪の音も今日は夢の世の、樂の音をさな  
がらに、け懶るさうである。さつき来た熱間の埠頭場は森かげになつて見えぬ。たい耳を澄ますと  
物の音、——人の聲、犬の聲、物を叩く音、車の音——が玩弄箱を掻きまはして居る様に、雜然と  
響いて来る。虻が一匹幽かな聲にブン／＼啼いて此方へ来た。が、又急に氣をかへて向ふに咲い  
て居る黄色い花の方へ飛んで行つた。自分は芝草の上にごろりと仰伏になつた。晴れきつた青空  
を絶えず白い雲が通る。

## 二

濃霧と煤烟の都を逃れて自分がこの離れ嶋の港町に着いたのは小雨をぼふる夕であつた。舸呼  
ぶ合圖の笛が、けた／＼ましく夕暮の港に響いたとき、降りしきる雨脚が次第にしげくなつて船室  
の窓硝子は飛沫く雫に縦横の波紋を描いて居た。埠頭場から宿屋へゆく馬車の内は堪えられぬ程、  
幽鬱だつた。窓から覗いて見ると夜を彩る街燈の光が、薄ぼんやりと街がしらを照して居た。夜  
に入つては雷さへ鳴り出した。自分は旅寐の夢を幾度が揺り起された。眼を開く度に雨と風は館  
を包んで黒くざアと鳴つた。自分はとう／＼ベットから離れてカーテンをひいて外をすかし見た。  
雨はやんで雲の絶間に星が閃めいて居る。自分は部室の中を歩きつゝ、「皇帝は逝きぬ」の包を以  
て初まる、ルグラン第九章の低唱した。

皇帝は逝きぬ。アトランチックの蒼溟なる離れ小嶋に、その寂しき墓は築かれぬ。此世をも  
いと狭きものに思ひなせし君は、さ／＼やかなる丘の下に、静けくも横はるなり。傷む思ひに  
五株の柳は丈なす緑低う垂れ、情に脆き、さ／＼川は、嘆きつゝ、碇びつゝ、そが前を咽びてぞ  
行く。奥都城に刻み残せる文字もなし。さはれ、クリオの神は正しき筆をもて、無象の銘を  
鏤刻したり。そは御魂の聲の如く、星變る後の世までも消えはてじ。

ブリランの國よ！此蒼海こそはいましものぞ。されど、偉人が最後に加へられたるいまし  
の汚辱は、この海、この潮を傾けつくすとも、いかでかそを雪ぎ得べき。

セントヘレナは淨き尊き御墓ぞかし。……

星は閃めいて居る、自分は思ひつゝけた。皇帝は魔の如く、嵐の如く行き過ぎた。行き過ぐる  
處、草を抜き樹を裂き、岩を碎いた。一度立つて雲を呼べは全歐悉く地に伏して聲もたてぬ。し  
かも彼はコルシカの一辯護士の小悴にすぎない。個人力の如何ばかり偉大なるかを世に教へた  
のは彼であつた。われとても……自分は自分の素性を省みた。云ひしらぬ感慨が若き胸に沸き  
返る。

星は閃めいて居る。友の書状によれば、自分の著、旅の繪姿第二巻は發賣禁止の厄に逢つたと  
聞く。あの中には「ノルデルネイ」と「北海」と「ル、グランの巻」とが収めてあつた。形式主義、貴  
族主義を痛罵したのがそれである。海はわが心なりとて、水草の花さく時、水面に現はれ、萎む  
時また沈むやうに、幻の奇しき一本の花が、心の底に浮び出で、且咲き且萎みゆく思ひの跡を

歌つたのがそれである。或はわだ中の珊瑚樹に昔の戀を訴ふる鶯を歌ひ、或は鼓手ル、グランが記念に托して皇帝の雄風を偲んだのがそれである。天の下の群小はご仕末に了へぬものはない。自分はこの報を得た時、「小生は今や遠く響かん聲を有し居候、君は永へに神聖なる権利の蹂躪者、思想界の獄卒ばらが耳を貫くこの聲をお聞なさるべく候」と返事をした。

星は閃めいて居る。嵐は過ぎた。夜は静かである。自然は遠く塵寰を絶して、絶對の平等觀に、下界の紛紜を罵つて居る。古今を超越し東西を脱却してあらゆる權威を風馬牛し得るものは自然のみであらう。徒らに流俗に伍し、白頭に儻個し、浮世の流轉を嘆かんよりは……自分は何を押してバルコニーへ出た。夜氣はうそ寒く肌に迫る、斷崖は巨人の如く闇の中に立つて居る。満山の樹梢を掠めて海の風が轟と鳴る。流に寄する波の音は手にとる様に聞える。海原近く灯影の揺らめくは、港が、り舟であらう。沖は御空の星に應へて微かに光つて居る。

翌日の日であつた。自分は濱へ出た。晴れ渡つた日の海に落ちゆく夕陽は美しい。映え返すべきちり雲一つない夕であつた。水平線上の少し上で全く光を失つた大日輪は、眞紅の球のやうに見へた。空は一面の薔薇色に染められた。白堊の斷崖も薔薇色であつた。眞砂路も薔薇色であつた。紫の沖合から押しよせて岸に碎くる波が、し、らも薔薇色であつた。後の寺の塔も公會堂の屋根も同じ色に輝いて居る。眞紅の球は刻一刻に落ちてゆく。自分はあから目もせず見守つた。弧形となり、半圓となり楕形となり、最後の一点も沈んで了つた時、自分は漸く吾に歸つた。淺黄が、つた大空にはいつしか黛赭色の雲が萬條のやうに浮んで居た。踵を返す途端、急に黒い影に壓しつ

けられるやうに思つた。物忙しい夕暮の町を自分は宿屋とは反對の方に歩きだした。ふと劇場を覗いて見る氣になつた。そこで向ふから果物の籠を抱へてやつて來たお上さんに

ザネット座へはどう行つたら可う御座いますかと聞いて見た

え、あの、そら、宿屋の看板がありません、赤い獅子の首を書いた。え、あの角を、右へいらつしやいますとね、通りに出ますんですよ。それをね、左へ曲つて、そう二町も御座

いませうか。左側ですよ  
と教へてくれた。自はその通りに歩いた。小さい嶋には不相應な位、立派な建物で何だかゼニスにあるドージを小さくした建築であつた。

藝題は「マアチャント、オブ、ゼニス」とある。自分は物怖したやうに立止つた。自分は満身の血が頭へ上つたやうに感じた。それで、すばやく四邊を見廻したが、幸、それを見とがめるものもなく、群集は唯一夜の清興を得んとあせるもの、如く、嬉しそうな顔をして一向に騒いで居る。

自分は切符を買つて中へ入つた。

特別室も上等土間も、もう一ぱいであつた、自分は棧敷の片隅に腰を卸して幕の開くのを待つた、ゼニスは、何んな所でせう

と小商人らしい男が口をきいた。

「何でも水ばかりだつてますせ

と今一人が云つた。

「水ばかり! どうして歩くんだらう」

「そりや橋が澤山あるんでせう、……火事の時便利ですね」

「は、は、は、」

と傍から頑丈な男が突然笑つた。皆は驚いて其方を見た。

「貴方たち。エニスを知りませんね。……そう、水ばかりです、こゝらの道路が皆水でね、

舟で往來してる、まあ、八百屋へ行くにも肉屋へ行くにも一漕ぎすると云ふ寸法だあね。舟

はね、ゴンドラツて、變手古な形をしてる、そいつを漕く船頭が又、裸一貫の意勢のいゝ

野郎でね。……

「へい。貴方」永らく彼方に居なすつたか?

「私! 船乗でさあ、港々が死に場所だね。そら歌ひますね。」

異國通ひと空とぶ鳥はつて、どこでお果て遊ばすやら分らねえ、は……

「は……冗戯を。で、シャイロツク見たやうな奴が今でも居ますかい、?

「猶太人! 猶太人は胴慾だから金持なんだか、金持だから胴慾なんだか、知らねえが、どう

もよくねえ奴が多いね、私も、あのナポリでね、辛い目に逢つたつけが……

鈴が鳴つた。幕の開く合圖である。観客はごよめき渡つた。會話もそれきりになつた。

幕を追ふて観客は次第に熱して來た。シャイロツクが證書通りにアントニオの胸の肉を取らう

とする刹那、判官ポーシャが「肉一片とは、書いてあるが血一滴とも書いてない、そのつもりで切れ」と一喝する所で、彼等の狂熱は極点に達した。ポーシャは疊かけて云ふ。「血は一滴でも落す事はならぬ。又肉も少しの間違いないようきつと一片とりませうぞ。もしこれに違ふ時は其方を死刑に處した上、財産は悉く没収するからそう思へ」と云ふ。観客の喝采は鳴りもやまない。自分が黙然として首を垂れた。劇はこの間に進行して、貸金は棒引となり、財産は駈落娘に譲る約定の下にシャイロツクは法廷を出る。観客はほつとしたやうに、面白げに左右に呷き初めた。

自分はシャイロツクのために泣かすには居られなくなつた。自分は猶太人である。水清きラインの岸に呱呱の聲を擧げた自分は生れながらにして車道を通らねばならぬ身の上であつた。續紛絡繹として、敷石道を濶歩する満都の子女を、緑滴る橄欖の並木のあなたに眺めやつて、あまた、び、馭者の一喝に無念の齒嚙をする身であつた。自分はこの度毎に胸の中に抑へ難い反抗の情の閃めくを覺えた。自分はそつと目を拭いた。この時嗚咽の聲が電光のやうに自分の胸を貫いた。聲はすぐ前の列から起つた。二十歳ばかりの女である。くつきりと白い襟あしに後れ毛がはらはらと零れかゝつて居る。晴着ではあるが衣物もさして立派でない。女は手巾を口にして凝つと堪えて居るが、しやくり上げる嗚咽がともすれば外に洩れる。近くの人はまのあたりの不思議に打たれて顔見合せた。突然

「氣狂ひだね」

と小商人が云つた。女はきつと振りかへつた。黒い瞳には冒すべからざる光があつた。小商人は

目をそらしては……と笑つた。この時女の瞳が自分の濡んだ眼と行き會つた。女は忽ち意外の面もちして睫を伏せた。紅は見る／＼耳の付根をも染めた。

## 三

晴れ渡つた青空を白い雲が通る。雲の行衛を見るときもなしに眺め乍ら自分は嶋の二日を繰返して見た。——ザネット座で會つた女は何者の娘であらう。又どうしてあの芝居を見て泣いたらう。あの時の最後の關係を綜合して見ると。アントニオの爲に泣いたのではない、ジュシカのために嘆いたのでは勿論ない。うれし泣きでないのは無論である。すればどうしてもシャイロツクを泣いたのだ、あの猶太人を、——すれは彼女も……

自分は立上つた。斷崖の中程に一本松が見える。深翠の色がしたゝるやうである。打よする波が碎くる度に岩角に群がる鷗が一度にぱつと立上る。

急にうしろで

Chukoo I Cherry tree

Come down and tell to me,

How many years I have to live.

と歌ふ聲がする。ふりかへると七つ許りの女の兒を年がしらに、四五人の小供が櫻の樹を取巻いて居る。手をつなぎ合せて舞踏しながら歌のきれ目に、幹を揺ぶる。熟れきつた櫻實がばら／＼と落ちて来る。それを克明に、拾つては歌の主に渡す。小さい歌の主は一つ二つと勘定する。ま

た他の兒が音頭を、とつて歌ひ出す。

自分は暫らく見て居たが、靜かにその方へ歩いて行つた。

何していらつしやる!

と優しく聞いた。その中の年かきな女の兒は、人懐つしい眼付をして、

「あのう、かうして櫻實落すんでせう。落ちた數が、わたしたちの壽命なんですつて! エーレンに聞いたの!

輪はいつしか崩れて、小兒は皆な自分を取囲んで居た、

「それで、あなたは、幾つ落しました?

「わたし三十よ、三十なんで、おばア様になつて了ひますわねえ、と幼い人は美しい眉に皺をよせて

「叔父さんも、して御覽なさい

自分は笑ひ乍ら揺つた。大分取りつくした後なのか、落ちたのは五つ六つに過ぎなかつた。幼い人は

「でも叔父さん位の年なら、これで澤山だわ

と云つた。自分は仕方なしに微笑んだ。

「あら、エーレンが来てよ!

と一番年下なのが嬉しそうに叫んだと思ふと、自分の袖の下を駆けぬけて行つた。二三間彼方の



月桂の蔭に若い娘が今駆け寄つた兒の背を抱へるやうにして立つて居た。自分ははつとした。昨夜泣いた女に紛らうべくもない。今日は空色の衣物を清楚さうばりと着て、頭には燃ゆるやうな薔薇を挿して居る。娘は稚兒の手を引いて此方へ來るが、自分を認めたかのやうに顔を赤めた。それでも年嵩な兒に

「吹上の方かと思ひましてね、方々お捜し申したのでおさいますよ

そう、今日はね、櫻實さくらみとりに來たの……叔父さん、これ、家のエーレンよ、お母様のお氣入りよ、妾も大好き。エーレンはお父さまもお母さまもないんですつて。……エーレン！  
あちらへ行つて遊んでもいいの？あすこに櫻の樹が澤山あるから……

幼い人は森の方を指して娘を顧みる

「あんまり遠くへ入らしちやいけませんよ」

「あゝ、行きやしないよ。すぐ、その樹よ。さア皆、いらつしやい！」

と眞先に駆け出す、われもくゞと後につゞく

自分はその後影を見送つた、娘はその俯きながらその方へ歩き出した。自分は立並ぶやうにして

「貴女、昨夜、ザネット座へいらつしやいませんでしたか！」

と聞いた。娘は立止つた。稚兒は、つゞと見上げたが、そつと手を放して友の後を追つて行く。

娘はしばらくして

「えゝ、參りましたの……貴方も

と微かに云つた。自分は「何故お泣きなすつたのです」と云ふ問が咽喉まで出かけたのを嚙み下した。二人は無言で歩いた。白樺の樹かげの共同椅子まで來た時、自分は腰を下した。娘は立つて居る。しばらくして自分は思ひきつて口を開いた、

「私はあの劇を見る度に泣かれます。昨夜も劇場の表へ行くまでは藝題も知らなかつた。で、あの芝居を知つた時は引返さうかと思ひました。けれど何だか腹の中を見透かされる様だつたから、そのまゝ入りました。……私は、あの芝居を面白いと思つて居た事はありません。見れば泣くんです、シャイロックのために泣くのです、……」

娘は跪座しゃがんで共同椅子に手をかけた、眼は輝いて、情に昂ふる自分の顔を凝つと見た。そして又うなだれた。

「そうだ、シャイロックのために泣くのです、一面から見れば、かゝる胸襟な人間にも同情心を起させるのは、沙翁の偉大なる點かも知れませぬ、が私は少くともそんな原因から同情したくはない。成程シャイロックは證書を楯にして肉一片を主張したでせう、が一旦それが出來ないと決まつた上は、それ以上に彼れをいぢめるのは大人氣ない仕事ではありませぬ。蛇を生殺なまころにしたと同然、一息に殺して了ふより遙かに慘酷です。肉は斬取つてもいゝが血をこぼしてはならぬとは何たる詭辯でせう。人はこゝを喝采する。私は殘忍だと思ふ。

目を海に落す。雲が太陽の面を遮る。心なしか油を流したやうな青い海に、うす暗い影がさす。

「猶太人が虐げられ、侮られるのは祖國を失つたがためです。祖國を失ふ！これ程、悲しい事がありますか、惨めな事がありますか。故郷を離れた猶太人は世界の弱者です。この世界の弱者を虐げるのが人道でせうか。この漂流を苦しめるのが神の教へでせうか。こゝに於て此世に望みを失つた猶太人は、金に慰藉を見出しました。金は彼等にとつて唯一の隠れ家です、戀人です、神聖なる殿堂です。彼等が金のためには如何なる犠牲を拂ふをも厭はぬやうになつたのは自然の成行です。しかし、そう云ふ風に仕向けたのは誰の罪でせう。ガリレヤ人は汝の敵を愛せよと云はれた。

雲は通りすぎた、海はまた晴れやかな色になる、

私はあの場に會ふ毎に、鉛を飲まれたやうな氣になるのです。……私は……猶太の血を享けた人間です。

娘はさつきから泣いて居た。がこの一語を聞くと共に涙にぬれた顔をふりあげた。自分は涙を偲ささめるわけにゆかなかつた、娘は

「妾も……妾も猶太人なので御座ります、

と云ふと共に、兩手で顔を抑へて、椅子の上に打俯した。嗚咽と共に肩は波をうつ。

Chuko ! Cherry tree

Come down and tell to me,

How many years I have to live.

幼い歌は森の中から響いて来る。

猶太人には郷土がない。

自分も亦飄零の子であつた。唯多くの猶太人と選を異にして、自分は資金の代りに詩歌に憧れた自分はまた旅から旅へとさまよつて歩いた。がこの優しい美しの人は、今でも、自分の「いやはての歌」の中に面影を止めて居る。

嶮巖たる白聖の巖は、美しく白き少女の胸をさながらに、蒼海に臨みて立てり。惱みの海は巖にひたと寄り添ひて、いと嬉しげに愛で睡みつゝ浪の強き腕もてかき抱けり。その白き懸崖に市ありて、高樓の上に可憐の少女佇み、イスパニアの豎琴妙に掻き鳴せり。

高樓の下に立つは獨逸の詩人なり。心どころかす調べの糸につれ魂ゆらくと甘し音色に誘はれて。言葉は唇に上らんとす。——我し、かしこの海ならば、君また、かしこの岩ならば——さはれ、わが獨逸の詩人は歌はざりき。たゞかく心の奥に思へりしのみ。初めは云はん術もなく、かくして心隠せしなり。

その夕べなりき。彼は美しの少女と立ならびつゝ渚づたひに逍遙ひぬ。啞の如く言葉もなう。

浪荒らゝかに白き巖を壓し。月はちぎりの邦の通路なる黄金の橋をさながらに、長き光を水に落しぬ。

(終)

## 亂調

## 百橋蛤城

狂熱な瞳だ。

河瀬に照り映えた夕日が染めて流るゝ紅の底に、沈んで行く晩鐘の音を溶かし去るやうに燃えて燃えて燃えきつた燭の中をあらゆるものを煙になれとばかり輝やく瞳である。

手摺にもたれたる女は瞠つた眼にじつと空を眺めて居た。初夏の晴れ渡つた午後空は植込の新樹、緑の梢を抜けて蒼碧の泡のやうに浮いてゐる。巴巻いて一羽の鶯が泡の空を高く低く、遙に植込の彼方へ飛んで行くのを女は憧憬の夢に若かい記憶を辿るやうに餘念なく絶えず輝やく眼を其の後に馳せて居た。鶯が消えて仕舞つた時女は「あら。到頭見えなくなつて仕舞つたわ」

氣抜けがしたやうに言葉を残してぐたりと首垂れた。二つの眼は重い瞼に閉ざされて燭と燃えた瞳は暗愁の蔭に氷のやうに冷却して仕舞つた。

魚が水底に沈んだやうな静かな日である。植込みの裏からさし込む西日は葉の網脈をすかして柔かな黄金色の光を投げて緑と燃ゆる下草の上に淡い陽炎が立つてゐる、何處かで厭やな地虫がキチ／＼と小さく鳴く。瓢形の泉水の水は木の間から漏れた光を浴びて滑らかな面に黄色い反射光を放つてゐる。

女は瘦せた、青白い女である。漆のやうな黒い髪の光澤をこつて赤裸な襟脚に流れ落ちる光は着

物の濃艶な色彩に對照して際立つて白く映えてゐる。女は藤色の衣服を纏ふてゐた。

手摺にもたれたまゝに動かなかつた女は眠つた石像の様に固くなつてゐる。

女は身を慄はした。而かも胸の奥から微かな聲で歌を唄つてゐる。

流れ／＼小川

こゝちの岸や浅いや 彼方の岸や深かいや

流れ／＼小川

ホ……女は軽く笑つて。微笑の波は緊張してゐる凄しい其の頬の上に揺れた。

「あらっ信さん……信さん！」

女はけた／＼ましく叫んだ。眠の底から湧き出した驚愕の聲に吹き閉ぢたる雲の峰を赫と吐き出した劍一閃の瞳。見開いた眼の一瞬は満身の熱を此の中に込めて身も心も一火の燭に焼き尽さるるやう。

物狂はしう板椽を足もしごろに馳せ狂ふて居る。

「あらっあらっ信さん——信さん……」

女は幻の襲はれを夢の如く抱いて、撞と椽端に倒れた。サツと翻いたハンケチの雪は幾多の熱涙を籠めて甘き悲しみの音を包んで仕舞つた。

常正は此の家の離れに下宿してから四日を過ごした。常正は世の普通の男ではない。非常に感受性の強い男で。その爲めに二十四の今まで受けた種々の刺激が痛く彼に疲勞を覚えさせた。世間が

厭になつて段々社會から遠ざかるやうな傾向が近頃彼の心の上に芽して來た。彼れは成るべく人の寄り集まる所や街の烈しい中をはさけるやうになつて來たと共に田舎の淋しい夕を垣根に咲いた夕顔の匂を嗅いで白い花の萼に眠つてるやうな日を過ごして見たい心持がひし／＼と彼の胸に迫つて來た「街は我が前を離れて、人はわが前に我れを離れて」といふ口吻は彼が口癖のやうに言つた言葉である。

常正が此の家へ越して來たのも要するに此の点にあるのだ。此の家は母娘二人に下女一人の三人暮りで男氣がなくつて非常に淋しいからとの對方の申出しと自分も此の家が場末でもあるしまた變化と刺戟の少ない所でもあるのでつい意こころに向いて理わけもなく引越したのである。四日の日子は常正には極めて静けさと單調とに暮れ去つた。常正は學校から歸ると直ぐに書齋に引き籠る。朝夕の食事を運んでくれる家の主婦とは食事しながら極く常套な會話を二三取り交はす他は彼は啞のやうに讀書に耽けつてゐた。此の家の生活とても常正に能く似寄つて居た。一日中に音とては食器の皿小鉢か組に響く庖刀の音の外は全く無人の境に日足が時を甜めて暮れて行く影のやうな静けさである。常正は斯かる極端なる寂寞の中に越してからしみ／＼と胸の氣樂さを感ずるにつれ自分の骨や肉が氣たる弛んで心の儘に倦怠の裡に平安と幸福とを築きつゝあつたのである。然るに狂態の活動は演せられた。窓越しに之れを見た常正の眼の刺戟は異常であつた。闇の底を抜けて出た異禽の音に自然の沈黙が破られたやうに萬籟の眠か醒されたやうに、彼が抱いた厭世の胸は振いて、築いた平安の堡は少なからず破壊されたのである。

「不思議だな。吃驚した」

不意の襲はれにおひいたやうな眼を睜つて常正は言つた。娘が知らず、此の家に娘のある事は越して來た時から知つてるが一度も出會つた事がない。自分の身廻りの世話の主婦と下女の二人切りで、ついぞ娘を見掛けない。娘……娘にしてもあの狂態は普通たゞの女でない、病氣が知らず、精神病！狂女だな。狂女として見れば今まで何處に居たのさう。此の家にか？さうすれば昨日だつて狂態を演すべき筈だ。何うしても不思議だ………兎も角疑問の女だ。主婦に尋ねて見よう………が狂女としたら可哀想だな………

常正は、種々と考えて見た末に可哀想だと言ふ憐憫の情に胸苦しくなつたが平安なる理想を破られた底に動いてる恐怖の念は冷たく身邊を襲ふので却て自分の身が悲しくなつた。常正は自分を苦しめた。小兒が寢醒めに泣くやうに氣が無耶苦耶する、胸が痛んで心か亂れる、苦痛に居堪えないでアイと表に飛び出して仕舞つた。

常正は夕暮れ頃に歸えつて來た。晴れた空は何時の間にか曇つてゐた氣壓の重苦しい疎うらしさは今にも雨が落ちて來さうである。彼は淋しい自分の部屋に入つた。青暗い光線が弱々しく窓硝子がらを流れ込んで光りの届かぬ部屋の隅々には堆高い夜色が群がつてゐた。常正は薄暮の蒸し暑い空気を呼吸しながら放埒に身を疊の上に臥ふせて。兩手に頭を抱いて深かい思に沈んだ。彼が家を出てから常正は晝に演せられた瞳の悲劇を忘れよう／＼と勉めたのだがあせればあせる程印象の影は想像の翼を添えて、より深刻に腦裡に畫かれて行つた。青白い神經質の瘦せた顔に脚色さ

れた異常に輝やいてる大きな眼は襖の暗い蔭に茫々と浮いて居たのを常正は確に認めた。

「あゝ弱つたな。まるで幽霊に付き纏れてゐるやうだ。忘れたいな、然し駄目だ。疑問の悲劇は逆も忘れられぬ。青白い彼の背後に包まれた狂態の歴史が——暗黒の哀史が自分に明になるまでは決して彼を忘れる事は出来ない。自分か此の家へ越して来て折角求めやうとした平安の夢は全く破れて仕舞つた。破れたばかりでない「信さん」の叫びと輝やいた瞳とか結んで出来る謎が自分に解けない間は到底も幸福な夢を再び繰返す事が出来ないのだ。實に困つたな——」

獨り言の様に常正は訴聲に胸中の苦衷を漏らした。

常正はランプを点けた。薄暗い中を抜け出でた幻の女は明るく輝やくランプの廻りを影畫のやうに纏ひついて居た。常正は惱まされてゐた眼に嬉しそうに燃ゆる灯を物珍らしく眺めて居た。曇つた空は到頭雨になつた。厭やな空氣が陰濕りと室内を包んで降る雨の粒がぼつりと暗らい音に屋根の瓦を叩いてゐる。物思いに重く被さつた心を一層滅入らすやうに響く。主婦が夕餉を運んで來たので常正は膳に就いた。

「今日は非常取り亂した様子をお見せ申しましてまことに済みません」

主婦は頻りに詫を言つた。

「あつ今御尋しようと思つて居たんですが、何うしたんです、お嬢さんですか？」

常正は疑念の冥府から征矢を向けたのである。

「あの。私の娘で御座いますか、少し發狂して居ますので、はい滅多に今日のやうに狂ふ事はない

のですが、氣候の所爲でも御座いますかひどう狂いまして……」

「嬢さん、そりやお氣の毒ですな、何うしてあんなになつたんです」

「は、ほんの一寸した出來事からで……」

主婦の呼吸は迫つて唇は固く鎖された。思い出の古い記憶に襲はれたやうに身を慄はせて見上げ、た眼の重い蔭の蔭には悲惨に燃えた紅い熱涙が溢れて頬の上に流れた。

常正は之れだけの返答では飽き足らなかつた。此の主婦の胸の奥に闇から闇へ葬り去られた一篇の哀史を聞きたかつたのだが主婦の眼に滲えた涙の露と窓の外に響く雨の雫の淋しい音とに地の下へ誘え込まれるやうな重い壓迫を感じたので今は何もかも忘れたやうに茫然として仕舞つた。

食後常正は唯だ獨り取り残された部屋に机に倚つたまゝ亦た何とはなしに迷想到耽つた。

狂亂の女！之れだけは主婦の言葉で確かだ。然し自分は之れで満足は出来ない、もつと主婦に話を聞えてやればよかつた。——主婦の瞳の奥に不開と閉め切つた愁の影があんなに沈んで居たもの何うして聞けるものか——と言つて聞かねば矢張り疑問の女は暗愁の扉を閉ぢて自分の頭に殘つて居る。何うも不安だ。常正は何うかして彼を疑問の淵から救い出そうと勉めて居る。自分で與へた説明の軌道を此の女に歩ませて自分で下した解決の定規に彼を測定してそれで氣を落ちつけようとした。彼は眞黒の疑問の上に狂態の繪巻を再び繰返して見た。

「何うもいかな。何うしても意味ある生命を附する事が出来ない」

常正は次第に更けて行く夜を雨に沈んだ物静けさの底に夢想の翼を浸して低徊する女の影を絶え

す追ふて居た。重い空氣の壓力が部屋を込めて陰鬱な氣が襖々の表から立ち昇るやうにいやに氣疎い感じがする。倦み勞れたる不安の色は死の果に世の末を散る落葉の音を聞くやうにヒヤ／＼と身に迫つて来る。彼は人生の聲に捨てられた奥深き洞窟に浪から浮かみ出された岩の上に淋しく座つて居る心持を切實に覺えたのである。考えれば考える程頭は益々亂れる。狂亂の女は煙のやうに意識の上を流れる。遂に常正は「發狂とは何んだ」と投げ捨てる如く言つた。

彼は此の一語にあらゆる疑問とあらゆる頭腦の混亂とを統一しようとしたのである。發狂とは何んだ？。慘ましい運命の犠牲ではないか？而かも狂人程世の中に悲惨なものは何處にある。狂人と言へば自覺を失つて居るものだ自覺のない生存は死骨に咲く毒草のやうなものだ、何等の價値がない。生存の價値なくして生存して居る、悲惨ではないか？。一体生存の現象は何んだ、社會に存在する事實である、死の現象は何んだ、消滅する事實である、死あるが爲めに生存の事實は確實だ、生存の自覺ある人は消滅の死を自覺して居るものだ。社會は生死の距離をつなぐ連鎖に過ぎない。此の連鎖の上に立つて生死を意識して居る人は生きておる事實に於て社會と調和の對照に立つた、生きて存在の意識なく亦た死の門戸に立つて低徊敢て開かざるは狂人である。生きるにあらす死するにあらす連鎖の世間に立つて兩端の生死を解せざるものは狂亂である。だから狂人は世間に不調和である。而かも世間は日一日に進行して居る、進行に對する狂人の歩調は亂調である。紫紅の彩を綴つて輝やいた花壇に一點の黒百合の花は調和を亂だす天然の毒手である黒百合の花は狂態の女である。

壁に浸みる夜更けの雨は心の底の憂愁に冷たく襲ひ來て深かい夢に落ちた囁きのやう。外は矢張り軒を忘れぬ雨垂れの音がポチョリ／＼と響いてゐた。

常正は河口に下つて上流を懷想するやうに同じ道程を幾度となく考え返して見た。

夜の底の響！微かに響くマンドリンの音は齒の浮くやうに夜の幕に揺れる。

クローバの蔭に我れ待てる君

雨降る日 風吹く夜

クローバの蔭に 我れ待てる君

夢を撒いて血の海を漁るやうな歌ふ聲で雨の雫を流れて常正の耳を驚かした。離れとは眼と鼻とに接近した母屋の手摺をつけた一間の板椽——其れは女の狂ふた所である——を隔て、縮切つた障子の部屋に薄暗い燭の灯が燃えて淡い釵影を障子に浮かしてゐた。マンドリンは此の部屋より流れて歌は狂ふた女の聲であつた。音律の流れは亂れ飛ぶ強い日光が新柳の葉に反射するやうに神經質の高かい調子であつた。常正はマンドリンの狂女は魔術の吐いたやうな女だと言つた。海に面した高かい絶壁の上に狂氣を封じて刻んだ暗愁の像が微妙なる音樂に飾られたと思ふと常正の胸には寒水石に抜いた春の女が放漫に霞を劈きいて半身を表はしたやうな暖かみを感じたので悲惨といふ常正の恐怖は温んだ水に岩が溶けて行くやうな平安の影に薄らいで行つた。マンドリンのそれは一しきりで雨の底に消えて仕舞つたが夜を蒸すやうな嘔泣きが沈黙を破つて睦言のやうに「信さん／＼」と叫んで居るのが聞えた。

常正は忘れた記憶を呼び醒ますやうに信さんに注意を拂つた。此の女が垂れた神秘の黒幕の蔭にひそんで居る信さんは此の女の狂亂の哀史に啖く一輪の花に違えなからう。

常正は鈍る勞れの中にこう思ふと、彼は此の二人の男女を美しい想像の上に並べて花やかなローマンスを夢想して見たのである。

麗らかな春の湖を静やかな緑陰に舟を浮けて白鳥と戯れながら甘き戀の花を撒き散らした後に來たる艶美の悲劇詩を繪のやうに常正は畫いたか胸底から黒百合の女か凄いで自分を見つむるので泡の如く消して仕舞つたのである。

常正は非常に疲勞した。

葉が散る、散る、落ちる。一筋路を劃した野邊は白い罌粟の花が咲き續いて生きた色が死んで行くやう。路の並木を透いて晝の星が白い瞳を慄はしてゐる。落葉を踏んで盲目の男はトボトボと歩いて行く。灰色の衣服を着て居る。當所もなく歩いて行くのだ。此の路は何處から來て何處へ通ずるのか知らぬらしい。折々立ち止まつては吐息をついた。

「もう何程歩いたろう。そして此れから先き何程歩かにやならんのか知らッ」

男は幾度となく此んな言葉を繰り返した。然し男は及ぶだけの努力をして行ける所まで行かうと決心してゐる。顔には靜脈がいたく脹れてゐた。唯だ一本の杖を先立に男は遅々として歩き續けてゐる、路は遠くずっと續いて行手に兀と赤く輝やいて聳えてる禿山の麓の森の中に消えて居る。男は遠路を來たものと見えて非常に疲れてゐる。重そうな足取りをして苦しうな呼吸をほら〜

させてゐる。照り付けた暑に喉の渴きは胸を焼くやうに。たゞれた唇をば男は舌を出しては幾度となく舐めづつてゐた。男は森に近付いた頃夕暮の闇が迫つて夢のやうな風が吹いてゐた。何處かで谷川の水は涔々と音を立て、流るゝ。廣野は山に迫つて急に狭まくなつて居た。此の男は森に入つたが路は消えもせず矢張り木の間を貫けてずっと續いてゐた。暮れに迫つた森の薄闇さを弱い青い光が何處となく葉裏を漏れて路にさし込んでゐる。此の男はもう渴きに堪え切れない様子で。「あゝ胸が焼ける。何か飲みたいな。」

と言つて立ちどまつた。盲目であると共に耳も聞こえぬらしい、足下に路に添ふて小川が涓然と白く光つて愉快な音を立て、流れてゐる。腰を屈めたら飽きる程飲めるのだか男は唯だ渴の訴を口にして立つてゐる。

「あゝ渴く、飲みたいな。そして腹も減いたやうだ。一日中何も喰べずに歩いたんだもの。もう何時か知らッ」

男は腹を摩すつて見た。空腹がぐうぐうと鳴る。

樹林の枝にたわゝに實つてる果實は秋を忘れるやうに熟してゐる。手を延べたら男は饑を凌ぐに足るのだ。男は盲目である。何んにも見えない何んにも聞こえない男は唯だ饑と渴きに苦しんで運命の行路を辿るのだ。山の暑さを谷へ下る時鳥は命の在所を探すやうに怪たゝましく鳴いて森の奥には梟が漫然と嘲けつてゐる。大きな蝙蝠が寂寞の中に男の前を運命を呪ふやうに幾度となく不思議な輪を畫いて飛んだ。



男は何んにも知らない。青い吐息をついて起きては倒れ倒れては起き前へ／＼と行く。路は上り阪となつた、次第／＼に微かになつて行く流れの音は小川を漸々に遠ざけて男の背後に残さるゝ森の本立は彼を梢の上に次第／＼と押し上げて行く。路は峻しくなつた。杖は折れた。男は汗みごろになつて手探りに山に登つた。彼は大きな黒い鐵門の前に立ち止まつた。路は門に沮まれて行き止まりになつてゐる。男は苦しい息を喘えきながら扉を撫でゝ見た。重い扉だ。永久に開かなかつた様が青黒い緑青に其の跡を止めてゐた。男は扉を叩いた。ドン／＼と地の底に鳴るやうな響を立てゝ遙かより來る反響は耳の奥へと響いて來た。

「おい開けてくれ」

男は叫んだが何んの應もない。微くさい陰氣が附近を込めて淋しい光景は雨に曝らされた骨のやう。叫んだ聲は濕んだ寔漠の底に消えた。

「おい開けてくれ」

「おこ」

男は叫んでは扉を叩いた。扉の中から

「死なねば開かぬ」と囁やいた。聞こへない男は無精に扉を叩いてゐるが不開の扉は冷たく立つてゐる。氣がえら／＼として男は兩手に力を込めて扉の面を押し出した。男の顔は青ざめて黒い油汗がだら／＼と流れる途に男は自分の体を碎けとばかり烈しく扉にぶつつけた。……………男

は未だ扉の前に立つてゐる。指の爪は抜けて手の肉、体の肉は、柘榴のやうに裂けて紅の血潮がポタリ／＼と雫を落してゐる。

「何故開かないのだろう」

男は氣拔がしたやうに茫然と叫んだ。

自分の胸が冷たくなつて常正は眠から醒めた。

常正は昨夜の夢が氣になつて仕様がな。道々考えて見たが何とも變な夢だ。何か深かい意味が暗示された謎のやうに思はれる。黒い鐵門の前に立つた盲人、マンドリン、そしてそれを弾いた青白い狂女。常正は見た夢に思を馳せると其の夜の連想に頭が亂れる。マンドリンの高い音が未だ耳底に残つて居る。赤い焔と緑の焔と燃えてゐる上を白いものが眞晝の日光の中を走る幻のやうにきら／＼と光つて近寄る。それが白衣の蔭から火のやうな腫で自分を見てゐる狂い女だと見る間に眠りの底から浮くやうな黒いものが茫々と自分と狂女の間に壁を造る。疲れた男が狂はしう扉を叩く手から血潮が流れる、白い女が鐵の扉を透いて頸垂れてゐる、男は何時か狂女と變つて居る……………

常正は斯の様な錯雜な幻影を抱いて苦しもうに下宿に歸えつて來た。

午後の空は晴れて居た。昨夜氣疎く降つた雨は忘れたやうに紅塵を収めて庭一面は洒然たるものであつた。静かな光が透く植込みの奥に木の葉の沈黙を流れて苦蒸した庭石か叢の夏草に強い匂を立てゝ下草は新しい緑の陰にいきれを漂はせてゐる。街のどよみの跡を斷つた此の家の静けさ

は真綿に包まれたやう。常正は窓に倚つた。額に散る、涼しい光りが追憶の影を胸の上に廣げるやうな氣かして腹立たしくなつたので下駄をつ。かけて庭に出た。植込みの木立が梢の若葉に微かに耳語いて、静かな沈黙が香つて顫ふ陰に醒めない夢が絶えず身の周囲を取りまいて襲い來るので、庭前の淋しみが暖かる、やうに胸に迫つて來た。常正は植へ込の中を歩いて居る。木立の幹は昨夜の雨の名残を幾條となく印された濡めつた筋に止めて、彼の胸は搔きむしらる、やうに感じて來た。

「鳥が鳴いてくれ、ば宜いな。怪た、ましく人間が氣違になる程に。そして此れ等の木立が吹き倒されるやうな大風が吹かないかな。」

苦しい甕を抱いて寂滅の底に取り沈めらる、やうな境遇に立つた常正は此んな事を獨り言つた。此方彼方の叢に名も知れぬ赤い花が暗い蔭から薄白い光りを浴びて毒々しく咲いてゐた。彼は神經質の手を延べて身近かな花を二、三、抜き取つて花瓣をむしり出した果ては萼に残つた花の命を慘らしく踏みにぢつた。

植込みを貫けると此の家の勝手口に出た。常正は赤い襷の此の家の女中か植込を背に大きな盥に屈んで洗濯してゐるのを見た。盥の中に入れてる眞白な腕に掛かる赤い濯き物は折々の水ばねに若々しい輝やきを投げてゐた。

常正は近寄つて其れとはなしに狂女のことを聞いて見た。

女中は洗濯の手を止めて、狂女は千雅と呼んで詩歌にも中々上手であつたと云つて話し出した。眼

には涙を湛えて居た。詩人と聞わて常正は大に興味を覺えた。詩人の狂女だ。燃え立つ情緒に自然美を抱いて咲いた狂態の花の象徴は彼の女かと思ふと狂態の根ざしに深く潜んでゐる發狂の動機は異常なる悲劇とローマンスとに築かれたものと豫想したのである。

夏の夕暮れ、重く被さつた雲の色に沈んだ息に、惜しい跡を包んで入る日の白い悲しみが山の裏に消えて行く静かな黄昏を千雅と其の時分五歳になる弟の信一とが二人連れ立つて涼みがてら一町ばかり隔つた小川の邊りに散歩に行つたがそれ切り夜になつても歸えつて來なかつた。母親は非常に心配してお玉と二人で小川の堤へ探しに行つた。静かな夜の色を抜いて淋しく黒く立つて居た根こそげ柳の下に髪を振り亂した女が唯だ一人石像の様に立つて居た。それは千雅であつた。信一の姿は何所へ行つたか影だに見えなかつた。仄かに蒼ざめて行く宵月は闇に此の亂髪の女を抜いて影と光りは絶え入るかに抱き合つて小川の面を流れてゐた。母親は狂氣のやうになつて信一を捜したか其の晩は見當らなかつた。翌日になつて近所の人か小川の渦に流れ込む堰に信一が掛かつて居たと言つて死骸を運んで來てくれた。千雅は散歩の晩から遂に狂亂の扉の蔭に自分の形を潜めて仕舞つた。人々の話によると其の夕暮れ信一の唱歌の聲と千雅の手を拍つて花やかに笑ふ聲とが幾度となく聞こえたと言ふ事だ。母親は一時死ぬばかりに悲嘆の涙に暮れたが種々と人々に勵まされて今の様になつたが千雅は何うしても醒めなかつた。お玉は尙ほ此んな話を附け加へた。奥様の旦那は日露戦争に大尉で旅順口で戦死したが奥様は二人の子供を楽しみに暮してお出でたが今は坊ちゃん死んで仕舞嬢さんは氣違になつて仕舞つた。此の家の不幸と白羽の

矢面に立つた奥さんは實に可哀想だと言つて泣いた。常正はローマンスが期待した程に異常なものでなかつた爲め幾分感興をそがれたが悲惨な境遇の蔭に弱い生活を送る此の家に同情の念が胸に込み上げて來たので惘然と立つて居た。

「それで何か、その嬢さんは今まで家に居たのか」  
常正は聞く氣もなく尋ねた。

「そうですよ。始終家に居ますよ。極く靜かに自分の部屋に閉ぢ籠もつて居ますよ。そしてね……」

お玉は恐ろしい夢でも見たようなおびえた眼付きをして言つた。

夜中になりますとランプを消して蠟燭をつけるんですよ。其れから床の間の壁に對い合つて端然と座つて何か考へて居ますよ。其の時の顔と言つたら怖毛が立ちますよ。眼か据わつて頬の色は透き通るばかり白で……」

お玉はブルブルと身を慄はした。常正は不意に叫んだ。

「夢だ。鐵門の前に立つた盲者は壁の前に座つた狂女だ。そうだ。それに違えない」

常正は昨夜の夢を解すると共に此の女をも解するを得た。此の女は亂調の女である如く鐵門の前に立つた盲者は亂調の盲者である。自覺を失つてる女は壁の裏に死の囁やきを聞き得ずして座つてる。狂亂は何處までも亂調だ。常正は自分と夢と狂亂の女とを同じ連鎖の上において見たら其の中に一縷の血か通よふに違ひない而かも此の三者は非常に調和的ハルモニアスのものだか社會とは何處まで

も不調和た。亂調だ。

常正は胸か空くやうに感じてお玉に別れて歸えつた。

常正はもう一度狂せる彼を見たかつた。一週間は夢のやうに過ぎて夏草が日一日と茂つておどろおどろしくなつたか家の何處に潜んでゐるか聲さいきこえなかつた。其の中に碧い空が段々低うなつて寂しい光りが泡立つやうに輝やいた。植込の梢に南國の黄色い風が吹き初めて涼しく彩色された庭景の緑は何時か褪せて、紅の葉は安住のすみ家何處と白い路上を追はれくで散つて行く。時候は秋に入つた。常正の印象は段々に薄らいでゆく。狂亂の女は遂に手欄に現はれなかつた。

(終)

## 折々

### 磯路

Sさん。

私の家は、村の西はづれに在る。門を出て少し行くと、猫柳にせまく挟まれた里川の水門が立つて居ます。あれからの汽車で發つて、家へ着いたのは、五時頃でもあつたでせうか。暫くして私

は、其の水門に靠れて、遠く西の空を思ひやりました。學校はもう私の心を離れた、別に戀しい友達ともありません、まだ冬枯れたまゝの村々が、寒さうな姿を前に横へて居ます。淡くぼやけた遠山の上に、重苦しい雲が、次第に沈んでかさなつて来る。落日の光が褪せて、寂しく淡樺色に晒れて行く空を見て居ると、たゞ君の思出のみが心をみだす。(静かにしてね、只静かにして居てね)立ち上らうとして、手をついて、私を見ました。そして、もう何も云へないと言つた風に、かう低く繰り返したあの言葉が、込み上げる様に胸にうかぶ。柔和な君の眼に涙を湛へて、今も凝と見つめて居てくれる様に思はれた。あの時が若し夜でもあつたら、そして暖味のある灯の光が二人をのみ照らして居たなら、私は君の手を取つて泣いたのかも知れません。そつと庇ふと云ふ風な君の情を考へると、私は妙に母をでも思ふ様な心持になりました。脚下には微かな堰のせゝらぎが聞えて居た。耳たぶを後から、薄ら寒い風が吹く。暗くなり行く野を西に眺めやつて、私は、長くく立ちつくしました。Sさん、餘りに優しかつた君は、私に悲しい物思ひをさせます。

Dear Charlotte ! Yes; I will take care of myself. I will live for thee. — (Walter)

愚かしさを許して下さい。はじめて病の徴を振り返つた時、私は、この病の若しか齎らすべき怖しい運命を望んで——それは幾年來は豫想してたものであるに拘らず——戦慄しました。私といふ者もとうく廢るのかと、半ば觀念の眼を閉ぢました。それにもまして、唯君と長くクラスを異にすべきかと言ふだけの考が、更に々々切ない悲を起させるのでした。その幾日は、夜を

待つては机に俯伏して泣きました。それ程に思ふものを、何故もつと身に染む話をもして來なかつたでせう。

(此の頃よく眠れるかね。)

(床につくと眠入るのも知らん。)

(さう。小供だね。)

他愛もないものです。それでも、心と話を相背いて行き勝ちなのは、私の性でした。あつさりした、こんな言葉に、深いバックが無いではありません。(さう。小供だね。)—私ほも一度、眼を瞑つて、あの室の別れを思ひ浮べて見ませう。(二月一日)

家には十日あまり。人のすゝめで郷を立つて來ました。金澤へは寄りましたれど、學校のある時分ゆゑ、お訪ねはしませんでした。着いた停車場から温泉までは一里ばかり。鐵道馬車もありますけれど、私は何故か、人に雜つて行くのが厭でしたから、俥を呼びました。曲折した路を半分と來ない間に、後から發つた馬車は、遠く乗り越して、枯れた桑畑の中に影を没して了ひました。近い山々の杜を半ば隠して、細かい霧のやうな、白い雲が、靜かに動いて居る。風ともない山の空氣が、そつと額の上を撫で、行く。山にかゝつた白い雲は、流れながらだん／＼下つて來て、冷々した氣が、やがて身のまはりに迫りました。小さな粒が、ぼつり／＼と眼鏡にかかります。私は幌を下させました。馬車が出來てから、もとの道を通る客は無い相で、私の外には、車に一臺逢ひません。枯葦の高い堤をオチニの藥賣が雨に濡れて行つたのが、眼につきました。幌

を透かして、先の馬車のそれらしい家並に隠れるのを見出してから、十五分程して、私も志す湯の町に入りました。

温泉場は、山を負うた、ほんの小さな村でした。真中あたりの廣場に總湯があつて、其の周囲を湯宿が取り巻いて居ます。總湯にくっついて、電氣浴と金字で書いた額が上つて居る。私の宿は、丁度其の前に在ります。部屋に居ると、下の石疊に下駄を引きずる音がひびく。向ふの宿から、はしやいだ絃の音が傳つて来る。朗かな馬車の笛が客を呼んで居る。何處にか水の落つる音、廊下をゆく人の高話、湯女のうた。こんな物音が一緒になつて、今の私の神経には、却て快くひびく。内の湯を上つて来て、私はじつと其れに耳を傾けて居ました。すると急に頭の中がしんとして、一人かうして居るのが何だか頼りない氣がし出すやありませんか。——Sさん、ね、秋の行軍のこと。私は炬燵に頭をつけて、眼を瞑りました。そして、Sさん、と小さく呼んで見ました。隣の人に聞かれるのさへ、いとしく思はれますものを。(三月一日)

地の中の熱をもつて湧いて出る温泉の香が、何かしら、懐かしました。夜更けて、客も大方寝静まつた時分に、一人行つて湯に浸るのが、何とも云へず嬉しい。なみく／＼と湛へられた、透明な湯は、心地よく肌に觸れました。手足を延べて、青く透く工合を眺める。槽の縁をつかまへて、体を浮かして見る。端から端へ、ゆつたりと飛び移る。こぼれ出る湯が、綺麗な人造石の床を濡らして行く。湯からは、淡い湯氣が上りました。時々、だるい腕を湯槽のふちへ投げかけて、うつとりとなる。指の爪が、軟やかに紅を潮して見える。うる人だ眸を、ふと隅の方に移すと、さら

さらど走る湯が、流し口の處で渦を巻いて、殊更に濃い湯氣を立て、居ました。(十日)

いつか君に、自分の姓名が厭だ、ほかに何か新しい、好い名が欲しいと話してたでせう。先頃のスパルで、江南さんの書いた物の中におんなじ様な話を見出して、思はずにつこりしました。(アエ、マリアの鐘といふ句の響が)。アツプル、オブ、ゼ、アイでも。)こんなに云つて笑つた事もありましたつけ。西洋の言葉には耳に快い響がある様に思はれる。ちよつとドレイマアでも、レストオランでも、カッフエでも、若しくは、マアガレット、アディユ。すべて、聞いても心の躍るのが多い。と言つて何も、一派の人の咎める様に、碌に分りもしない、片仮名を並べて得意がる氣もない人ですが。

でも又、さう／＼何時までも、牡蠣見たいに、古い石殻ばかりにこびり着いてるでもありませんまい。昔の書物、昔の掟、それ等は、昔の古巢を守る人々の弄ぶに任せたいが、いゝんだ。我々は、傷ましいヴェルレヌの歌も口ずさみたい、初夏の青空のやうな南国の人の眸にも憧れよう、かの雪の夜の櫓の中に、肌と肌とを温め合せて、若き子らが鳴らして去つた銀の鈴の音もききたい。新しい光、新しい花、燃ゆる心の指すまゝに追求して止まないのは、若い我々の特權ぢやありませんか。

(その前夜)の藝術家シュウピンは言ひます。(汝たゞ生きよ、而して唯若かれだ。)

生きるなら若くて生きたい。暖い光の野に射すまゝに、憧れ心はてなく擴がつて行く嬉しさ、

苟めに視線が合つた、それにも血汐を滾らせておどろくする優しさ、成らう事なら、さうした情味を生涯心に抱きたい。水々しい感情を死ぬ日までも愛んで居たい。けれども、心の潤ひは何日となく褪める、眼の縁に暗い影が出来る、浮世の物思ひが一つ／＼、淺ましい皺となつて、額に、手に疊まる。かうして人は皆、老の罫に落ちて了ふのだ。柔かい胸を張つて、若き日の誇を高らかに歌つて御覽なさい。其の晴れ々々しい呼吸の下にも、我々の命は、刻一刻、一味の歡樂から漂ひ離れて、老衰の、濁つた、日の光もささない洞の底に沈澱して行くんです。紅顔の移ろひ易い嘆きは、昔から、ごれだけの人に繰り返されたでせう。それでも、何日までも新しく、傷ましく、人の胸に滲み入るではありませんか。あゝ、私は何うしても老いたくない、そして私と一緒に、清らかな君をも老いさせたくない。あの灰色の、厭な々々皺に包まれる位なら、我は、今の間に、若い夢見るうちに、消えて行つて了ひたい。

親友と云ふ美しいヴェルの裏にも、(探りたい)眼が絶えず光る。氣に入つたとか、頼りにするとか言つて、手を取つて近づきながら、しかも互に、我が身を高い壁の蔭に潜ませて、先づ對者の中身を讀まうと焦せる。其の間には、蜜の様な言葉も交はず、永久の交だなど、自ら欺きもする、身を投げ出して了ひたい氣もする。悲しいかな、酔つた様な二人には隔ての壁が頼れて、其の全人格が露はに分つて見ると、もう今の心持は失せて、互に興味のない、普通の人間になつて了ふ事に氣が着かないのでした、初めの幻に欺かれ／＼して、人は幾度となく、この悲しい夢を繰り

返す。中には、褪せた情を自ら覺ることなしに、萎んだ花が萼に附着してる様に、もとの交の形を維持して行くのもあります。が、振り返れば、何れは興ざめた果てに落ちるのです。人の心がさう作られてあるのかと思うと、私はつく／＼口惜しい。

Sさん、こんな事を君に言ふべきではないのでした。私は、君を老後までの友とは思ひたくありません。だから、(永久の交)などは口にしますまい。若々しい、暖かい、物懐かしい情緒の泉の私に涸れる日となつたら、私から君を去るでせう。たゞ、それまでは、共に生きたい。

Sさん、私はこんなに考へたり、書いたりしに、此の宿へ來てるのではないのでした。湯につかつて、湯女の歌ふのんびりした唄に聴き惚れたり、煙草の烟を辿つてぼんやりして居たりして、日を送るべきなんぞでせう。離れともない(春)を捨て、來たのも、其れ故でした。十里の野と水とが、君と私を隔てゝるんです。——でも狂ひかゝつた心の調を見ながら、そつとして置けるものでせうか。この病を意識して居る私に、唯一心に治す様に力めよとは、何んな冷血な人達でせう。浮き／＼する騒音の巷に居つても、私一人の胸には、まあ聽いて御らん、寂しい／＼秋風が渡るのです。私はじつと耳を澄まして慄へて居る。時が時なら君に來て戴いたものをねえ。(一日)

それは昨夜の夜なか頃でした、夢を破つて、饗宴のごよめが起つた。尺八や三絃にまじつて、亂調にうつマンドリンが、頰れる様な音を立てる。それに、傷ましい醉人の哀歌が、咽ぶ様に泣くやうに、沈んだ夜更の空氣に顫へて來るではありませんか。私は枕を敷てた、起き上つた、堪ら

なくなつて、浴上り一枚を被つた儘、廊下に立つて、じいと耳を傾けるんです。不意に、怪しい感想が胸を衝いて浮びました。この世を去るに一番美しい舞臺がわかつた、かう思つて私は、彼の哀曲を聴きながら、涙にくれるのでした。

湯のやぎの夜半におこりし酔人のかの管絃のあはれさに泣く

粉雪のふればめでたし投げやりの撥にうたれてさけぶ三味線

酔人のたぐがまゝにくづれ鳴るマンドリンこそ泣かまほしけれ

斷腸の曲に投せしうたひめはこの世のことは思はざるらむ。

たはれたる醉歌のうちに死をおもふこのひと時の美しきこと

不日、この地も發つことにしました。(三月一日)

Sさん。運命は、今になつて再びこの筆を執らせることになりました。いや、寧ろ我からと言つたものでせうか、總て心の欲する儘にしか動かうとはしない性分なんですから。

それは、最も近く、君と學校で逢つた日でした。午後二時のベルが鳴ると、大きな煉瓦造から吐き出される、幾十の、勢のいゝ人達に雜つて、私も俯首しながら門を潜りました。此の頃の習ひで、歩きながらも、始終何か考へて居る、其の上、思案の對象は、それから其れと、暫くも停まつて居ないので、私の頭は息を吐く暇も有ちません。何か慙う、見えない者に逐ひ立てられる様な、壓し絞られる様な感じに、終には眼がくらくくして來ました。(此の儘じつとしちや居られない)かう思ひつゞけました。(一先づ郷へ歸らう)私は周圍から來る色々の刺戟から、早く脱れ

たかつた、何處へでも逃げさへしたらと考へた。何もかも忘れて了つた、ぼんやりした日暮しがしたかつた。

二時間ばかりして、私はまた學校の庭に立ちました。其處には、白シャツの人々がラケットやボールを手にして、入り亂れて居ます。私は見るともなしに、其の姿を眺めて居ました、次第に日は夕近くなつた。明々とした光が、青草の上に、一種物懐しい色を漂はせて居る。三四本並んだポプラの、淺緑の若草が、風も無いのに、ひらく、ひらくと、面白さうに翻へる。柔かなシインが、いつか、私の心を包んで居るのでした。

(郷へ往く程のことも無からうか。)と思ひ返して見る。

(いや、歸らなくては。)何故かこんな考が起きて、とうとう、薄和いだ胸を壓しつけて了つた。私は學校を出た。

ぶら／＼と廣坂を上つた私は、暫くして、練兵場に臨んだ友の部屋に居ました。其の人が親しく話しかける間にも、私はあらぬ思にのみ沈むのでした。さし對ひながら相はぐれて行く心は、云ひ様もない寂しさに襲はれる。眼は、力なく窓外に落とす。野の路には、近くの祭に行く人々が、ぞろ／＼と通る。中には、蕪黃のバラソルに、水色のスカアーを蹴つて行く、威勢のいゝ西洋婦人なども見える。ほの白い霧が、薄衣のやうに青い野を包んで、頓て夜に入つた。私は、其の家を立ち出しました。(明日は落ちるのか)かう思ふと滲み出る様な涙を抑へて、私は、薄ら寒い、暗い、土塀のつゞいた町へと歸つて行くのでした。(五月はじめ)



とにかく帰りませう。一と月後にはどんな運命を脊負ひませうと、それは分りませんが、黒の幕に面して立つ、時が來たら切り落して見るまでです。不安の影も映りますけれど、今はそれには眼を閉ちて、荷物を拵へませう。明日は立ちます、左様すれば、懐しいSさんにも、二三日の間には、お眼に懸れるでせう。それにつけ、振り返られる——若葉の家のひと月は、眞白い私の日記に、私の濕へるが故に滲み易い心のペエジに、何んな文字を記しましたか。見なさい、柔かい面に、高く歌うた聲の波動の一筋も遺つて居ない、胸を抱き締めて泣いた涙のひと滴も見えないちやありませんか。青葉のそよぐ間からは、野に働く人を見ました、しどくと降る初夏の夜の雨は、灯の影に聞きました。過ぎ去つた日——私はたじつととして暮しました、朝も、夕も。でも、ほの白う月になり行く夜頃は、門を脱けて、忍びやかに、私の影を映して見る事もありましたつけ。

あ、何事に逸る心か。若々しいとて躍る思を、私は、この後も先づ抑へ鎮めませう。沈み切つた心で、世間を眺める、激しい色彩には眼を瞑ちよう、迷ひの音曲には耳も塞がう。あきらめの、——あ、傷ましいあきらめの沈静、そこにも身をかくす蔭はあります、人知れぬ泉は湧くのでした。さうした果ては、枯芦の洲に残つた淡雪の様に、じわくと、いつの間にか消えて行くのかも知れません。か弱いライフには、か弱だけの影が添ひます、私はただ其のかげを守つて行く處まで行きませう。

とは言へ、春この方、我ながら何と云ふ轉化でしたか。花が咲いて花が散つた、只それだけの時の間にも、私は、幾つの淵瀬を渡つて見ました。この變り易い、叫びまはる病の人の様に限りなく轉輾する私の心よ、行末の日は何うならうと云ふのでせう。いえ、いえ、そんな事はもう考へますまい。さらば、私のSさん、も一度、君の手を借して下さい、君の胸に絶らして下さい、冷えむとするこの心に今一と時の榮を興へる爲に。(五月する)

### 四高和歌會詠草

其 月 來 しか

浮 京

老ゆ

身にあまる重荷負ひ行く山蟻といづれノートに

狂者のまねして花の下かげに風船玉を賣るもよ  
きかな

吐息する子等

左様ならにいとごよめきて込みあへる棧橋ぬら

雨の坂君と語れば傘に胡桃の花のまたも落ちくす春の雨かな

人妻は文の終りの一二句に嘲るがご悲しむが

○ 水 衣 ごと

會ひ得べき事を定かに宣給へど別るゝ時のなくあたたかき春とはなれど一人居の唯さびしくて

炭をつぎけり

相見ての強者めきたる振舞もたゞ徒に悔の種かな

踏めば鳴る鶯張の板床を歩むがごとき心地よきかな

微笑みて別れし人はいつまでも家に歸りて泣かであれかし

つゝましく告別の辭をのべ行きぬ今は人妻をとなしき人

街道のごよめき聞きて月光の椽に語りし初夏を戀ふ

かの窓に別れ惜まん想像の日はまのあたり悲しき今宵

○ 蛤 城

單調の雨の響を病室に寂しくきゝて水薬をのむ

船旅の夜半に目醒めてひそやかに隣に呻く人の顔見る

黒塗の馬車に行きあふ男女等は憎らしといふ馬鹿らしといふ

○ 冬 影 神経の睡氣至らで壁見れば黒き影ゆく幻の女

何事も知りたる顔に此の男言葉の尻に乗りて世渡る

自らも醜しと知る此のむくろ君なほしらんうつむきて行く

わが心われととき得ず盲馬心も身をものせて世に生く

○ 町 辯髪べんぱつの黒く長きに塵あがる午すぎ頃の熱き支那

わが帯べる銀の時計の黒み行く如くに心濁りつつゆく

○ いさを

いつはりにのるをかしさに次ぎ次ぎといつはりごともかいて送りぬ

迷子のありてふ札は交番の戸にはためきて秋の日はくる

病犬の空しき影に吠ゆるときその面影の吾によく似る

墓石の倒るゝ如く「なる様になれ」とて後にどうと倒るゝ

今日の日の流るゝ方にわがむくろ心ものせでひとり流るゝ

美しき強き刺戟にめしひつゝ吾が行く先の見えぬぞよけれ

がす燈に細き柳は影投げぬ怪談めきし表象もなき

窓の戸にちらと影らふ鳥影を死の影と見し心さびしさ

鏡せば生れて赤き髪の毛と急所はづれしピストルの痕

我れ君に踏まれて怨む術知らず亡命の日を涙な

く待つ

○ 三石穂

薇薔色の夕日のひかり來てにほふこの濡れ髪

美しきかな 涙ぐむ一重櫻のはらくと散るほごあはき旅の愁に

黒髪の亂あやなし我が胸の廢墟によりてすゝり泣く人

古き日の旅路はうれし行きすりの少女ことごとくはゝえみをする

○ 美 絃

淋しきは郵便持がわが家へ寄らずに行きし春の夕ぐれ

毀たれし家の跡なる凸凹の土の上に咲くごくだみの花

離れ島そこにも戀に泣く人のあらんと思ひ春の海見る

様々のアンダーラインと假名多き本とはなりて  
試験近づく

いとかなし弱き心を強げにも君の前にて見せん  
とほする

現なく歩みつゞけし野の道をふと顧みてなほも  
續けぬ

四五本の煙突の中煙はかぬ高き一つが立てる悲  
しさ

煤烟の黒きも遠き野にをれば烟の末をなつかし  
むかな

名を聞くもうれしき人の代筆のことなき文をく  
りかへし見る

白雲と花の間の高塔と湖に映りぬ有明の月

○ 白い花

いと高き火の見櫓に鐘を打つ人をうらやむ亂れ  
し心

歌よまずはげしきこともたくみ得ずかくてうれ  
しき夢にも別る

夜の闇を吸ひて生き居る怪獣の瞳のごとし高き  
燈臺

雲にのる人もありけり繪草紙に赤き日の照る幼  
年の頃

○ 胎川

放浪の標本めきし顔したる乗合馬車の御者鞭を  
ふる

工場の溜池に似て薄黒き雲はうごかず初夏に入  
る

何事もいとほしければ夜具かぶり春の休暇をね  
てくらしけり

頭をば強くたたきて二度三度部屋をまはりてま  
た辭書をひく

一人旅するになれたる僧のごと獨りさびしき生  
の道ゆく

て居ぬ

新しく乗りし二人は片隅に闇に消えゆく町を見

みづからを欺き得ねばかくまてに向へる人を恐  
るゝものか

塔の先針ほごに見えやはらかき雲のながるゝ京  
の山かな

家内みなわれにそむきぬ放浪の旅する如き悲み  
に生く

始めての日記の頁にかゝんにはあまり事なき日  
はさびしかり

静寂の廣がる闇に狂犬の吠ゆるがこき我が歌の調

我が心すすみし時は口笛をさびしく吹きてうす  
笑ひする

我が歌は墓の濕地に散り敷ける枯葉にも似てさびしき姿

工場機械のごとく事もなうはたらき居れば母  
は喜ぶ

土屋胎川

むくろにもにてつめたかり泣く時にわれの來て

つと入れは夏蜜柑の香鼻にしむ客の去りたる友  
の部屋かな

倚る灰色の壁

掟をば世の人並に守り來し我がわかき日はもの  
たらぬかな

大時計十二時うてば行く人等ふとあほぎ見て足  
早に過ぐ

何事も怒らずにすぐ怒るにはあまりにわれの世  
になれたれば

疑をすこし残して野に出でて草の香をかぎまた  
思ひみぬ

生きたためみづからわれのきたなきを見ざらん  
として後にごしゆく

水薬に小指したしてなめてみてにがき顔する秋の夕かな  
 事々にをごろき多き日をめでぬわかき心の老いに入る時  
 ひどり居るうらさびしさを春の野にうちすてにゆく日曜の午後  
 夏なれど驚なきて琴を聞く黒板塀のつく町かな  
 心やゝあかるくなりぬ荷の如くはこばれて來し電車降るれば  
 こゝろよく涙も出です苦き顔してある日のみかさなりてゆく  
 そのまゝのわれを見て得ぬそのためか人にむかへばうすらはづかし  
 窓掛をすこしかたよせ客を見る少女の如く世をうかがひぬ  
 夕ざれば油ながるゝ堀割に工場の燈のきらゝ  
 と浮く  
 すさみたる心に堪へで旅日記よみては赤き線をはくかな  
 灰色の雲をうつせる大川を風は渡りて我が窓をうつ  
 歸り行く友の足音消えゆけば憂愁の身のおきごころなし  
 いと強き刺戟都にのみすむとみやこを戀ふる倦じたるわれ  
 疑はふと胸に入りげらゝとあざわらひして我れをながむる  
 聲高に興づるをのが聲にふと心はさめて沈黙に入る  
 靈よよみがへり來よ悔恨に日毎老いゆくわがたましひよ  
 書きかけし手紙のことを思ひ出で友と別れぬうすらさびしき

かにかくに悲しき日なり古手紙さけば少しく音のよろしき  
 追はるゝが如き心地に家をでぬ帽もかむらで灯ともし頃を  
 ひっ入りし陶器すまものに似るわれ故の心づかひに母は老いゆく  
 若き日はいま去らんとすいとかるきつかれおぼえぬ秋の日の午後  
 あまりにも靜かに君が見ゆるよりわりなく嫉たき心地するかな(スフィンクスの子に)  
 この男も木像のごともだし居るきみが笑はずなりはてしより  
 五日ほどあひ逢はざりしわが友のつゝましきをばなつかしむかな  
 その心すこしく我れとあひ似たるまだうら若き人かなしむ  
 君なにかかごとして立つあとに散る紅絹のきれこそなまめかしけれ  
 春の夜のおぼろに人のしなさだめなまめくこそ三四人かな  
 ともしびはみな我が胸にしむごとし君へとてゆく春の夜のまぢ

### 人の眼と我が眼

三石 穂

空風をかなしといへる我が友の眼しろきがいたくしけれ  
 我が心かのフィオリネの絃ならばつねにふるへてあらましものを  
 かのひとに忘れぬこと二人をれば睫毛をふせて物をおもへる  
 きみとあるこの寂しさよクロオバア摘みてはず

つることのみにして  
懐かしくきみを思ひぬ日光のしづかにそゞ若  
くさをふみ

珍石に九曲の景や杜若  
養魚池の水落口や杜若  
大國の二峯介在の夏野哉  
烏帽子丘四圍展開の夏野哉  
豆人蟻車に過ぐる夏野の糸路  
夜戦後の夏野大雨に焚火消ゆ  
(留別)恬淡の君を殘すや閑古鳥  
山旅も田螺田甫に來て下る  
舟足の重たさや田螺など附て  
春鴈の踏みし跡芦芽ばい哉  
夏近く室變へぬ風通りよき  
擱筆の硯のかわき夏近し  
糊賣に覺されり夏近き朝  
馬毛刈りも終へての沐浴の夏隣  
夏草や御陵過ぐるに馬下る  
夏草や運河工事の通り筋  
囚車出るを待つ塀下や蚊喰鳥

絃子

四高俳句會句鈔

八箇山造林番舎時鳥  
怪石の臍に死す虫初雷す  
鏃銘試す手揺れて初雷す  
妻子偲ぶ夕万頃の田螺鳴く  
廻廊の杭の群蝦や芦の角  
牙城留守居職一旗のほの見ゆる  
日本町一區に限る職かな  
停船の水汲仕舞や蚊喰鳥  
夜振上手一網毎の淵移り  
城跡の四望萬頃の青田かな  
雨乞の歌聖の軸やはたゝ神

乙贊堂  
絃子

夏近き濱風車起工櫓かな  
小諸職淺間の煙低うせり  
伏見職洛に入る日の繩手かな  
指呼すべき街全景の職かな  
檐低う一筋町や蚊喰鳥  
渡舟仕舞酒癖も蝙蝠男かな  
夜振り舟の火を振る男裸体かな  
巡使來て民情爲政も青田哉  
湖南を指呼す青田や人も見し  
三輪の塔や名もなき蚊喰鳥  
一笠を疎んだ青田續き見えて  
夏草は雨十題に茂るかな  
夏草のおごろや身延渡る原  
鳴渡舟一竿に雷鳴る雲  
崇り猫の加持も古記ある雷鳴が  
額一面に残る社古りや時鳥  
時鳥燭剪りて亦た編註に

雲外

國主尙幼くて城職かな

雲外

夏近き濱風車起工櫓かな

蛤城

御鷹狩先觸の里職かな

同

小諸職淺間の煙低うせり

同

小作等が職館を仰ぐ日々

同

伏見職洛に入る日の繩手かな

同

打ちつけに城に案内す職かな

同

指呼すべき街全景の職かな

同

時鳥大弓に弦コワ張る日

同

檐低う一筋町や蚊喰鳥

同

蹄鐵のとれしまゝ行く時鳥

同

渡舟仕舞酒癖も蝙蝠男かな

同

薫風や蚊帳染め者の手の青き

同

夜振り舟の火を振る男裸体かな

同

杜若撰り砂もして流す事

同

巡使來て民情爲政も青田哉

同

上げ忘れ職はためく星の宵

同

湖南を指呼す青田や人も見し

同

織見る石女の眸異光ある

同

三輪の塔や名もなき蚊喰鳥

同

初雷や湖の一帆を匂に湛る

同

一笠を疎んだ青田續き見えて

同

啓龕に奇蹟由來記初雷が

同

夏草は雨十題に茂るかな

同

論衰も水掛けに田螺泣く夜頃

同

夏草のおごろや身延渡る原

同

夜火事の水映えや田螺蛙鳴もが

同

鳴渡舟一竿に雷鳴る雲

同

舟動揺れ棹影とゞく葦の角

同

崇り猫の加持も古記ある雷鳴が

同

夏近かや日に日に雲の高うせり

同

額一面に残る社古りや時鳥

同

軸風流に花鳥を疎んず夏近に

同

時鳥燭剪りて亦た編註に

同

馬の手入れ夜更くる厩時鳥  
 下り難所越す禿山や時鳥  
 怪体言ふに額の繪馬風薫かな  
 大厦見ての嶋につく舟風薫る  
 牧に見しが柵に隣りし青田かな  
 漁場争の浦協定も初雷に  
 官林を劃す松林や時鳥  
 國寶に入る風薫る寺推古式  
 (留別)出遅の馬に勝る競馬かな

蛤城  
 同  
 同  
 同  
 同  
 同  
 同  
 同

下駄ひかれるあるよな音す行く臈  
 石投ぐも音せぬ海の臈かな  
 繩付きの顔の見たさや臈なる  
 戀頼む事に賈ふ酒夜臈  
 温室のぬくるみもれて園臈  
 屍の上からぬ海の臈かな  
 物心付きけり前途臈なる  
 友の雛見來し夜母のなき淋し  
 雛飾りし日や弟に俳句あり  
 京土産の雛さらびやか群ぬきて  
 ひとり兒の甘育ち雛も數持てり

春三題

雲外生

文藝欄のみ讀む君や春の風  
 著倒れの習に染めり春の風  
 春風や土産あり心安んじて  
 定刻に先き立ちて來し門臈



時言

退くに際し

宗玄生

(一)

四高の生活も今旬日也。顧みれば唯夢なりき。  
 知識以外の力を求めて突入せし人の多數の必ず  
 や其の然るを信ず。客氣を弊衣に包んで四高聖  
 地に進みし時の僕は無限の希望に満ちたりき。  
 然れ共僕は輝ける希望を有せしなり。希望の満  
 足は輝ける希望の充實を意味したるなりき。化  
 學、物理の注入に依りて僕の希望は充實す。た  
 だ光輝ある希望の充實に至りては知識以外に北  
 辰天地に充滿せる否充滿せりと信じたる潮流に  
 絶らざる可からずと思ひき。たゞ現實に觸れた

る不如意の悲哀なる自覺は失望と不平に満ちた  
 る一個個性と僕を化し終んぬ。僕の胸臆に漲る  
 不平、之永遠の暗に沒了し去る可き問題なりや。  
 僕は少く共一校は尙ほ一家の如しこの信念を有  
 す。親は子を叱り子が親に抗するの意義か、兄  
 弟互に喧嘩する故に然か云ふなるか。家族なり  
 の云ふ信念は今少し大なる意義に活くる也。各  
 員は互に目的にして同時に手段にこの事之な  
 り。各員が同時に目的たるにあらざれば而かし  
 て手段たるに甘んぜずんば有機組織の崩壊也。  
 學校もなく家族もなく廣坂通りの半空に聳ゆる  
 赤煉瓦は放浪し行く旅客が一夜の旅舎に異なら  
 ず。柱ありて目的なく屋根ありて手段なし。活  
 ける個性が有機的社會に對する自覺の上に起つ  
 て初めて目的あり手段生ず。然れ共四高三年の  
 星霜は要するに僕が此の信念に對する。壓迫の  
 歴史也。

僕は四高聖地をのぞみし時僕はかく其僕以外の個性に對して積極的の責任あり同時に亦僕も僕の個性に對して僕以外の個性より同價の報酬を受領す可き權利ありと信じたりき。初めの程は僕の精靈に校友の精靈の何等かの交渉ある可しと信じて鶴首したりしが一ヶ月にして無し一學期にして音なし。當時僕思へらく僕と先輩二年の校友とは電導体の兩極の如し。先輩は先輩として必ずや大な電位を有す可し。僕は後進としてより小なる電位を具ふるは當然の事也。電流は大なる力を以つて先輩より僕の精靈に來襲す可しと。然れ共事實は誤り。月にして音なく期にして便り無し。然らば高等學校は凡ての者の實在は相對的關係に立つものなりやとの疑問を僕の頭腦の全体を支配するに至れり。相對的關係としての解釋に入つての僕は校友との電位は同値となり凡ての交渉と流通は斷へたり

同時に僕は僕自身の幾分を他に信賴するは危し僕は退いて僕を守らざる可からず。四高三年間は僕自身の向上を内に求むるにあらずして如何なれば僕自身を保持し得るやてふ問題に移りし也。個人が自己の人格の涵養、之凡ての問題の前提にあらずや。肺は無限に小なる肺より成り腎が無限の小なる腎より成るが如く健全なるが如く健全なる校風は健全なる人格の集合也。校風の純美なる中にあつては校風と個人人格との關係は遠心的にして同時に求心的なれ共校風未完成の間にあつては校風と個人とは正しく遠心的也。個人の人格を離れての校風は一時的にして必然的に亡び去る。校風が完全たる爲めの一件は歴史的權威を保有せしむるに存す。換言すれば永遠持續の資を具有す可き也。浮薄なる根柢の下に立ちて校風幾度成るも須臾にして呆氣

なき跡に復す。校風が精神的生命の空涌の源泉として自己を顧みよと云ふ之學校の叫びにあらずや。

僕は任意の孤城を固守する利己主義を忌む、然れども健全なる自己主義の實行を以つて完全なる校風發揚の要諦なりと確信す。外部發展は華麗也。平和の鏡面に投入したる小石の波紋は快よし。然れ共悲しい哉波紋は果敢なき跡も止め

ずに消え行く。若し其怒濤天に冲するの快景に接せむとせば須く先づ自己を顧みよ。之僕の確信也。個性が眞面目なる相互の覺醒誘掖は之に伴ふ必然の手段に外ならず。若し皆寄宿舎制度の必要ありとせば更に進んで寄宿舎の不足を補ふ可き塾の勃興を要すとせば唯眞摯なる相互個性の切磋の功を數多個性の力に依りて率勵以つて其功を収むるの外なし、確固たる内部の發動は聲に力あり響に氣滿つ。節操と權威とを失ひ

つ、而かも外装の艶麗を以つて萬客の愛を引かむとする賣女的校風は幽靈のアクビ也。僕は根柢ある校風を選ぶ。僕は腐蝕されつゝある精靈の氣發を嫌ふ、然れ共個性相互の接觸が僕に於いて已に望み得ざるものとすれば僕は退いて僕の個性の壘營にこもらざるを得ず僕は不完全なる僕の本質を推擁して淋しき砂漠を行かざる可からざる也。

四高は幾多の缺点を有す。缺点の凡ては史的權威を保有する純美なる校風の地上に繁茂す。更に進んで空虚なる駄法螺と三文文學に依つて企及し能はざる個人の自覺に基く健全なる校風の跡なき跡に生ず。あ、然れ共渴者は泥水の掬し難きを觀望して千倍の渴を覺ゆる也。美しき高遠なる生活を欣求して北辰の光星を滿悅し來りし僕が悲哀なる經驗の語を僕と同じく眞面目なる三年の生活を希望して幾分の失意を感じた



る諸君に告ぐ。僕等の生活は健全なる校風に依りて咲く、健全なる校風は各人の自覺に依つて發し來る、各人の自覺は偉大なる一大人格の存在に依つて動く也。校を去らむとするに際しての僕の寂寞、之れ永遠に語らざる可からざる問題也と信す。

(二)

「動」は顯在的なれ共淺なり。「靜」は潜在的なれども尙深也。動てふ根底に立ちたるものは艶なる可く靜なる基礎に生れたるものは淡なる可し。然れ共彼の叢雲蒼暝にはびこりて颯風天外に狂ふ時尚百年の安を求むる靜を外にして他に求めざるを如何にせむ。校風の事亦然かり。剪裁の花は艶なる可く麗なる可けんも香芬遂に求むるに由なく況んや以つて天地に誇る可き美果に於いては亦望む可くもあらざる也。四高をして凡ての運命と戦ひ凡ての迫害に耐へしむる

ものは靜に深く内面的に自ら収め得たる健全なる校風也。

然れ共動中の活は之を守るに難く靜中の活は之を求むるに難し。眞面目なる個性の接觸に依りて精神的光輝を發する位の校風を一取せんとするには幾多の年月と之に伴ふ堅忍の美質を要す。されば百年の校風の樹立を見んと欲せば七百校友の痛切なる自覺に基かざる可からざる也。此の平安靜寂の時代に乘じて内的修養の美名の下に隠れて汚れたる自己の存續につとむる者あらば吾人は斷じて黙す可からざる也、吾人は起つて速に鼓を打たざる可かずと信す。制裁問題は茲に起る。制裁問題は是に於いて迫る。而も制裁問題は生徒が保有する當然の特權也。學校に於いて同人權利を保有する個人相互の意志に生れたるものとして校長の方針、生徒監の更代を以つて變更し得可き性質のものにあらざ

る也。學生課てふ六ツヶ敷關門とは絶対に交渉の必要を認めざるものなり。

遮莫制裁は手段にして目的にあらず。爪牙相研く方法に至りては神聖なる學校に許す可からざるもの也。神聖なる手段にあらずんば焉んぞ亦神聖なる目的に到達するを得んや。校風樹立の目的が已に遠めたるの一事に於いて存する也。制裁は全團體の規約たる可きを要す。制裁が制

裁としての眞義は實に此の一事に存す。制裁の眞義は制裁者の數、聲明の大小を以つて成し得可きものにあらずして唯「公」の文字によりて生れ來る也。僕往々にして制裁者の心事の極めて高潔なるを知り其方法の強弱度にかなへるものあるを見るも尙同等の權利を有する一團が比較的優勢なる地位を利用して弱者の權利を侵害するもの、如く當然解釋し得る幾多制裁の存するを悲しむ。制裁は私人相互の問題にあらずし

て、公か私に對する、絶対の特權とに屬す。若し個人若しくは個人の象團の制裁を考へよ。制裁者と被制裁者とが深奥なる意義の下に道德的資格に於いて全然正反對の地位にありと確證し得るものありや。吾人は自己に求めんとして尙與へられざる也。吾人は之を吾人自らに尋ねたり。然れ共遂に遇はざる也。吾人は吾人の荒野に於いて歎求するを忘れず。然れ共遂に得ざる事多し。

吾人は果して自己に得難くして尙之を他に求めんとするの權利存するや。若し凡ての道義的資格に抵觸せずして制裁の眞値を求めんと欲せば自己の背後に絶大なる力を求め得ざる可からざる之國家也之一校也。僕往々にして神聖なる可き一校の中に尙比周朋黨の紛擾を見るあるは之私團制裁より生ずる必然の結果也と深く信す。同時に制裁は國家法律に抵觸せざるの範圍に於いて而かも事實の眞相を深く調査し再三の忠告

を惜しむ可からず。況んや其中に一点私情の存するあるに於ておや、罪惡恐る可し然れ共正義の名に據りて行ふ處の罪惡の危険なるに及ばず。制裁は貴重なる七百校友の特權に屬す、而かも此の貴重なる特權を永遠に維持せんと欲する大にして公明なる以上其手段も亦吾人の熱誠、吾人の至情より溢れ出でたる崇美なる性質を具有す可きを要す、若し其手段にして一度公正を失し爲めに學校をして生徒が有する貴重なる特權に一步干渉の余地を與ふるとせば制裁を賊するものは學校にあらずして自ら制裁の美名を以つて起ちたる制裁者其の人の責めたらざるばあらざる也。

近時我校を騒がしたる一問題の如き、特に冷靜なる研究問題に屬す。沛然として到る夕立の跡のたゞ一瞬の快を求め得て自ら顧みざるが如き浮薄なる動機は斷じて不可也。

此の問題に關して二三人士の心事の高潔なりし事僕こゝに云はず。此の問題の唯一の對象となりし一校友の極めて同情す可かりし事我之を云はず。形勢を觀望して自ら跡を暗うせんとせし代議員の責我之を云はず。若し此の顯微鏡的小問題にして少く共全校を騒がしたる罪科より幾分の代償を見出さんと欲せば實に制裁問題に關する研究之なりとす。制裁問題は必須欠く可からざるものなると同時に亦少からぬ研究を要する問題に屬すれば也。

僕をして敢てこゝに云はしむれば第一回の毆打者の責は一級の名を以つて制裁の二字を亂用したるてふ点に於いてよりも寧ろ第二回の眞個の制裁をして不神聖なる一手段と終らしめ制裁の價値を貧少にせしものあらば憂ふ可きは「奪はるゝ」の一事にあらずして遂に「自ら失ふ」の易きに存する也。

(三)

人生の第一義は活動に存す。混沌として動亂の中に適歸する所を知らざる不可思議なる人の一生はたゞ活動の鍵を求めて光あり。然れ共活動は確固たる信念に生れずんば一切の意義を失ふて迷ふ。人世に生きんと欲する者は先づ活動の力を奮へ。人活動の意義を充さんとせば之を深奥なる信念に求めよ。之人生の奥義なり。

彼の宗教が尙熱情に生くるが如く僕等の信念も亦熱情に力あり。此の場合熱情は信念の徑路にして信念に強くして熱情は湧出す。信念を前提とせざる一切の熱情は熱情にあらずして盲情と云はざる可からず。盲情に發する凡ての主張は對象の眞價に接觸せざる野の叫びのみ。時代の潮流に棹さむ者は時代の精神を了解すると共に精神統率の力量を自信せずんばならず。此の識見を有せずして尙子牙の細工を弄しつ時向を迎

尙するは以つて人を喜ばす可し而も人を動かすに足らざる也。

慷慨と云ふも元氣の發露と云ふも之を冷靜に思慮して尙陋劣なる利己的感情に外ならざる事往々之あり。公憤の二字を顯微鏡で見れば夢の如き不平の二字に見ゆる事亦少からず。吾人は慷慨するに先つて如何にして之を救済す可きかてふ問題に當るを要する也。

僕は信す。一校にありて生ずる大小凡ての問題に於いて最も恐る可きは此の一事也。如何にして此の問題を解決す可きかてふ問題よりも如何にすれば尙此の問題を大にし得るやてふ換言すれば問題其ものを目的とするにあらずして手段其ものを目的とするものゝ如し。

辯の爲めに事を希ふ。名の爲めに亂を待つ。事罪無きに似たれ共若し之が爲め幾多の校友を煩はすに至らば亦大に警めざる可からざる也。名

の爲めに形の爲めに動くものには一貫せる「我」の存在する事なく風の如くに漂ひ行く動搖の一生を作る。彼の貫徹せる根柢なく一致せる節操なく時の氣まぐれ一時の氣運に乗じて動亂を企圖する時に於いて校風は定まらざる可く。雷霆の如く起つてアクビの如く消ゆる呆氣なき動亂の内にひそんで動くは快は一時の快にして勇は假面の勇氣也、炯眼なる批評に依りて今其の功過を論ずれば永遠の暗に没了せしめらるゝ一場の夢に過ぎざる可し。

若し事あり。苟も四高生たるの權利と主張とを侵す者あらば吾人は聲を大にして起たざる可からず。然れ共慷慨自ら起つ事は易き也。聲は信念に生れて生く。信念を離れたる慷慨は蟬のヌケ殻なり。信念と慷慨とは彼の物理的エネルギーの如し。潜在して位置のエネルギーとなり顕在して

運動のエネルギーとなる。其の總量には何等の徑庭ある事なし。而かも精密なる觀察と冷靜なる地位の自覺とに生れたる確固たる信念を得て一貫せる節操に戦ひ得る也。若し人あり。自ら之を良心に問ふて、而かもやましき一点もなしと信するならば、其れは自己が下したる觀察に依りて動かざる自己の信念を得たるものにして一切の壓迫と一切の苦難を排し、最後迄奮闘する健氣なる意氣の人なり。

今四高に假りに一般疑惑を與へたる一事件ありとせよ。此の時に於いて自ら深き信念に囚はれて數十の動く者ありとせよ。今最後迄自己の二字也。

一身の凡てを忘却して戦ひたる四、五の人士ありとせよ。亦假りに僕の其事件に對する解釋と之等人士の解釋と全然相反せりとせよ。僕をして敢て云はしむれば事件解釋の正否は別問題と

してたゞ欺かざる自己を露はして自己の信念に戦ひたる四五の人士を尊敬す。若し僕の眼に少く共空名を離れたる眞面目なる奮闘なりてふ觀察を與へ得るとせば僕は四高に尙此の意氣ある

を喜ばざるを得ず。遮莫、精密なる觀察と眞面目なる信念とを離れたいある職名の爲めたい夢の如き空名の爲めに自己を欺き人を欺いて一度形勢非なるを見るや恬として之を顧みざる節操なき多數人士に至りては吾人は歴史の爲めに惜しまざるを得ざる也。

歴史を絶ちし凡ては暗也。僕等は永遠に歴史でふ力の感應に支配されつゝあるを知る。而かも僕等は同時に不滅の鐵筆を絶へず運んで四高の歴史を作りつゝある事を思はざる可からず。僕等の責任は現在にして而かして永遠也。四高の滅びざる限り僕等は僕等の歴史の責を明にせざる可からず。僕等は現在に活き而かも未來に死

せざらん事を欲せば虚偽と假面の一切を脱して眞面目なる自己の信念に起たざる可からざる也。

## (四)

音樂部の存在と語學部の獨立とは他に見られざる四高の特色なり。春は春潮の響を外にして秋は秋風の叫を耳にして端然として北辰會の一席を占め玉ふ。其聲明や大其抱負や遠、見よ悠然として地上の塵は躍りつゝあり。然れ共歴史は語る悲しや其絶叫の響く所一年一回の紀元の賀節と數回樂典の講義とに止まりぬ。強いて尙之を他に求めんか、鼓膜の鋭敏を以て自ら誇らむ人には空を貫く赤煉瓦の一隅に蚊よりも細きオルガンの呻めきを耳にす可し。ア、此の響き此の呻めきが生温き一流を作りて北辰の天地に漲る一大潮流に注ぎ入る共恐らく一流の大海に注ぐに及かざる可き也。

曾つて音楽部の「悲哀なる歴史」として之を聞  
く。其創立の當初に當り一、二天才の便宜に供  
するに過ぎざる可しとの見解略一致したりし爲  
め成立頗る困難なりしも創立者の聲明と意氣の  
壯大なるも某長老の盛んなる主張に依り非常な  
る物議の中に成立したりしと云ふ。北辰會は已  
に幾多の部を有す。然れ共輿論に反して迄も個  
人的の情誼に依り成立せしものは一として之な  
し。たゞ人間遂に神たる事難し。母難産の疾苦  
に死して其子の長太發育せる例も少からざる人  
の世に創設者の熱誠の意氣を以つて専心事に當  
らば如何なる効果を収め得ずとも計られざる  
也。ア、然れ共今日迄の歴史を以つて之を見れ  
ば人間遂に神なりき。寒潮事件の生徒大會に音  
樂部廢止の輿論に埋められ至誠堂に婦人の影を  
認められしとて唇を噛みし健兒の聲に壓せられ  
音楽部なかりせばてふ各部委員の嘆聲豫算會に

於いて起る。此の矢より繁き四圍の壓迫に身を  
處し來る子供は可愛や繼子なりき。繼子は遂に  
繼子根生を出せり。曾つて創設委員として我が  
北辰會誌上に明快なる抱負を披瀝したりし某委  
員は突然として凄しくも目覺しく人情史の數頁  
を飾りて走り行きぬ。僕は音楽部に委員たる人  
の人格を信せんと欲す。然れども他人の人格を  
信する事の難きを歴史は切實に僕に教ふ。歴史  
は政治史にあらず、文學史にあらず、音楽部の歴  
史其ものに外ならざる也。聞く生徒監が現委員  
の一名を招いで再び斯の事なからむ事を戒めた  
る時委員唯々として之を託せしと云ふ。音楽部  
は已に疑惑の中に彷徨す。生徒監が學校風紀の  
上に思ひ及びて之を戒めたるは元より論なし。  
然れ共音楽部其者より見れば看過し能はざる悔  
辱なり。此の時に一言の抗辯さへなさず唯々と  
して點頭せし委員の頭の上下振動は音楽部に確

固たる自信を失しての點頭か、胸中大なる成算  
あつての點頭か。委員諸君の達眼なる必ずや默  
黙の中に鵬鶴の飛躍を試みんとせしなる可し。  
たゞ一年の歴史は語る。一冊の歌集と、一回の  
大會と最初數回の練習と之を以つて荒廢の跡を  
耕し得たりとするや。

然れ共翻つて考ふ。此れ音楽部としての最大活  
動なりしなる可し。音楽部として以上の活動  
を要求するは無理なる可し。委員諸君は最大の  
努力を惜しまざりしなる可し。已に之を以つて  
音楽部の最大活動なりとせば音楽部の最大活動  
は四高全体の空氣には何等の力なく何等の交渉  
なき事自ら明なる可し。換言す音楽部の存否は  
四高に取りては何等の關する處なき也。されば

音楽部委員諸君の功勞は音楽部に對する功にし  
て北辰會に對する功にあらず。音楽部は北辰會  
の爲めに建設せられたるものにあらずして音楽

部に入出入する數輩天才の爲に生れたるもの也。  
此を以つて論じ行けば宗教部は何が爲めに起ら  
ざる。和歌部は何が爲めに興らざる。謠曲部可  
なる可く飲酒部亦妙なる可し。

而も北辰會各部は北辰八百の會員を根底とせる  
意義の下に起たざる可からず。よし各部の運用  
者が少數なりとしても其の少數の周圍としての  
大なる波紋が八百會員の頭腦の上に波及すれば  
意義已に充つ。意義を沒了しての存在は不安な  
り動搖なり。暗みより暗に渡り行く不安と動搖  
とを一掃して清風天空に滿つるの快を得るは音  
樂部を経営し經營せんとする人々が靜慮一番自  
ら生命を裁して百年の憂を解く一大勇斷に待た  
ざる可からざる也。

北辰會中尤も多くの役員を網羅せる之を語學部  
となす。語學趣味涵養の爲めと云ふ劇は已に禁  
止を命せられ語學練習の爲めと云ふ点に於いて

は一年一回乃至二回の會合に於いて元より望み得可きものにあらず。唯外國語に依つて自己の思想を披瀝すると云ふ唯一の有効なる目的の爲めには之を講演部に合一せしめて冗費節略の効を収め得可し。

北辰會として尙云ふ可き事多し。然れ共顧みれば英才實に雲の如し。之等人士の手に依りて新らしき北辰會の出生は僕の疑はざる處也。亦何をか多く云はん。

## (五)

四高三年も今方に尽きんとす。僕が冬枯の野をひたぶるに走り行く狐の如く淋しき自己を抱いて獨り辿り行く時叢雲益々僕の行手を遮らんとす。暗流は滔々として僕の前途に犇めき來る。僕は寂寞の感の深くなる丈僕の周囲は益々暗うならんとす。暗黒と寂寞と無限なる平行の線を劃して進み行く時光明いつの日か求め得可

き。僕之を思ふて無限の悲哀を禁じ得ざる也。暗黒は遂に止まる所を知らず。觸れざらんと獨り自ら高うせし校友の個性は汚れたる衣につままれて跳梁跋扈し初めたり。拾五錢の菓子に惜別の赤誠を披瀝したりし送別會は壹圓に高まつて酒池肉林の壯觀を開くに至れり。級會に酒を用ひしとて滿校の憎嫌を買ひたるは既に昔、嬌聲、絃歌を耳にするに至つては田園遂に蕪ならんとす。四高の運命は永久に呪はれつゝある也。眞面目なる精靈の叫びは粹人には野暮な繰言としか聞こえざる可し。心待ちに開かれたる文藝の門は徒に嘲笑と蔑視とを求むにすぎず。眼を掩へば暗流響あつて凄氣肌に滿つ。僕等は方に別れんとする母校の影を望めば徒に言ふ可き事のみ多くして低回之を久しうするのみ。

## 書を劍道部に呈す

柴野生

淺才、自ら揣らずして濫りに劍道部委員の大任を負ひてより過去一年、何等爲す處もなく、蠢蠢乎として其重任を汚すや頗る大、今更ならねど其附托に背くの過測り難きものあるを思ひ、曠職の罪實に謝するに辭なく慚愧當に身を容るるに處なからんとす。

且つや不肖多少の革新を試むるの不遜を敢てし遂に事陋陋に終る、今にして願れば否として夢に似たり、然れ共事實は飽く迄事實なり罪は遂に罪也、只伏して諸君の加鞭をまたんのみ。されど將來はいよく豊富なり、峻秀氣鋭の新委員あり諸君相共に其心を練り武を磨き補助努力怠りなくんば四高劍道部の隆昌、また明らかなるものあるべし、思ふて不肖の身樂觀の叫び

を放つて去る又易しと雖も近時校風の廢頹默する能はざるものあるを見一片の所信を披瀝して諸君に訴ふる處あらんとす也。

思ふに理想は實行の理想也。理想の理想にあらず吾人が實相の矛盾を叫び志行の衝突に驚くは是、理想は實行の理想にあるが故に外ならず、劍道部發展の理想は只々諸君の一意努力にあるのみ、手を懷にしては何物も得べからざる也。

劍道部諸君、苟しくも三尺の秋水を手にする者にして一片男子耿々の志なく一校の光榮ある選手として自ら任ずるの達識なくんば、そは技の末に走るものにして劍道部の名折也、一校の校風發揚は各運動部選手の義氣にまつ處頗る大なるものあるべし、選手は徒らに技術そのものゝ選手にあらず、選手にして敢て技のみを弄ばんか凡ては醜惡視せらるゝの止むを得ざるに至るべし、思へば一校に於けるチャンピオンの責務



また重且つ大なるかな。

丈夫の志を抱持して然る後に身を動かすは眞の  
選手也、殊に武士道の精華を燦たる氷刀に究め  
んとするわが劔道部に於て然り、吾人は「漫に劔  
を携へず」モハメットが所謂「劔は天堂地獄の鍵  
なり」の言を味ひ悠々自適劔道部本來の面目を  
發揮せざるべからず。

聞くならく、來らん年の年頭洛陽に於て各高等

學校運動部の競技ありと傳ふ、勿論我劔道部は

馳せ參する事なるべし、然らば諸君の胸中何物

かあつて汝が今起たざるべからずと絶叫するを

きかん、嫉の神を信じたる猶本人はいざ知らず、

吾人は血にわく若人なり敗殘の追憶に泣く男の

子也、撃たれて而かも諾々たるには吾等の腕は

余りに緊張せるにあらずや。

あゝ吉田原頭の敗史や、先人の慘死を耳にして

より茲に五年起たざる事いかにも久しいかな、

勿論軍容の整成元より望む處、輕舉妄動はまた

厭嫌する處、されど一つに凡ては氣により力に

因す、自己の小を悟ると共に自己の大を信する

は吾人の道なるが故に小を悟つては切磋礪磨大

を信じては自任自重、自ら自己の向上を計らざ

るべからず、座して美果を求めんとするは愚の

極ならずんばならず、然るが故に要は自己の努

力のみ自己本來の元氣喚發のみ。

„Nicht Geeshalmes r'ichen.“

こは眞に弱者の聲なり、根本義ならざる達觀は

砂上の樓閣に過ぎず、諸君は過去の四高劔道部

史を繰り返し來つて此言を如何にか觀する、僕

は諸君が弱者ならざるを信するが故に諸君が激

闘に價する熱血を有すると敬するが故に敢て多

くを云はず、黙して諸君が將來の奮闘と壯舉と

を期待せんのみ。

諸君さらば、此兒「劔道部」性來英骨あり、希く

は爾が理想の爲めに、相共に擁して健闘する處  
あれ。

部 報

講 演 部 報

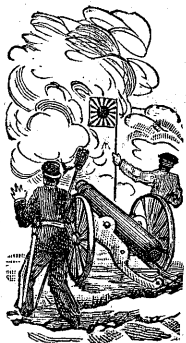
○演 說 例 會

開會の辭	畑山四男美
世界と思潮	河内三郎
禪と武士道	宮野專太郎
一枚の紙にも此の表裏あり	田中正名
靈の響	倉知行禮
讀書の話	八波教授
閉會の辭	宗立順吉

○公 開 演 說 會

(五月二十七日午後一時)

至誠堂に於いて開會す。



第一席 開會の辭 新木 榮吉

人の尤も重んず可く而かも實際人の尤も輕んぜらるゝものは思想也。今や願みれば尤も多事なるは日本想界の現状にて此の間に於ける青年の胸臆に映したる印象は果して如何なるものなりや。之決して不問に附す可き事にあらざる也。

青年の思想は無邪氣也。自由なり。社會上何等拘束を受くる事なき青年の頭腦は自由にして自然也。刹那に起る一種の偶感も尙彼の絶代の眞理として混沌たる社會の鹽となる事少からず。公開演說會の主旨や實に此の点に存する也。

第二席 根本的同化策 金本 萬吉

國家存立の要件は民族也。而かして其の主腦的民族は文化、風俗習慣等の力を以つて他を同化せざる可からず。朝鮮を得たる帝國々民の要務は此の一点也。日本と朝鮮とは其史的關係に於いて太古より密接せるものなるが之の併合は要するに太古の状態に復舊したるに過ぎず。此の根底深き歴史的關係は兩者の連鎖也。學校教育

の焦眉の問題は此の關係を彼等に知らしむるにありと同化策を懇切に説く。

第三席 近代思潮 鈴木 巖

青年は青年の特權を有す。老年、中年にして尙彼の經世の大業を全ふしたる偉人は皆青年の活力を以て當れるに外ならず。思想界に青年の力は永遠に活くるものなりと現代思潮の一般を論じ現代青年が物質の暗流を觀望して凄然たる中に偉大なる力を振はんとしつつある宿命論者の言ふ所を論じ進んで個性問題に入る。

近時尤も盛になりしは自己くふ問題也。吾人は健全なる自己單位を取る。友情も忠君愛國も自己より出てたるものは美也。矛盾なく懂着なし。唯彼の極端なる利己單位は之を避けざる可からず。

第四席 風土と事業 清水 武雄

自然と人事の關係を説いて曰く。自然と人生の大なる關係を見よ。彼の岩間漏る一滴の水も大海に併せて交通の力を示す。吾人は自然を離れて人生なきを思はざる可からざる也。

工業、生産力の勃興につれ殊に人事は自然の力を仰ぎつゝあり。而かして事業は風土の力に支配さるゝ事大也。故に事業を企圖するものは同時に風土に關して詳細に知悉する所あらずんば不可也。之を世界各國の例を引證して海事思想の必要に論及して曰く。

海も亦吾人の研む可きもの也。海と人生とは興味深き研究問題也。

第五席 七福人の説 倉知 行禮

老ひたるも若きも其の人の何れを問はず皆「喜」を求めて之走る。喜は人を動かし喜は人を走らしむ可し。然れども人は水面の泡沫と選ぶなき喜を求めて廬生の果敢なき夢を獨り嘆かんとするか

喜は天職に生きての喜ひたるべき也。人は何れも高下を問はず天分を有す此の天分を盡して生ずる喜は吾人が永遠に獲得したる喜也。

眞面目なる自己に生きて天職を尽せば吾人の立也。

脚は安き也。下層に確立して而かして上層に安んずる也人、自己が有する天分に安んぜずして何んぞ高きに喜ぶを得んや。

七福人は堯爾として常に微笑せり。七人の福者は夫れ自己の天分に安んせり。今の世徒に高を望む者七福人の喜を深く考察せよ。

第六席 暮鐘の響 宗玄 順吉

月清き日本海に於いて帝國の運命を泰山の安きに救ひたる東郷大將は信念に活きたる人なりき。

人の人たる意義は信念を根底とせる活動にあり、時利あらず世相容れずとも人信念に生くる時は自ら安んず可し。徒に事業成敗の跡に依りて人物の眞價を評するは不可也。吾人は吾人の行爲が善ならずとも少く其美ならむ事を望む。而かも信念は深奥なる自省に依りて動き來る也。吾人は學者たる可し。吾人は政治家たる可し、然れ共先づ人間たらずんばある可からざる也。



暮鐘の響きに一日の勞を忘れて立ち上られる名畫を思はずや  
物質の暗流吾人を壓し來る現代に於いて吾人の鐘は何處にか  
之をむ可き胸臆に響く信念の叫び之にあらずや。

第七席 精神生活 石川 先生

余は高等學校時代に於いて清澤先生の著精神生活を愛讀し近  
時物質の潮流奔々を寄せ來り外來思想も亦不健全なる方面の  
みか日本に移殖せらるるを見れば精神生活の尊きを思ふ。

人は各人境遇に依り特質を具有する上同時に亦  
平均の方面を有せり。彼の學者が専門の科目以  
外の一切を顧みざるが如きは人には共通の尽す  
可き点あるを忘却せるに依るものにして要する  
に學問は人生にあらずして人生を助くる機械  
也。故に人の眞價は學問にあらず。技術にあら  
ず。物に活き物に榮えたる人も尙胸中抑へ難き  
不足の念ありしは物に依りて満足し難きを證せ  
るにあらずや。

ゲータがファストをして此の事實を告白せしめたり。那翁が  
孤島に於ける終焉の一語を見よ。之に反しグラッドストーンは  
政治に活き同時に心に活きたる人也。

精神生活は上は王侯より下百姓迄悉く容れて行  
く舟の如し。此の舟はそも如何にして得可きや。  
余の信する所はたゞ自己の地位を自覺するにあ  
り。汝自身を知るにあり。

拍手に送られて先生降らる。

第八席 澄める月 八波 先生

斯く許りきたなく見ゆる世の中に羨しくも澄め  
る月かな。此の一首より余は題を取れり。混沌  
として利に之迷ふ今の世に天空に皎として一点  
の曇りなき月の如く此世を渡る亦快ならずや。  
我々はいかにして此の理想的處世の道を辿り得  
可きや。之何人も求めつゝありし問題なる可し。  
余は諸君に勸む。大は小の集合なり諸君は一生  
に清からんと欲さば先づ一日を清うせよ。

一日主義之也。人一日の寢につく時而して自ら燈火を消す時  
胸臆何處を尋れても一点の不安動搖なき時は之其人か終焉  
の床にありて莞爾としし瞑目し得るを期し得可し。余は常に  
日記を重んず。小き生涯も個人に取りては二つなき一生也。

一日の歴史を記すに當り我々は澄める月ならん事を欲す、事  
多きア、日なりきと日記書きて燈火を消す間の輕き誇らしい  
こは余の自作なるが余の標榜する一日の主義は乃ち之也。

不安は不明也。曇也。「小便を耐へて眠れぬ夜さ  
むかな」不安を感じて誰か愉快なる一生を送る  
事を得む。余は切に諸君に此の一日主義をすゝ  
む。

輕快なる先生の辯は清涼の氣を興へたり。

第九席 閉會の辭 巢山 了徹

本日の盛會を祝し尙今後其本部の隆盛を祈つて  
降壇。

○本學年中本部の爲めに尽せる左の諸君に本部  
メタルを贈る。

- 倉知行禮 文室重敏 中納錠松 岡弘二 新
- 木榮吉 清水武雄 松嶋亮二 畑山四男美
- 宗玄順吉

○來學年中の本部委員左の如く決定す。

- 一、二甲 新木 榮吉 一、二乙 堀 明近

劍道部々報

六月三日無聲堂に於て卒業生送別紅白勝負を舉  
行せり其結果左の如し。

- 一、二丙 巢山 了徹 三、二 井上 功
- 一、二丙 金本 萬吉 二、一甲 石端 良平

コ、メ澁 谷壽 河 内メ

澁 谷 雨 宮ド、コ

コ、ド大 橋謙 雨 宮

大 橋 近 藤時コ、ツ

林 千 近 藤メ、メ

ド、メ石 澤 近 藤

メ、ド石 澤 奥 泉

石 澤 飯 嶋メ、メ

ド、ド辻 岡 飯 嶋

辻 岡 高 田ド、ド

### 遠足部報

#### 寶達に遊ぶ

麗かに晴れた日、公園の旭櫻のベンチに腰掛けて卯辰山の方を見ると左の方に小高い青い山が能登半嶋に突き立つて居るのが見える、寶達山と云ふのはこれである。

緑葉繁くなつて吹く風も涼しくなつた、皐月の二十日我が遠足部は寶達山へ遠足を催した、集まるもの二十七名を一隊として白い砂烟の立つ須崎街道を辿つて渡船場へと急へだ、空は美しく晴れ渡つて郊外には紫雲英の花が春の名残りを留めて居る、川沿ひの堤の道に風が吹いてゐて涼しい、午後三時に渡船場に到つて用意の三艘の舟に分れ乗る、河北潟は眠れるやうに静かで鏡の如くに滑かな水の面を遠慮なく掻き分

相蘇——高田ド、ド

コ、ド浅水——高田

メ、コ浅水——六人部メ

浅水——宮内コ、コ

メ、メ千家——宮内コ

千家——新納ド、コ

メ、メ林——新納

コ林——俣野ツ、コ

メ、ド柴野——俣野

ド、メ柴野——福嶋

メ柴野——持田ド、ド

時枝——持田メ、メ

メ、ド宮野(副將)——持田

宮野——(副將)山田ド、ド

コ、コ進藤(大將)——山田

○コ、コ進藤——(大將)稻葉メ

以上

けて櫓の音と共に舟が進む、折からの軟風を帆が孕んで徐ろに目的の岸へと走る、三艘の舟からは絶えず笑ひ聲、楽しい歌が洩れて廣い潟の上に漂うてゐる、楽しい舟路も二時間で了へて五時内日角に到つた。こゝより二里の平坦な道は高松に至る、白く乾いた道を風に吹かれて進むと身を内高松に進んだ、小高い丘に停車場があつて低い水田を見下してゐる、レールの側には月見草が新しい花を以て飾つてゐる、夜の帷は徐ろに四周を圍んで刻一刻と暗くなつてシグナルが淡い光を投げて居る、寂寞たる天地は只だ鳴蛙によりて破られて居る。

待ちに待つた汽車は闇を突つて停車場に到くと一行は跳び乗る、席定まらぬ内に汽笛一聲高松を後にして寶達に向ふ、淋しい天地に矢笠しく音立て、月見草の咲いてゐる丘を抜いて松林に入り、十數分の後寶達驛に一行を運んだ、驛

を出で、寶達村に向いた、先發の勞を執られた林先生は一行を迎ひに來られた。静かな村道を節面白く歌を歌ふて進むと何時しか寶達村に到着した、薄黒い雲は空を蓋ふて雲間から淡く星が輝いてゐる、案内せられて九時六軒に分宿する、村民の温い歓迎の晚餐を了ひて寢に就けば何時しか夢結ばれた。

旅の夢は早くも破られて温いベットを出る、怪しい雲は空低く浮んで居る、雨は間もなく降りて庭の青葉を濡した。一夜の宿りを貸して呉れた村にしばしの別を告げて案内者の後に思ひ思ひの雨具を着た一行が續いた、路は小川の岸から山路へとこゝつた、青葉の間を紫の藤の花が点綴してゐる、葉蔭を辿つてゐるわれらは雨に濡れる谷を隔てた向いの山の裾を小川が繞つてゐる、山腹には桃色の卵の花が咲いてゐる、雨に濡れた青葉を掻き分けて阪路を躡ると遂に

頂上に到着した。

静かに横はつてゐる加、越、能の平原が雨の中から見える、醫王山も見える、七尾灣は静かに横はつてゐる、森に包まれて小い祠がある、時習察遠足部寄贈の菓子はこゝで擴げられた。

少時の休息で疲れを全く癒して山麓の野田へと下る、路傍に蕨は拳のやうな頭を擡げて居る、木の葉陰に老鶯は行く春を啣つて居る、野田に到着、案内者はこゝで返した、瓜生への道は能く分つて居る、寶達山を顧ると雨の裡に立つて一行を送つて居るやうだ、人の心を爽にする緑の色は今や擅な慾を湛えて空を包み、森を染め山を覆ふてゐる、かゝる美しい中を急いで早くも瓜生へ到着、時正に正午、辨當を了ひて再び寮寄贈の菓子を味つた。

こゝから三國峠を越えて津幡に出づるべきまである、元氣に返つた一行は峠にかゝつた、朝來

の五月雨は歇まない、卯の花、藤の花は残らず

一行の爲めに手折られた。傾斜の少し急な峠は今や一行の爲めに踏まれた。頂上に小祠があつて傍に測量部の標石が立つて居る、これからは加賀の國、峠を小走りに下ると次第に道が廣くなる、八谷に到いた。雨はひと先づ歇んで雲間が少し明るくなつた。平坦な道直ちに吉倉を経七黒に到り、倉見に出で、午後五時一行悉く津幡に到着して豫定の汽車を待つた。間もなく一行を運ぶべき汽車は到着、空全く晴れて涼風肌に爽かである、身を汽車に揺られながら親しい停車場に到着、再び金澤の人となつた。

(いうち)

### 庭球部 報

### 第六回庭球大會

五月七日午前九時二十分より當校コートにて開かれぬ

校内仕合(三回ゲーム)

勝

負

- |   |       |       |
|---|-------|-------|
| 1 | 端良純   | 林徳一   |
| 2 | 松外松   | 湯川榮三郎 |
| 3 | 芳野千秋  | 宮岡文城  |
| 4 | 須藤二雄  | 瀧谷壽雄  |
| 5 | 今村眞彦  | 山田盛義  |
| 6 | 早田愛治  | 山本龍重  |
| 7 | 柴野操一  | 長野歳重  |
| 8 | 高森卯太郎 | 川上毅男  |
|   | 大崎大禪  | 神尾實男  |
|   |       | 布川昌四郎 |
|   |       | 弘岡忠道  |
|   |       | 永岡千尋  |
|   |       | 高橋孝治  |
|   |       | 松下新市  |

- |    |       |       |
|----|-------|-------|
| 9  | 持田鐵之助 | 宮川誠一  |
| 10 | 平本九郎  | 和田勢一郎 |
| 11 | 北川榮一  | 高田千里  |
| 12 | 和智英雄  | 進藤健一  |
| 13 | 長谷川謙治 | 浅野隆一  |
| 14 | 野本朋近  | 近藤善治郎 |
| 15 | 小林哲三郎 | 土井滋治  |
| 16 | 林千秋   | 津山玄秀  |
| 17 | 清水義男  | 後藤清博  |
| 18 | 近藤時一  | 今井清博  |
| 19 | 大橋辰一  | 提山西暢  |
| 20 | 荻原二郎  | 大橋隣吉  |
|    |       | 田村孝治  |
|    |       | 市川理義  |
|    |       | 菅野新一郎 |
|    |       | 佐久間義三 |
|    |       | 高田佐太郎 |
|    |       | 河合作次郎 |
|    |       | 戸水昇   |

- 21 (水)坂井三勝二 (直)江房忠也
  - 22 (千)齋田鐵鷹 (安)藤敏雄
  - 23 (吉)鳴澤不根 (舟)西木重憲
  - 24 (山)松岡重晴 (野)村篤一
  - 25 (東)渡邊讓吉 (野)寺佐次郎
  - 26 (神)北條敬太郎 (嶋)田德太郎
- 對外仕合(午後一時半より五回ゲームにて)

- 業工(室)榭谷三 (山)浦嶋(卓)
- 業商(竹)淺地三 (金)邊(生)
- 小(田)森岡中 (石)澤水
- 中(河)白井二 (今)井(剛)
- 業工(山)鶴根 (渡)邊(孝)

- 師(神)谷農 (関)山井
  - 一(齋)藤田 (膳)多和田
  - 專(秋)山 (高)高見
  - 專(鈴)木本 (小)小田切
  - 師(井)村田 (泉)鈴木
  - 一(上)野谷 (中)平手
  - 專(下)川口 (鳥)野山
  - 專(皆)川三 (寺)金子(正)
- 午後五時半閉會す (委員)



雑報

叙任辭令

- 三月二十日 叙從七位 教授 篠原 一慶
- 四月二十八日 陸叙高等官四等 教授 小田切良太郎
- 同 陸叙高等官五等 同 駒井德太郎
- 五月二十九日 同 同 赤井直好
- 八級俸下賜 教授 赤井直好
- 同 同 岩城準太郎
- 同 同 西川 巖
- 同 同 水蘆幾次郎
- 九級俸下賜 同 高島 喜市
- 五月三十一日 體操副科弓術師範 楠 正路
- 補助ヲ囑託ス

卒業生諸君送別會

細雨霏々として下り初夏の緑は滴々の玉を結んで軒端に連る六月二日の午後三時より我等は親しき諸君に別れなければならぬ痛い胸を抱いて至誠堂に集つた。彩旗の下に蹲るは何れも皆運命に悶ゆる惱の子ならぬはない。沈んだ空気が轟と堂内に押し寄せて居る。

其中巢山君は静に立つて開會の辭を述べた。次いで校長閣下は訓示を與へられた、就職難の聲は目下喧しく聞えるが然し現今は同時に人物要求の時期であると言つて力を修養に用ゐざるべからざる事を最も懇切に警告せられたが卒業生諸君の胸には深く印象せられたことであるだらう。次で津山、井上、早上、堀、岡の諸君が交々立つて最も熱誠に送別の演説を爲し萬斛の感慨を開陳した。

次で我々は卒業生諸君の最後の御聲に胸を躍らせつゝ、謹聴したのである。

先づ田中君は壇に立たれて我々は飽くまで自己を解決せざるべからざることを熱心に説かれた、我等はたゞ滿腔の感謝に充ちて拜聴した、何時まで経つても此の感は忘れまいと期したのである。

成川君は次で登壇せられ囚はるべからずフリーなる空氣の間に眞理を追うて猪突猛進せざるべからずと最も熱烈に教訓を賜はつた、此の最後の御聲は恐らく永久に我等が腦裏から消えない者である。

兒玉君は例の至誠の辯を以て校風發揚の必要を痛論せられたのである。我等は少からず感奮されたのである、期して君の遺命に添はなければならぬと思つたのは僕一人では決してない。

次に宗玄君は沈痛な口調を以て去らんとすれば

後髪を引かれ止まらんとすれば心が落着かないと云ふ君の今の心理を説き明かし過去三年間の金城生活を回顧せられて一語一語に印象の鋭き征矢を投げ込まれた。此の土瓶此のコップにも名残りが惜まれると言はれた時の我々の感も亦實に切ない者があつた。

最後に畑山君は悠然と登壇せられ何も考へてなかつたが送る人送られる人の演説を聞いては黙して居れなかつた、斷片的に今日の感想を述べると言つて四高校風及び時習寮々風に就いて痛烈な辯を振はれた。我等は全く心胸を射貫かれた、そして是が聴きおさめとなることを思うて實に懐しさに滿されたのである。

日長の一日も暮色に包まれた時新木君は閉會の辭を述べ一同卒業生諸君の萬歳を三唱して解散した。(A生)

## 從軍の記

(五月五日粟ヶ崎方面)

戸をくれば外は一面の雨である、首を伸ばして空を見上ると藍鼠色の雲が幾重にも疊まれて、いつ晴れそうにも見えない、昨日のあの鮮やかな夕榮えに欺かれたのがいかにも癢に觸れる。八時、煙としぶく雨をかすかに浴びて七百の健兒は校庭に集合する、靴に散るつやくしいクローバーの若葉は、今日の勝利を言祝いで居るかの様。

例によつて嚟曉たる吠聲の下に校旗に最敬禮を施す、燦華たる星章四條の銀線、あゝまた何をか啓示する、何をか語る？。

校長閣下の訓辭及び小林指揮官の命令注意等が終つて軍は堂々なつかしき校門を後ろにする、進軍の曲は雨に明け行く町並みをゆるがせて、

北辰健兒の長軍は悠々石浦町南町を北へすむ。

停車場側から市街を離れると、初夏の野は此處から展開されて一望これ緑、加能の山々は雨にかすんで夢と連つて居る。

この頃から南へ急ぐ風が起つて雨はいよいよ任ふてくる、麗ら日なりせば友七百の行軍は一入趣きあるものを、頭巾を深く被つて泥の流れを見下しながら蕭々とすすむのは氣苦しい壓迫である、尤も此壓迫が行軍の本領であるかも知れぬ。此邊り路傍には梨畑が處々にある、空に浮いた潤葉の連りが何となく心地よく見受けられる、其下闇にこんもりと咲いた四株三株の躑躅の赤白はまさに自然の絶好の調和である、寂しいでも華やかでもない單に淡い調和に過ぎないのがうれしく感ぜられる。

一寒村に休憩、軒に倚りついて鬚の男が雨を恨

んでから約小一時間、軍は粟ヶ崎村に入る、時に十一時、社の石段をふみ上つて松原をぬけると砂山を越えて遙かに浩洋たる日本海が荒んでるのが見える、潮風は更に雨脚を吹いて砂に開いたスミレの花が人なつかしと許りに揺いでる。

軍はこゝに背囊をおろして晝飯を喫するべく命令をうけ、三々伍々松の茂みに雨をさけつゝ握飯を食ふ、腹滿つる頃雨は何思ひけん小降りになりて、海に落ちて行く雲の流れは空の一方に明るみを見せて瀧の様、岸うつ波の音のみ先づ耳を打つ。

十二時前方遙かに銃聲をきく、必せりこれ敵の來襲である、こゝに於て指揮官は眞廣い砂濱に漸次軍を散開せしめ、やをら運動を起す、千五百米突の前方高砂丘に点々たる黑影は正しく敵に外ならない、整々たるかな三軍の散兵線、長

蛇の蜒々たるが如く左右一貫、雨を貫く彈雨をものともせず、躍進又躍進、漸く敵に接近して行く。

般々の聲は耳をつんざき硝煙は砂と共に捲き上る、眞に壯快の極みである。三年生は最後の演習だと云ふので頗る眞面目にやつてるらしく、雨にぬれた砂にへたばりついて一生懸命實にえらいなんぞと考へて居る間に刻一刻と兩軍の距離は迫り戦は益々激しくなる、北辰健兒の武者振りは遺憾なく發揮されんとして居る此途端「着劍」の命令は下つたのである、あゝ遂に白兵戦の慘劇を見るのであるか。

時たま〜天雨を降す事急なり時も時「突込め」の命は全線に下り、各散兵は一團となつて敵陣地に突入せんとする其一刹那、天地をゆるがせて嚙腕と休戦の曲は響き渡つたのである。時一時、二十分間の休憩を與へらる、敵も味方

も會ふては同じ四高の友、共に手を携へて戦状を語り或は北海暮春の風光に思をやり、雨の午下りを心ゆくばかり味ふた後、今日の演習に態態参加せられ始終軍を督せられし石原少佐の御講評を承り軍はいよ〜金澤へ向ふ。

雨はすつかり晴れ切つて初夏の日は静かに照りつけてくる、懶げな白い雲は蒼穹に迷ひ迷ふては西や東の森へ消れて行く、雨上りの野は沐浴をすんだ聖者のまなざしにさも似て見える。叭聲につれて勇ましくも靴をふみしめながら校門をくゞり静かに校旗を奉送して解散したのは三時を過ぐる二十分であつた。

あゝ今日の一日よ、辨當を持つて濱邊へ行き鐵砲を撃つたに過ぎないと云ふ者あらばいざ知らず、吾人には意味深い一日の事實であらねばならぬ、單に手と足との活動に過ぎすと云はゞ云へ、吾人は内心にある要求があつたと云ふ事を

認めたい、そうしてこの追憶と希求とを胸に抱いて、吾等は長い旅の路を拾ひたいと思ふ。

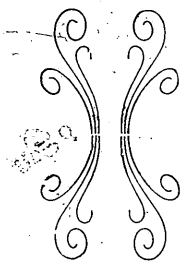
(しばの生)

寄贈雜誌

六條學報	每號	佛教大學壬寅會
校友會雜誌	二號	第八高等學校校友會
校友會雜誌	每號	第一高等學校校友會
桃仁會雜誌	四二號	天王寺中學校校友會
輔仁會雜誌	八三號	學習院輔仁會
校友會雜誌	二三號	京北中學校校友會
躬行會雜誌	五五號	躬行會
校友會雜誌	三五號	千葉中學校校友會
校友會雜誌	二七號	第六高等學校校友會
校友會雜誌	四二號	三重第一中學校校友會
三友會雜誌	一〇號	小松中學校校友會
桐陰會雜誌	四六號	東京高師附中桐陰會
嶽水會雜誌	四八號	第三高等學校嶽水會
嶽水會雜誌	一〇〇號	福岡中學校嶽水會
嶽水會雜誌	五號	名古屋高工校友會



學友會雜誌	二三號	札幌中學校學友會
校友會雜誌	三五號	麻布中學校校友會
校友會雜誌	二六號	東京高師校友會
以文會雜誌	記念號	靜岡中學校校友會
學友會雜誌	三、號	京都帝大以文會
城友會雜誌	二四號	石川師範校學友會
北生	五一號	東京四中校友會
七	一九號	杵築中學校七生會
十全會雜誌	六四號	金澤醫專校十全會



# 投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十四年六月二十二日印刷  
 明治四十四年六月二十五日發行

編輯兼發行者

印刷者

印刷所

發行所

吉村政行

生沼倍男

明治印刷株式會社

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地



